

---

# 天使と悪魔の共同戦線

鳴月 常夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天使と悪魔の共同戦線

### 【Zコード】

Z8550V

### 【作者名】

鳴月 常夜

### 【あらすじ】

見た目以外は普通の高校生、朝浦陽助あさうらようすけは都内の高等学校、滝原高校に通う生徒である。ある日の夜中、夢の中で自らを神と名乗る超適当な老人に出会う。その老人が言うには、人間界に天使と悪魔を一體ずつ送るので、面倒を見てくれと言うものであった。

しかし、その天使と悪魔は陽助が想像していた以上に意外なもので

……?

## 1話・天からの刺客（前書き）

新作です！ 今回もまたSFに挑戦してみました。  
更新率は上がると思いしますので、みなさんよろしくお願ひます。

## 1話・天からの刺客

始まりと終わりは唐突、つて何かの本で読んだことがある気がする。はつきりと覚えているわけでもないので、誰かが言つた言葉だったのかもしれない。

その文字を見た いや、聞いたとき確か俺は共感していたはずだ。

始まり、いつも唐突で待つてはくれない。抗つことも出来ずただただ、迫りくるもの。

終わり、こちらもまた唐突で待つてはくれない。逃げることもかなわない。

対の存在のはずなのに、すごく似ている。意味を入れ替えても通じるような気がする。

と、言ひよりなんで俺がこんな話をしているのかというと、純粹に暇だからだ。

今は昼休み。 しかしながら俺の周りには人一人いない。誰もが遠巻きに眺めているか、離れているかだ。 どちらも同じか。

その理由は十分自分で理解している。

目つき、雰囲気、愛想……etc. 確かに俺は人付き合いがそんなに上手くはない。むしろ下手だ。

目つきも良くはない。三白眼がどうだとか目が鋭いとかは知らん。そんなことで、ヤンキーだと不良だとか言われたりする……いや、しない。

しないけど、周りに人がいないことは確かだった。

先に否定しておくが、不良ではない。煙草も酒も薬もしない。ここばかりははつきりと言つておかなければならない。

そんな俺にも声をかけてくる物好きな奴がいる。物好き……とは違う?

「どうしたの？、朝浦くん。 そんな怖い顔して」

ほら来た。昼休み終了十分前に自分の席に座り、かつ俺に話し掛け  
てくれるこの女。

歌音 美里。姓も名も下の名前みたいな奴だ。

そして俺の前の席である。

「怖い顔はいつもだ」

いつも通りの切り返し。ここから昼休み残り時間は会話に使われる。

「あはははっ、やうだつたね。そつこねばさー」

と、まあこんな具合である。

滝原高校生、2年C組、朝浦陽助。

そんな俺の生活は面白すぎるのもなく、退屈すぎるのもなく平凡な生活を送っていた。

面白いことは望んではいなかつた。

だけど、退屈も望んではいなかつた。

なんか今日は対比ばかりだな。

そう思つたころにはもう昼休み終了5分前だった。

「でさ、…………聞いてる？ 今他のこと考えてたでしょ」

「ああ、…………今日は対比ばかりだなって」

「？ どうしたの急に。何か悩み事？」

ちよこん、と高めに結んでツインテールにした髪を揺らしながら首をかしげる。

きゅるん、と目が心配そうな光を見せる。

歌音は女子でも可愛い方の部類に入ると俺は思う。だからと云つてこれはどうなんだろうか。

素でやつてこいるのだとしたら恐ろしい。

「や、…………なんでもねえよ」

「そう？ 無理には聞かないけど、困つたときまお互い様だからね？」

上手いな、歌音は。

自分から突っ込むことをしない。相手が頼つてきたら、本気でそれに応える。

なかなか出来た人間だよ。何で俺なんかに構つのかねえ……。

あ、俺が一人だから。

「さ、次は英語だよ」

何が楽しいのか、鼻歌交じりに教科書を準備する歌音。

そこには紛れもなく平和だった。

深夜、がたがたと風によつて鳴り響く窓の震える音で目が覚めた。朝はあんなにも天気が良かつたのにこれはなんだろう。

眠れなくなつてしまひで仕方なくベットから起き上がる。リビングの電気をつけ、テレビをつける。

謎の低気圧が日本列島に接近中で……雨風が強いです！ ああ

あー

情けない声を出しながら風にされるがままになるレポーター。大変だな。

ソファーに腰掛け、ぽちぽち……とチャンネルを変えてテレビを流し見する。

リビングに反響るのはテレビの音のみ。それはそつだらう、俺は一人暮らしなのだから。

両親に無理を言ってマンションの一室を買ってもらつてここに住んでいる。誰もが憧れるあるいは夢の一人暮らしがいつわけだった。もちろん親には感謝している。

俺は不良ではないのだから、高校をしつかりと卒業した後に就職し

て親孝行するつもりだ。

じ、そんな話はこゝにしたが覚めてしまった。ナニコト話を見やると午前3時。

なんて時間に起きてしまつたんだ。  
ガガガガガ、と風がさらりに強まる。窓が振るえ、今にも割れそうな勢いである。

たぶん、というかまず眠れないと思う。俺はほんの少し嫌いだつた。

暇つぶしにすることもないでソファーで横になる。こうすれば多少は眠気が襲ってくるであろうという考えだ。

「オーン、『オーン』、と遠くで音がする。看板でも吹き飛ばされたのだろうか?

めきめき、と嫌な音。マンションが軋んでいるのもしね。どう  
れほど風が強いんだ。

「アアアア」と地鳴りの音。地震……か？ その揺れは激しさを増し、縦揺れへと変化する。

「でも、マジかよ……ありえんだらー?」

身体を起こして辺りを見渡すと、そこはもう俺の知っているマンションではなかつた。

空気が澄んでいて明るい先ほどの天候とは打って変わつて晴天だつた。

- 1 -

混乱して座り込んで状況を整理しようと試みるが、それも上手くいかない。

夢か、これは夢でいいのか？ それにしては五感がやけに反応している………… というか夢にしてはリアルだ。

すつ、そこで俺の頭上から影が降ってきた。

「此の此の此……かね」

「だ、誰ですか」

こちらを見下していたのは白髭のおっさんだつた。どこか仙人を思わせる風貌をしていた。

杖だつてついてるし、髭が地面すれすれまで伸びてるし。

「ワシは大天使、いや神様である！」

「こんななれなれしい神がいるかよ……」

「嘘じやない！ 本当じやもーん」

そう言つて神様（仮）は頬を膨らませたりしてこる。もちろん可愛くないし。

加えてヤバい、むかつく。夢の中のはずなのにつづえ腹が立つ。初対面の人間にここまでイラッとしたのは初めてかもしねない。

「まあ、そんなことはどうでもいいのじや。明日からお前のところに天使と悪魔を一匹ずつ送るからのー世話してやつてくれ」

「まったくもつて意味が分からないんですけど。唐突にもほどがあるでしよう！」

「下界に修業のために仮住まいが必要の一。普通……いや、とりあえず頼んだから」

「適當すぎんだろ！」

「はいさようならー」

神様（仮）がそう言つと周りの景色が液晶のごとく大破していく。崩れ落ちた風景の隙間からは真っ黒の空間が現れ、俺はそれに？まれていった。

「夢であつて欲しかつた……」

朝目が覚めると、黒い羽を生やした小さな女の子と白い羽を生やした少女がじやれあつていた。

といふか、一方的に白い羽の少女が黒い羽の女の子に向かつて何事かを話していた。

「「はつー?」」

両方は俺に気づくと立ち上がり、深々とお辞儀をした。

「私たちは天界からやってきました。単刀直入に言いますと、私達はこれからあなたのお世話をになります。じ……神様からお告げを頂いていると思いますが?」

白い羽を生やした少女 おそらく天使であろう子がそう言つた。

ああ、確かに聞いているとも。夢の中で、な……。使いが2人ほど修行で人間界に行くからよろしく頼む、と。とりあえず送つとくからがんばつてねー、みたいなノリで。

「……聞いてる」

「ひやはははつ、そうか。じゃあ、わ……アタシ達はここに住むことになつから、よろ……よろしくうー」

黒い羽を生やした女の子 おそらく悪魔であろう子がそう言つた。

それも聞いた。そして、この非日常が俺は何で受け入れられるか、なんだけども。じつじつと昔にもあつた気がして……今は記憶にないんだけど確かにあつたんだよ、昔。

だから驚かないって言うか、驚いても何もいいことがないって言つか……。

起きてしまつてこることは決して、受け入れるしかないと思うから。

「あの……どうかされましたか、ゴ……陽助様?」

天使が顔を覗き込んでくる。あまりにも整つた顔に思わず見惚れてしまう。

「つて! なんでもない。……2人、名前は?」

「私の名前はミコと呼んでください。下等……いえ、陽助様」

どうぞよろしくお願ひします、と礼儀正しく頭を下げる天使、ミコ。

「アタシの名前はスイです、つだ! よろしくう!」

一瞬頭を下げるが、一度びくりと体が跳ね上がると、この

ちにガンを飛ばしてきた。怖くない。

むしろ、小さな女の子が『怒つてゐるぞつ』つて言つたときの顔にしか見えない。

ミコより頭一個分低いスイは、身長と顔のせいもあってかなり幼く見える。

と、話がずれたな。

「で、俺は具体的に何をすればいいんだ？ 修行つて言つても俺が教えられることなんかないぞ」

「いえ、大丈夫です。学校に通い、人間と触れ合つことが今回の目的だそうです。なので、下等生物……いや陽助様にはそのサポートをしていただきたいと思つています」

「何かおかしな点は見当たらないだろうか？」

「じゃあ、スイもおんなんじつてことでいいのか？」

「ひうつ！ ああ？ ……ああ！ オッケーだ！」

「何かおかしな点は見当たらないだろうか？ 気のせいでは……ないだろ！」

「ちょ、ちょつと待て。俺は何か大事なことを見落としている、と

「いか見て見ぬふりをしているような気がするんだが……」

「いきなり饒舌になりましたね」

「こいつだ。

「おい……ミコ。お前相当性格悪いだろ？」

「何を根拠に言つておられるのですか。あなたのような下等生物……いや間違えました、陽助様にそんな洞察力は備わっていないかと私は考えます」

「肯定つてことでいいか！？ それに間違える要素がどこにあるんだよ！ 最後の方も誤魔化してゐるつもりかもしれないけど結構貶してゐるからな！？」

「いきなり饒舌になりましたね（笑）」

「（笑）じゃねーよ！」

「あわわわ、喧嘩はよくないよおー。ミコちゃんも陽助さんも……」

……はつ！

俺とスイだけが、この部屋の中で凍りついた。

「あ、えと、喧嘩なんかしてんじゃねえよカスビもがあ！」

「すべてにおいて遅いわ！ てめえもキャラ作つてやがったな！」

「んなわけないだろうがあ！」

「だから遅いっつうの！」

「急に饒舌に」

「それはいっての！」

なんやかんやで騒々しい朝だった。折角の休みの日の一日の始まりがコレだった。

「で、平田はどうするんだよお前！」

朝食を3人（？）で取り終えた後、テーブルを囲んでこれから口ひいて話し合つ事についていた。

天使や悪魔も食物を取るんだなあ、と無駄に知つてから5分後の話である。

「もちろん学校に行きます。すでに許可は出ています。ジ……神様は何でも出来ますので」

さらりと言つてみせる//コからは、冗談を言つている様子はない。それにして、取り繕つてる感がビシバシ伝わってくる。

なんか早くもうんざりしてきた……。

「わつ……アタシも行くことになるからなつー、覚えておけよー。」

こつちまこつちで、無理にがんばつてる感がすげく出ている。

それが可愛らしく見えているのも一つの問題だとは俺は思う。どう考へても悪魔つて言う感じじゃなー。

「どうせそんなことだろうとは思つていたけど……羽はビースんだ

？」

「ステルス機能が使えますので」「安心を。ゾウリムシ……いえ、  
陽助様が気にかけることはおそらくないかと」「わざとだる。切れて良いのか？」

「そんな怖い目で睨まないでください。震えてしまつて立てません  
嘘だ。超余裕、見たいな顔してんじやねえか。

「ここここ……怖いよお」

涙目でカーテンに包まつてゐる奴一名。言わすとも解るだらう。

「……まあいい。それよりお前にここここ」

ピンポーン

玄関のチャイムが鳴つた。正確に言えば、エントランスからの通信  
だが。

「んあ？ 誰だろ」

モニターで確認すると、一一一と笑う青年がダンボールを抱えて  
いた。

「きたよつですね」

「そだねー…………はつ！ そだなつ！」

二人して同じような反応を見せる。じつやら宅急便のようだ。

ダンボールを受け取り、部屋へと戻つてくる。

これ、なんだ？

「早速開けましょう」

出でたのは、制服・カバン・体育服……etc.

「コレは一つの可能性を表してゐた。生活用品が多い……。

「お、おい。まさかお前ら…………ここに住むわけじや、ないよな？」

そんなときだけ一人はシンクロしたように声を重ねて言つ。

「「あたりまえでしょ」」



## 1話・天からの刺客（後書き）

いかがでしたでしょうか。

見た目ヤンキーな陽助に加えて性格破綻天使ミコ、超ビビリ悪魔ス

イが主な登場キャラクターとなっています。

この三人が繰り出す日常とその他の出来事を楽しみにしていてください！

これからもどうぞよろしくお願いします！

## 2話・名前の付け方

昔、夢で見たことがあった。お前は統率者になるのだと。この間の夢のように適当なものではなかつた。真剣な声で、そして真剣な眼差しで俺を見つめて。

もう一度、お前は統率者になるのだ  
言つている意味が理解できなかつた。それもそつだ、小学5年生だったころの夢だ。

なのに今でも、はつきりと鮮明に残つてゐる。

これはこれは不思議なことだ。しかし、統率と言われても何を統率するのか俺には分からなかつた。

そして俺が非日常を受け入れられるのが最も理解できなかつた。それより前の話なのだが、今と同じことがあつた気がする。気がするのだが、覚えていないので気がするという程度でおさまつてゐるのだ。

性格のねじ曲がつた天使とビビリの悪魔。こいつらと理解不能な日々をこれからすこさなければならぬというのも、自然と受け入れられていた。

「アオミドロさん、起きてください。そして使用人のように私たちに朝ご飯を提供してください。私たちが餓死してしまいますよ？」朝から抑揚のない声で平然と毒を吐き散らす天使に起こされた。いや、すごく可愛いのだが性格が破綻しているので起こされても全然うれしくない。

「なんだアオミドロつて……。そして訂正をしないお前が怖い」

「朝から色々と元気ですね。突つ込みとかその他も」

「さつさと部屋から出てけや！ つか、まだ6時じゃねーかよ！」

「私は規則正しい生活を送らないと気が済まないんです。こうわけで協力してください」

「とりあえずあと一時間は寝かせてもいい。それまでお前も我慢してろ」

そつ言つて布団をかぶりなおす。

「…………」

とくに返事もなくなつたのであいつも納得したのだろう。俺はそのまま眠りに。

「つ、おあー」

腹部に思いつきり肘が入った。

「決まりました、じやすとみーと

キラリ、と田を輝かせて親指をぐつと立てるミコ。

「嫌でも田が覚めましたね、あ、朝ごはんを作つてください

「て、…………てめつ

「…………おなかが痛いのでしょうか？」

「何普通に聞いてんだよー？ お前の仕業だろつが

「記憶にございませんな、はつはつは

「てめえ何キャラだよー！」

俺とのやり取りに満足したのか、俺の部屋を出ていくベベコ。ついでこ

と咳いて出て行った。どんどん腹減つてんだよ…………。

「朝ごはん

リビングまで行くと、すでに制服に着替えたミコが椅子に背筋をピンと伸ばして座っていた。

そういうえばスイの姿が見当たらない。まだ寝ているのだろうか。

そんな俺の気配を察してか、またも抑揚のない声でミコは言つ。

「あの子はまだ寝ていますよ。たぶん遅刻ギリギリまで起きないと私は思います」

珍しく一切毒のない返しだつた。

「わかつたらさつと飯作れ。……作つてくだ、作れ」

毒は盛つてあつた。

「なんでいつたん敬語に直そうとして途中で止めて命令文に落ち着くんだよつ！？」

「朝から陽助様は饒舌ですね。しかし目つきが怖いです」

知つてゐるわ。ほつとけ。

心の中でぶつぶつ言いながらも朝食の準備をする。いつもより一時間早い朝食作りである。

いつも軽くすませるメニュー。もちろんトースト一枚とミルクティーという組み合わせである。トーストにはマー・ガリンしか塗らない派である。マーマレードとかジャムなどは決して自分には合わないのだ。

チン、ガション。ヒトーストが焼きあがつた。適当にマー・ガリンを塗りたくつて皿に載せてテーブルに並べる。

「む、なんですかこのパン一枚は」

「文句言うな、俺がいつも食べている朝食だ」

「流石は下民。食事バランスが悪すぎて最早支えるどじの騒ぎではありませんね。万年横倒し状態ですね」

「マジでほつとけや！ とこうか居候のくせに文句を言つなー」

「もぐもぐ……」

「あ、いや。もづ聞いてすらいないのか。チツ、スイ起してくるわ怖いです」

微塵も思つていない癖に平坦な声で囁くように言つてきた。

「、突つ込んでられん……シカトだシカト。

ミコとスイ共同の部屋の前で立ち止まりノックする。一応念のためだ。

「スイ、寝てんのか？」

中からは声が聞こえない。寝ているのだろう、ドアノブに手をかけて中に入る。

床に敷かれた布団は一枚はきれいに片づけられていて（ミロのものだろう）もう一枚には黒い羽根をはやした少女が寝ていた。

「おこ、ちょっと早いが朝食作ったから食え。それに今日から学校だらうが」

「つうん……ふん。 んあん、むにゃ」

「起きろつづーの！」

思いつきり布団を引っ張る。そこに見たものは少女の下着姿だった。

は？ はあ？ HA？

「てめえはなんで下着なんだよ！？」

俺の大声に目が覚めたのか、パチヒスイの目が開く。自分で自分の体を見まわし、かあああああつと顔が赤くなる。そして俺の顔を見る。

「ひうつ！ 悪魔がいますう！」

俺から布団を奪い取つて体を隠し、ギザギザギザギザと部屋の隅まで後退する。

「なななな、なんでここにいるですか！？ 夜這い？ いや朝だから朝這い！？ そんな言葉ありましたっけーー！ 私頭悪いからわからないんですつ、とりあえずごめんなさい貞操だけはっ！」  
「マジで突つ込みどころが多すぎで腹立つんだけどもとりあえず誤解は解いておこう！ 俺は貴様を起こしに来ただけだあ！」  
「ひう、じめんなさいー、怖いからすいませんー」

ギイ、とドアの隙間からこちぢりを見る目。

「ロリコン……」

ミコだつた。

「てめえはてめえでなに不吉な」と言つて去りうとしてんだおいー・

待てやー・

「いーやー、て・い・そ・うがー」

「だから無表情そつこつひひひのせひめひめー・

どつたんばつたんと朝から超騒がしかった。

「疲れた」

なんとか学校までたどり着いた俺は机に突っ伏していた。  
朝から体力を使うことなんてはつきりいつてます俺の中ではありえないでの、体がおかしくなりそうだ。今日の授業の大半は睡眠になりそうだ。

「どーしたの、朝浦君？朝からぐつたりしてるね」

前の席から声がかかる。歌音だろう、俺は顔だけ向けて適当に返事をした。

「うわ、こつもより顔怖いよ？」

「ほつとけ……」

「そういうえば今日転校生が来るんだってね！ それも2人だよ~」  
何がそんなにうれしいのか、歌音はいつもより笑顔である。

「とりあえず俺のクラスには来ないでほしい」

「あーっ、なんでそういうこと言うかなあ。朝浦君、これは友達を作るチャンスなんだよ？」

「いや、…………なんでもない」

いろいろ否定したい部分があつたが、もうなんだか面倒くさかった。  
それに転校生の正体わかつてるからな。マジ面倒な奴らだよ。

「このクラスに転校してくるといいね」

「あー、ああ」

俺は適当に相槌を打つて誤魔化した。もう面倒くせえじつにでもなつちまえ、と。

でも、このクラスには来るなよ、と。

俺の願いは届いたのだろうか？

それは次に目が覚めてからのお楽しみだ。

わ、おやすみなさい……。

「朝浦君、朝浦君っ！」

歌音のはしゃぐ声で俺起<sup>の</sup>された、時計を確認。30分程度しかたつていない。

「どうした、騒がしいぞ」

「優美さん、可愛いよ?」のクラスに転校してきたんだよー。」

「優美?……ああ

ミココミ ゆみ 優美か。了解。再び寝よ<sup>う</sup>とする俺を止める歌音。

「んだよ」

「なんだよじやないよう。あんなに可愛い子が転校してきたのに興味がないって男の子として駄目だよ。」こののはガンガンいかないと

「わりい、どうでもいいとかいつレベルじゃないんだ。寝かせてくれ

「一目見るだけでいいからうつー」

首を曲げられ俺の視線は生徒が集まる中心へ。そこには普段は黒い羽根を生やしているであろう少女がいた。……あ?

「つておかしいだらうが!」

「うわっ、びっくりした朝浦君。いきなりびしきやつたの?俺は構わずスイのもとく。」

「お前はなんでそんなにめんどくせえ名前にしてんだよ」

「ななな、なんでつて……。ミコが」

「じゃあミコはなんて名乗つてんだよ。翠ちゃんか、ああ?」

「いえ、普通に美由<sup>みゆ</sup>ですけど……?」

「なんでだよ? いきなり意味不明な」とあるんじやねえよ!」

「ひう」

周りからは非難の声。

朝浦が転校生を威嚇しているぞー。とか早速びびらせてるわー。とかかつあげ発生かー。とか。

「ひうひう、朝浦君つ。優美ちゃん怖がらせ怖がらせたらダメだよう」

「べ、別にアタシは怖がってねーけどな」

体格に不釣り合いな言動。とか学校でもキャラつくのか、長くは持たないだろうけどな。

「チツ、俺寝るから。邪魔すんなよ」

そう歌音に告げてから、俺は席に戻った。

その時また別の場所で出来てる人、だかりの中から「」がこちらを眺めて笑っていた（ようくみえた）のはシカトするべきものだと脳が警告していた。

俺はもう学校ではあいつらに関わらんと決めた。

今みたいに超面倒になるからだ。今の騒ぎで俺はさうに不良のレッテルが張られたことだろう。転校生を脅す朝浦陽助、か……。マジ萎える。

俺はすぐに深い闇へと落ちて行った。



「うして天崎美由」と「」と黒崎優美ことスイが何故かふたりそろつてこのクラスに転校してきた。

転校生が同じクラスに付りえないだら……。これもあるの神様とかいう奴の仕業か。

なんでもアリだなもう、しかし俺は学校ではそんなに田立つタイプではない……のであんまりあいつらとは関わりたくないとは思つていた。

学校では、せめて学校では静かに暮したかった。

「下等……いえ、朝浦さん……いえゴミゴミ。私たちは今日転校してきたので学校内の案内をしてくださいませんか？」

さつそく関わつてきやがつたあああつ！

なんなんだ、何故俺なんだ。他にもいるだろ、歌音とか！

「そ、そうだぜ！ 案内しやがれこのやうー！」

優美……いやスイがいかにもつて感じで迫つてくる。いやだから怖くないから、表情歪んでるし。

「ほらほら朝浦君、折角美少女転校生が迫つてきてるんだよ？ 仲良くなるチャンスだよ！」

歌音もなんだか面白そうにはしゃいでくる。駄目だこれは、避けられない。

だからとこつておとなしく従う俺ではない、学校では静かに暮したいつて言つてるだらう！

「じゃあ歌音、俺の代わりに案内してやつてくれ。俺が行くとまた変なうわさが立つだろ……転校初日から浮いてたんじゃあこいつら先が思いやられるだろ」

俺は頭を机に伏せたままそつと言つた。

そう、こいつらのことを考えて言つてこるので。そのとこり歌音なら理解してくれるだらうし、こいつら一人も理解できるだらう。

「何を言つてゐるのですか？ あなたの噂なんてとっくに取り返しのつかないことになつてゐますよ？ このクラスでさえこんなに風潮されているのですから……悲しいですね」

「だよなあ！ アタシもさつき色んな子から聞かされたしげサッ

何かが深く突き刺さつた。

俺……いや、分かつてたけどさ、何この気持ち。しかも俺が心配してやつてこゐるのにだよ。

何こいつら……。

「え、え……え～？ 朝浦君が言つてゐる」という意味じゃないと、思うんだけどなー？」

歌音が困り顔をしながらもフォローしてくれる。それがまたつらかつた。

俺はこのとき確信していた。学校も安静の場ではなくなつたと。最悪だ……神よ、俺を見捨てたのか……？ いや神はあのおっさんだつたか。もう終わつたな俺、神の加護とか受けるとか受けないとかいう問題じやねえな。直々に見捨てられるよ。

「どうなんですか、『ミミタシ』。案内してくれるんですか、どうなんですか？」

「最早訂正もなしがよ……いいよ、いつてやる。その代わり何言われるかしらねえぞ」

「や、やつた……じゃなかつた。やつと分かりやがつたかあ！」

早くも仮面が外れそくなつていい suisはシカトしておいて俺は席を立つ。それだけで少し教室の雰囲気がざわつとした気がする。

心が折れそうだ。

「私も一緒に行つていいかな、朝浦君」

きゅるんと可愛く輝く瞳を最大限に利用して歌音はそう頼みこんでくる。これが素でやつていいから恐ろしい。つていうか、今の流れだとついてきて当然じゃないのか？ いちいち礼儀正しい奴だな。

「構わないよな。美由、優美」

「きやー、いきなりしたのなまえでよばれたわー」「

「なんつう棒読み！ しつかしイライラするなお前はー！」

「お、おまえっ。アタシのこと名前で呼ぶなよな！」

「え、えーっと……とりあえず行こうね？」「

唯一まともだったのがやはり歌音美里だった。

「んで、ここが食堂。俺は大抵ここで食べるかわいい行つた購買でパンを買って昼は済ませてん」

「かわいそうに、いつも一人で……お友達いないんですね。流石ダンゴムシレベルですね……。あ、いえダンゴムシ様に失礼ですね。この階級ピラミッドの最下層が！」

「え、え、……美由さん？」

「空耳でしょうか？」「

「まぎれもなくお前の言った言葉だろ？が！」

歌音が動搖し、ミコがスルーし、俺が突っ込む。

食堂に溜っていた下級生が驚き早足で逃げ出していく。ああっ、そんなんつもりじや！

「流石は魔王の生まれ変わりとしか言い表せない眼をもつた朝浦さんですね。ああしました。朝浦さんと呼んでしまった……屈辱ですね」

止まることなく吐きだされる毒に対して俺はなす術がなかった。俺は解毒薬なんて持つてきていない。このまま毒に犯されて死ぬか俺。

もう歩く力も残っていないかもしない。

歌音と言えばこちらの会話に気付かずスイと話をしている。スイは取り繕うのに必死で冷や汗をかいている。どうしてもアレ、取り繕

う必要があるのか。

「あれ、脣さん？ ゴミクズさん。次の場所へは行かないのですか？」

「こちらはこちで毒しか吐かないし、どう考えたっておかしいわ！」「とりあえず時間がないからここまで、次の休み時間に他のところ回るからそれでいいだろ？」

「そうですか、何かイラッといえ、癪に障るのは何故でしょう」「さあ、なんで……でしようが、ねえ」

心は脆く崩れ去った。

ミコとスイは口を開かなければ美少女である。ミコは肩までのショートな茶かかつた髪をいつも綺麗にセットしている。背丈も女子生徒の平均より上でスレンダーな体系をしている。そのくせ出るところは出でているというなかなか魅力的な身体なのだ。スイの方は、ミコより頭一つ分背の低い身長で、普通にしていれば愛らしいと表現がぴったりと当てはまる。髪は黒髪ロングで腰辺りまで伸ばしており、艶<sup>つや</sup>やかな光沢をもっている。身体の方は言わずもがな、特定の人人が喜びそうな感じだつた。

二人とも美少女ということは俺だつて認めてもいいと思う。現に授業中の今、ミコとスイは男子諸君の視線を集めている。ミコの方は気にする様子もなかつたが、どうやらスイはそもそもいかないらしい。妙にソワソワしているし、頭を搔いたりしている。あいつの性格からして恥ずかしがつているのだと俺は思う。

他に分かつたことと言えば、ミコが頭がいいということ。転校初日で初授業だというのに当てられても動じることなく淡々と答えを出していく。英語の時間ではテキストの発音も完璧だった。

そしてこれもお決まりというように、スイは勉強ができない。当たり前こそしていながら、先ほどから冷汗をタラタラ流しつつノート

を取つてこいるところを見ると、多分できない。  
つていうか、悪魔らしく振舞うのであれば勉強なんてしなくていい  
と思つ。

変なところで真面目な奴だつた。

「さて、この問題は……歌音。解いてみなさい」

ちなみに今は数学の授業中だ。スイは勉強を放棄したらしく、机に突つ伏している。ミコは授業が始まつてから一切動いていないかのようにピッシリと背筋を伸ばして椅子に座つていた。

「はい、ここは……」

歌音も真面目な奴だつた。俺はとつとまあ、普通に授業を受けている。普通つてのがどんなものかは想像に任せるが、決して不面目ではないといふことを心に留めておいてほしいと思つ。

「できました！」

「よし、正解だ。流石歌音だな

「えへへ……」

歌音美里。本当に不思議な奴だと俺は思つてゐる。クラス内や先生からの評判も良く、元気で可愛氣のある女の子。短いツインテールと光り輝く瞳が特徴である。成績も結構いい方。

そんな子が俺なんかとつるんでいる。いや、言い方がヤンキーっぽいな、俺は一般人。えーと、仲良くしてくれてゐるのだ。真面目な女の子は普通俺のような根暗なのがヤンキーなのかどつちつかずのような奴に接してくれるものなのだろうか。それとも彼女なりの平等なクラスメイトとしての接し方なのかな。そう言えば彼女はいつもクラス内の全員と一緒に話題を交わしている。彼女なりのスキンシップなのだ、と俺は考へるだとすると全く不自然ではない。会話数が多いのも席が近いというだけの話。ただ、俺のような奴と話していると変な目で見られるようになるつてことは覚えておいてほしいね。

放課後、俺は部活に入つていなかっため颯爽と帰るのだが……だが。

いつもは学校の喧騒から逃れるために早々と帰<sup>モモ</sup>る。しかし、しかしこいつらが俺の家に住み着くとなれば話は別だ。落ち着いていられない。

さて、どうしたものか……。

「あれ、朝浦君？」

学校指定の体育服に着替えた歌音がそこにいた。確かにこいつは陸上部だつたな……。それにしても……いや、なんでもない。

「どうしたの？ いつもなりすすべ帰つちやうのに。あ、ひょっとして新しく部活始めたの？」

「違うけどや……なんと言つか、帰つてもうるさいかなって」

「うるさい？ 朝浦君つて確か一人暮らしだったよね？」

「え、あ、まあ……つてかなんで俺が一人暮らしつて知つてんの？」  
「何言つてゐのー？ 前に話してくれたじやない、マンションに住んでるひるて」

「そりだつたかな……」

覚えていない。他愛もない会話は記憶から抜け落ちていくものなのだろうか。

俺に限つてそんなことは……あるかもしれない。

「…………」

無言で俺の前の席に座る歌音。春だからといってその薄着はどうなのだろうか、せめて学校指定ジャージを上に羽織るとか……。

「走つてたのか」

「そうだよー。でもなかなかタイム上がらなくつてさあ

「ふうん……」

他愛もない会話。

多分これも。明日辺りには抜け落ちているだろう。

「わりいな、やつぱ帰るわ

「あ、そう？ じゃあ私も部活に戻らつかな

「じゃ、また明日」

「うん、また明日ね朝浦君」

俺は歌音に背を向けて教室を出た。

## 4話・虚像のバー（前書き）

毎回想うんですが、タイトルと内容が一致しませんね  
- A  
- ;  
- ;

ゆつくりと家に帰ると時刻はもう六時を回っていて、そろそろ食事の用意をしなければいけない時間だった。こんなことを考えるのも、居候が出来たせいでのいつも俺ならばコンビニ弁当で済ませていたらう。何せその居候がうるさいのだ。栄養バランスが万年横倒し状態だとか、食事の時間はキッチリと決めてあるとか……。にぎやかになつたのは言つまでもない話だが。

「ただいまー」

学校でぼーっとして時間を潰してから家へと戻ってきた。すでにリビングの明かりはついていて、そこにはミコやスイが転がっているのだろう。

それよりも食事の用意をせねば。

「お帰りなさい、何の用事もないのに学校に居座り窓から同級生が部活をしている風景を眺め見るだけの非リア充さん」  
メイドよろしく玄関で出迎えてくれた天使は、半永久的に毒を生産し、相手に投げつけるというプログラムが組み込まれているらしい。  
「やめる……それ心抉れるから止める……」  
俺は半泣きで懇願したのだった。

「ふむ。確かに真実というものは時に人を傷つける刃物にもなり得ると天界で糞ジ……神様が教えて下さいましたね……」

何やら勝手に納得してリビングへと戻ろうとするミコ。つて何のために出迎えたんだっ！

「おー……なんと言つかせ、居候なんだから家主に対してもつと何かあつてもいいと思うんだが」

「何ですか？」『お帰りなさい（はあと）』。あつ、お荷物お持ちいたしますね。晩御飯の心配はしなくていいですよ、私が作つておきますから休んでいてください（さらになあと）』とこういふ具合にメイ

「どうりしくやつてほしかったのですか？」

全部ばれてやがる……いや、（はあと）はいらないが。

「残念ながらそんな人は画面の向こう側の新世界にしか存在しませんよ？ もしそういう生活が良いのであれば次元ごとお引越しをお勧めしますが」

「分かった、もう分かった……俺が悪かったから、もう止めてくれ」  
帰つて早々の猛毒地帯。家のベットで休んでも猛毒は治りませんよーと言われているようだつた。

安息の場は……ない。

「では、宿題が片付いていないので」

そう言つてミユは背を向けてリビングへと戻つていった。俺は玄関でうなだれていた。

ひでえ、ひでえ話だ。

同居・同棲というワードを聞くと何やらよいものに聞こえるが、これは違う。断じて違う。

いつも変わつてもらいたいくらいだ。

うんざりしながらも靴を脱いでリビングに入り、ソファーの上に鞄を放つてから台所へ。

冷蔵庫の中身を確認すると、かるうじて今日の夕食分の材料はあつた。と、いうことは自動的に明日の朝はトーストに決定だ。またミユに何事か言われそうだが、こればかりは仕方がない。

そうして俺は夕食作りに取り掛かるのであつた。

「いただきます」

いつも一人寂しく夕食を食べている俺だったので、静かなのはいいことなのだが、正直誰かが居る時の沈黙は気まずいということを知つた。

とこう」とで話題を振つてみることにした。

ミコに振ると一言余計な言葉が付く上に俺のライフが壊られるのを  
スイに話しかけることにした。

「なあ、スイ」

「ひやわつ…………ってなんだこのやうーーー」

「そんなに驚くことでもないだろ…………。まあこソレなんだだけじゃ、  
お前学校でもやんの?」

「そ、それってなんだよ。アタシが何だだだつて?」

「いや、もうソレだよ。キャラ作りの話だ」

「作つてなんかねえよー。これがアタシの普通だ!」

どう考へても虚勢だ。つていうか、見た目とのギャップのせいでどうしても微笑ましいとこつ感想が漏れてしまつ。

幼顔に低い身長、腰まである長い黒髪は綺麗つけやあ綺麗なんだが  
な。

「だつ、だから。作つてなんかなつーーー」

あ、あとそれに加えて声だ。どう考へても小さこ声…………ええと、表  
現としてはアニメ声?

だからこその、小学生程度の子供が頑張つて背伸びしてこむとこつ印  
象しか受け取れない。

これでも、悪魔なのだが(らしい)。

「今日の昼休みさ、歌音と話す時もわいわいなかつただひ。無理なら  
やめればいいだる」

「あ、アタシはつ、悪魔として舐められやけないのーーー」

「あー、わつ」

「まともに聞いてないだろつーーー」

ふんすかと怒つているちびつこ悪魔は全く迫力がない。

それに比べてこっちの天使は違つ意味で迫力がある。

「なんですか。あまつこひらを見ないで下せ。穴が空いてしま  
ます」

「いや…………」

「本当に穴が空きますよ? あなたの田上」

「俺の田かよつ！？」

「の調子だ。

天使と言えば、なんだか神聖だとか心が澄んでると言えばいいのか、まとめれば『優しくて良い奴』って想像すると感心。眞面目に、といつのか？

それなのにコロは話せば一言田には毒、一言田には毒、もうひん毒毒……。

口さえ閉じていればすく可愛くは見える。いや、見えるだけだからな。

肩に付くかつかないかぐらの茶かかつた髪の毛に女の子としては少し高めの身長。スタイルもなかなかではないかと思つて

。

「わやああああつー ピーマンが眼球につー。」

「何だか邪悪な気配を感じたので」

なんと言つことだ、野菜炒めのピーマンがどうしていつも的確に俺の眼球に。

避けられないくらい早いスピードで弾かれたピーマンは俺の黒田を覆つた。

「視界が縁に……」

「食べ物を無駄にしてはいけませんよ」

「誰がやつたんだ、誰が」

ミコは心を読めるのかもしない。そりやあ天使だったらその程度のことぐら出来るのはかもしれないが……。

「や、そう言えばお前達。金は持つてんのか？ 俺は弁当なんざ作らないから学校での昼は購買か食堂なんだけど……。ないなら渡さなくちゃいけないし」

「いえ、心配には及びません。糞ジジイ……いえ、神様からこくらかいただいていますので」

「容赦ねえなお前……」

「さうだよ、ぜー だからお金のことは心配する必要はない。

必要なものがあつたら自分たちで買つかうなー。」

「俺はお前のキャラ作りの弱さが心配だ」

会話で詰まるのさうなんだうつか。話す前に考へるべきだと想ひ。

「なあつー。今のはせーふ、せーふだつー。」  
完全にアウトだった。

ひつして夜も更けていく…………。

「と、こつじで居候のお前らにも働いてもらおうと想ひ」  
夕食を取り終えて、各自ソビングでゆくつしていたところへ声を  
かける。

スイはソファーから起き上がって、机に広げていたノートから顔を上げて、俺は台所で立っていた。

「チツ」

「おこそこー、舌打ちするな！」

「だ、駄目だよミコちゃん。住まわせてもらつてるんだから……少  
しは何かしないと……ハツ！」

「いや、もう遅いから。全部言つ終わつてから氣付くの遅いから」  
駄目だこつら……。

とりあえず気を取り直して……。

「何もそんな大きなこと頼もうつてことじやないんだ。家事を少し  
手伝ってくれればいいんだよ。夕食とか朝食とかは俺が作るからさ、  
掃除や洗濯は分担しようつて言つてるんだよ」

「なるほど、盲点でした。もし全てを任せていたのならば洗濯の際  
に陽助や……下等……が私たちの下着でハアハアするかもしれませ  
んしね」

「ひいいつう。気持ち悪いよ」

「するかそんなこと！ つてか無理に毒吐こつとするな！」

会話で消費するエネルギーがこんなに大きなものだとは知らなかつた……。

「だ、だから。とにかく、洗濯に関しては洗濯物籠を分けて用意しておから、分けて洗うこと！ 俺は自分で自分の分をやるからお前らは自分たちの分をやれつてことだよ！」

「そうですか」

「ああ、そうだ。あと、掃除に関してだけじ「これは風呂掃除の」とな。俺ら三人でまわしていくからな」

「何かと細かいですね。もっと大雑把なのかと思つていました。見直しました」

「そりゃどーも」

ど「にも褒められて「いる氣がしない。皮肉つて「いつの」か？」

「では、今日は私がやりましょ「う」

「え？」

「何か問題でも？ それと追加注文ですが、お風呂は必ず私たちが先に入ります。気持ちが悪いですから。それと覗きやラッキースケベ回避のために私達が入浴中は自分の部屋から出ないでください」

「ああ、…………それに関しては仕方、ないのだが…………言い方つてもんがあるだろ」

言い終わるとミコは風呂場へと向かつていった。

まあ、これで生活にあまり支障は出ないと想つ。面倒なことは早々に回避しておかなければならないからな。

それより、ラッキースケベってなんだ……？

ラッキースケベについて考えていると、ちょいちょいと袖をひつぱられた。

「ん、ど「うしたスイ？」

「ミコちゃんね、あれでも多分ホッとしてるんだよ、あなたがまともな人で。口には出さないけどよかつたつて思つてると思つよ。……」

「ハツ！」

「ハツ！ じゃねーだろお前！ 絶対わざとだらうが！」

「違え！ そんなこと嘘つてない！ アタシは……ええと、あれえ  
ー？」

「馬鹿かお前はー。」

マンション三階の朝浦家はいつもより数倍騒がしかった。

## 5話・先行少女（前書き）

夏休みが終わりました。 ( 、 · · )  
学校始まるううー

「うーむ」

雲ひとつない晴天の昼、朝浦陽助は屋上のベンチで一人考え込んでいた。

陽助の気持ちとは裏腹に澄み切つている空はいくらか憎たらしげで、陽助の目つきをさらに悪くした。

今このタイミングで屋上に人が来ようものなら風景と人物とのギャップに恐れを抱くだろう。そしてこれも言つまでもなくその人は逃げ出すだろう。

天使と悪魔との共同生活が始まつてから一週間が過ぎた。特に正体がばれることもなく、同棲がばれることもなく穩便に日々は過ぎていつていた。

そのところは陽助も文句は無かつた。しかし、変わったことが一つ。噂の広まり度合いと内容の誇張だ。

ヤンキー朝浦が美少女三人を昼休みに連れ回しているだと、いざなは校内の女子全員をひきつれてハーレムを狙つてているだと、天崎美由に様付けで名前を呼ばせているだと（これはミコがわざと呼んだために広がつたものである）。

色々とよくない噂…………何故か女関連のことばかりが出回つているそうだ。

だからこうして今の時間帯は屋上で一人飯を食つていたのだ。一緒に居るとまた変な噂が広まるかもしれない。

今思えば、転校初日にミコとスイが絡んでこなければこいつはならなかつた。しかも俺は忠告したし。

不機嫌になる。歌音までもが巻き込まれていることも気付いたからだ。

ガチャ、

「今日はいい天気だな」

「そうだな、こんな日は屋上で授業をサボるにかぎ  
つて、わあああつ！」

「何が  
つて、ひいにいにつ！」

俺の姿を視界に捉えたとたんに男子生徒が一人ものすごい速度で去  
つていった。

自分で思った通りの現象を田の当たりにして、テンションも下がる。  
普段からテンションが低い俺にとつてはよくないことだった。これ  
でテンションゲージは〇に、午後の授業には耐えられないかもしれ  
ない。

はあー っと深いため息を吐き、ベンチにもたれかかって空を見上  
げる。

高く、遠く、澄んでいて届かない世界。そういうえば  
と思ひだす。

神の爺さんと会つたところもこんな風に綺麗な空が広がっていた。  
天界と言つただろうか、あれはどこにあるのだろう。この空の上?  
それだと俺が見た天界の空の理由が説明できない。もしかして夢  
の中だとか? それだったら説明はつくが、なんだかメルヘンチッ  
クだ。

とはいって、天使と悪魔と暮らしていけるこんな状況なのだから何があ  
つても驚かない気はするが。

要は、なんでもアリつてことだろ?。

「朝浦陽助つ！」

凛とした声が屋上に響き渡つた。

俺は何事かととっさにベンチから身体を起こし、辺りを見回す。声  
の主は屋上の入口にいた。

長い黒髪を後ろに束ね、ポニーテールと呼ばれる髪型をした彼女は両腰に手を当てて仁王立ちをしていた。

前、横ともに髪は規定内の長さで留め、ひざ下までの女子高生にしては長いスカートを履き胸元のタイも歪んではない。それでいて可愛らしさと言つた美しさを出すのだから女と言つのはどんでもない。

だがしかし、俺はこの女生徒と知り合いではなかつた。それゆえに何故名前を呼ばれたのかが分からなかつた。

「え、えつと。何事ですか？」

動搖を隠そつと試みるが返つて裏目に出で、声がひっくり返つてしまつた。

ベンチから立とつとするが、止められる。

「動くな！…………そこに座つたままでいい」

何、何これ。今から何が始まるんですか。この人の居ない屋上で何が！

「お前だな、女子生徒を一気に二人も連れ回して不純異性行為に勤しんでいる朝浦陽助と言つのは」

「ちょ、違つ。何その誤解！？ いつの間にそんな悪性の強い噂に派生したんだよ！」

前より格段にレベルアップしそぎだろ！

「証言者がいるんだ。 彼女たちの転校初日に声をかけ、校内を案内すると見せかけて…………そんなことおつ！」

「色々おかしい！俺から声をかけたわけじゃねえ！ あいつらが勝手に！」

『

死ねばいい

「え？」

なんだ、今のは。

氷点下を思わせる冷たい声色で願うよにして囁いたのは、誰だ？

「なんと言つ」などですか！ あつちから言い寄つてきたからと言つて弄ぶのですか！ くうくう……」のような下半身が本体であるよつな男はすぐに成敗されるべきだ。 くそぅ、武器さえあれば……」

空耳か？ つ…………ていつかなんだこの展開！？ 」のまほじやあ俺が一方的にやられてしまつ。 といつか、俺の話を聞いつともしてくれねえ！ 噂つて言つものせ」今まで邪悪なのか…………。何か、打開策はつ…………」

ガチャ

「あー、朝浦くん！」にじたんだ～。 ちつとも姿が見えないから探してたんだよ？」

屋上への扉から現れたのは歌音だつた。 小さなツインテールを揺らしながら太陽の眩しさに目を細めていた。

ナイスタイミングだ、歌音つ！

心の中でせつ叫び、ヘルプを出す。

「あれ、結穂ちゃん？」こんなとこで何してんの？」

「美里つ、危険だ！ 近づいてはならない、この男は歩く生殖器だ！」

「何を口走つてんだこの女は！ つていうか歌音、助けてくれつ」

「え、え？ 何がどうなつてゐの！？ とりあえず結穂ちゃん落ち着いて～～！」

「と、言つ」などだ。 俺は何もしてはいない、無罪だ」

一通り歌音がこの委員長氣質の女子生徒に説明したといひで落ち付いた。

「つ、…………美里はそんなことないと言つてゐるが、実際のところは分からぬではないか。 脅されてゐるだけかも…………？」

「ち、違つよ結穂ちゃん。朝浦くんは顔は怖いけど悪い人じゃないよ」

「確かに犯罪者級の人相の悪さだが……」

「ほつとけや！俺の顔の話はいいだろ？」「

屋上のベンチに三人並び、討論会が始まっていた。ところでこの先行少女は芹川結穂せりかわ ゆいほと言つらしい。同じクラスではなく、隣のクラスで学級委員長を担つてているのだとか。歌音とは一年生の時に知り合つたらしく、仲がよいのは家が近いこともあるからだそうだ。それにしたつて突つ走りすぎだろ……。

「わつ、また舐めまわすよ？ 田で美里を見る……いや違つ、私を見てる！？」

「見てねえよ！ どうじてお前はそつなんだよ、なんか俺に恨みでもあんのか！」

「あ、あはははは……」

早くも仲介役を放棄しようとしている歌音を救うかのよう、予鈴が鳴つた。

「さて、時間だし教室に戻ることにじよ？ 美里、気をつけてね」「大丈夫だつて結穂ちゃん。元はと言えば私が朝浦くんに構つてたから仲良くなつたわけで」

「もう俺先戻つてるからな……」

疲れ果てた身体と脳を休ませようと屋上から逃げるようにして引き上げる。屋上の扉を閉めた時に何か聞こえた気がしたが、気のせいだろう。疲れすぎて幻聴を聴いたに違いない。階段を降りながら思いだしたことがあつた。

「一年の時に歌音と一緒にたつてことは……俺とも一緒にたつてことだよな……？」

何故だか彼女のことは覚えていなかつた。

教室に戻ると各々が席に着き始め、授業の用意を始めているところだった。眞面目な奴になると、すでに教科書をひらいて予習をしていたり、ノートに質問点などを箇条書きしている奴もいた。

「あら、どこにいたんですか」

「屋上だ」

自分の席に向かう途中にミコが顔も上げずにそう訊いてきた。なので俺も顔を向けずに咳くみにして言った。

「ぼっち……（ボソリ」

わざと顔をそらしてそういうのが聞こえた。

違う、断じてそんなんじゃない！ お、俺はお前らを巻き込まないために……。

実際悪化した噂も飛んでたしな。

ミコは相変わらずだったので、スイの方を見てみた。

寝ていた。

お昼寝ですか？ ここは学校ですよー、と教えてやりたいが俺が声をかけると素つ頓狂な声を上げるので放つておくことにした。教師に当たられておろおろするがいいわ。

若干ダークな気分なまま席に着き、授業の準備を始めた。

少し遅れて歌音が教室に入ってきた。



## 6話・逃げるが勝ち

「ただいまー！」

「ただいま帰りました」

「ただいまつと……」

「スイ、ミコ、俺と順に帰宅の挨拶をし、リビングへ向かう。今日は急遽授業の終わりにホームルームが追加され、いつもより帰る時間が遅くなつたため三人で帰つてきたという次第である。これを目撃されていたらお終いだな。同棲とか普通シャレにならないからな。

「ドラマ、アニメ、漫画などとは違つてそんなおいしい展開は存在しません。これは俺の教訓です、皆さんしっかりと心に刻んでおきましょう。」

「さあ、夕食です。働け」

ほらね。

「腹減つた、今日はすつしに疲れたよー。ホームルームの長さつてどうしてこうなんだろうね。うつざこつたらありやしない……ねえ、今完璧じやなかつた？ 悪魔みたくなかつたー？」

もうソレ言つてる時点で破綻してますけどね。

途中までは別人のようだつたのに急にいつものスイに戻つた感じだつた。

「ふう、帰つてきてそうそう料理か。俺は忙しい主夫かつての」

「そんな凶悪面の主婦はいないと思います」

「変な所に突つ込み入れなくていい！ つてか主婦じやなくて主夫

！ 性別考えろー！」

「わー、差別してますわこのかたー」

「すっげえ棒読みー？ どうやんだよそれ、今度教えてくれよー？」

「拒否します」

「皮肉だよー！」

大きな鍋に水を張り、コンロで強火に。

その間にフライパンではひき肉を細かくして炒める。

「今からお鍋作るの？ 腹へってまでねーぞ！」

「違う。簡単にミートソーススパを作る、あとお前それ演じれてると思ってるかもしねーが『お鍋』だなんて悪魔は可愛らしくいわねーからな」

「うぐう……うるさい黙れっ！」

頬をほんのり紅く染めて怒るスイ。あー、やつぱい加減『女生徒』というより『女の子』って感じだな。

「生卵投入するからな！ アタシのには生卵入れるんだからな！」

「わかったわかった」

最近分かったことだが、スイは異様に生卵に凝っている。この間はおでんのたまごが中まで火が通っていたのでキレていた。どうやら生う半熟までの間しか認められないらしい。

確かに半熟たまごは何にかけてもおいしいとは思うが……ちよつとこだわり過ぎではないだろうか。

「ミコはどうする。なんかトッピングいるか？」

「では、ちーずでお願いします」

こちらはチーズ中毒だ。何にでもチーズをぶっかけ、食べる。確かに卵同様にほとんどのものに合うことは分かるのだが……カロリーとか考えなくとも……いいんだろうなあ、天使だから。まあ、今回はミートソーススパだからどちらをトッピングしてもおかしくはないだろう。

パスタが茹であがり、さらに移すと水蒸気が立ちあがる。その上にフライパンで少し温めたひき肉 + テマト + etc. をかけるといい匂いが辺りを包む。

「ぐり、と誰かが生睡を飲み込む音が聞こえた。

「さ、さて、準備もできたし運んでくれ」

「お、おうう……わーて、たまごたまごつと」

「ちーずをぶっかけて、と」

予想以上にみんな、腹が減っていた。

「（）馳走さまでした」

腹を満たして満足した俺たちはリビングで（）ふらりとくつろいでいた。まあミコはいつもどおりリビングの机の上で教科書とノートを開いて落ち着いた様子でペンを動かしている。

そしてスイはと、こけらもまあいつもどおりにリビングの力一ペシートの上でクッショングを枕に寝転がっていた。

ミコは私服に着替えたが、スイはまだ制服のまま寝転がっている。明日も学校があるといつにそなまだと制服にしわが出来てしまう。

「おい、スイ。さつさとその制服脱げよ

「ひうつ！？ いきなりなんですか！ 何の誘いですか！？

「何がだよ！？」

「そそそそんな、た、確かにこんな恰好で無防備に寝転がっていたら年頃の男の子ははつじょうでわたしがあぶくなつてひいーになりますがががが……！」

「いや、意味分からんし落ち着け！ 俺は制服がしわになるからさつと脱いで部屋着に着替えると」

「制服にしか興味なしですか！？ 私の身体なんてどうでもよくてとりあえず脱ぎたての制服ならなんでもおつけーみたいな変態さんでしたかっ！ ひいい

「一言もいってねえ！ おい、ミコ。なんとか言つて……つていねえし！」

リビングには俺とスイだけになつていた。

騒ぎ出したから勉強の邪魔になつて自分の部屋に戻つたのだろうか。

「やばいです、危ないです、このままじやあ変態さんに犯されますーつー

「やつべ、もうめんどくせー！ 収集の付け方分かんねえ！ 誰か助けてくれ！」

「さあさああと騒立てるとい、リビングと廊下をつなぐ戸が開かれて。

ガスッ、と俺の頭に英語辞典が突き刺さつた。

「つるさいです。近所迷惑です。このハネケイソウがつ」

ミコがお怒りになつていた。

そして英語辞典はものすごい凶器になつて俺は身をもつて知つた。

「痛つて……」

頭をさすりながら風呂掃除をしようと洗面台のドアを開けるが、そこにマッシュリンクがなかつた。いや、容器はあつたが、中身が空だつた。

「あれ、無くなつてたのか……買い置きもねえ。仕方ないな」

一旦リビングに戻つて、確認。

「おい、ジックンないんだけどさ。最後に使つたの誰だ？」

「ああ、私ですけど今日の朝確かに言つましたよ。お風呂の洗剤が無くなつてますよ、と」

「そうだつたのか……いや、普通に納得したけど言つたの朝なのが

よ

「問題はないと思ひますけど」

「それはこつちが決めんだよ！ まあ、いいや買つてくる」

「今からですか？ じゃあ早く行つてきてください。そして早くお風呂を入れてください」

「言われなくともそうするが」

とりあえず買い物に行く皿を伝えてリビングから出つて！

「お前朝言つたのつて『バスが無くなりましたよ』つじゃなかつたか！？」

俺がそう問うと、ミユは悪びれた様子もなく。

「ええ、ですからバス・マジクリでしう？ 略してバスですか確かその時俺は、『バス？ 俺たち歩きで学校行つてんのになんか関係あるのか？』って返したはずだ。

バスつてそつちかよおおおつ。busの方じやないのかよつ！

「わざとだろつ！」

「何を フツ言つてるんですか」

「笑つてんじやねーか！」

「早く入つてきて下さい。つていうか行け。間に合わなくなるでしょう」

「何にだよ……。今度からはちゃんと伝わるよつて報告する」と一分かりました早く行つてきてくださいこの腐葉土が

なんつう天使だ……こいつあひねくれてるねー

近くのドラッグストアまで徒歩数十分ながら、体感時間は結構長く感じたりする。なんせ夜だし、静かだし、何よりも一人だからだ。今まで一人だったのに何言つてんだ、と自分に毒づく。確かに今まで一人だった。でもあいつらが来てから時間が早く過ぎていくように感じられる。誰かが言つた『楽しい時の時間は短く感じる』つて奴かもしれない。まったくらしくないと思つ。などと色々なことに頭を巡らせていくと、女性の声が聞こえた。

「あなた達つ、ほんなコンビニの前で座り込んで迷惑になるとは考  
えないの？」

どこかで聞いた声だつた。えーと、確かに朝に聞いたような気がし  
なくもない。

なるべくトラブルには関わらない主義なのが、何故だか気になつ  
た。

そーつとコンビニの近くまで寄り、街路樹に身を隠して様子を窺う。  
その女性は長い黒髪を後ろで束ね、ポニーテールと呼ばれる髪型を  
しておりつてあれは芹川結穂じゃねえかっ！

何してんだあいつはあつ！ わざわざあんなモロ不良みたいな奴ら  
に関わりに行かなくともいいじゃないか！ 数は…… 3人もいる  
し。髪の毛の色が赤だとか茶色だとかなんかカラフルだしつ。

「んだ、お前。文句あんのかア？」

「文句があるから言つてるの！ 邪魔になつてるの…」  
「…」の女……舐めていますよねえ！ ナニ？ いい気になつてんのか  
なあ！」

男たちの一人、茶髪が芹川の腕をつかむ。

つてアレ、なんかおかしい奴一人混ざつてないか？

「きやつ、ちょっと、離しなさいよ！ こんな」としてただで済む  
と思つてるの！？」

「へえーえ、どうなるのか教えてほしいなア」  
「よく見たら…」つ結構可愛いじゃねーか。どれ、俺たちがちょつ  
と……

「触らないでっ！」

振り回した芹川の腕が赤髪に当たる。大したダメージにはならない  
し、赤髪もそれを知つていて避けなかつた。

「…」の女……ほづりょくはんたーい。つていつてもこの女から仕  
掛けってきたからしかたないよなア？」

同意を求めるように他の男たちに言いかける。他の男たちもにやに

や笑いながら答える。

『触らないでつて、言つたでしょ。気持ちが悪い』

「あ？」

「お？」

赤髪、茶髪が同時に疑問符をつけた言葉を発する。それに構つた様子はなく芹川は、

「ちょっと、店員さん……なんで助けてくれないの？」

コンビニ店員に助けを求めていた。しかし、コンビニの店員は気弱そうで、先ほどからチラチラ様子を窺つているものの飛び出していく気配はなさそうだった。

これは、万事休すつてやつだな……。

この時間帯、歩道には誰もいないしコンビニの客もいない。店員は使えないし、不良どもは三人。

おいおい、俺つてこんなキャラだつたかなあ。誰かを助けてやれる奴だつたかなあ。

つーかできんのかよそんなこと。いや、出来ないことはないような気もしなくはないけども……あーっわけわかんなくなってきた！

「へへへ……この時間帯じゃあな。誰もこないし」

「そうだなア。では、この女の

「

「だ、だつ、誰か助けてつ……」

芹川結穂の声が震えていた。

俺は何故だか走るのではなく歩いてコンビニの前まで向かっていた。

そして一言。

「や、やあ。芹川。その人たち知り合い？」

ななななな何やつてんだ俺は

つ！

なんでナチュラルに話しかけてんの！？ ここは走つていて驚いている間に芹川助けて戦闘無しに逃げるのが一番なのにつ！ イカン、俺もなんかおかしくなつてているらしい。普通に意味不明な行動取つてしまつた。

しかし、もう収集はつかない。それならいつそこのままつ。拳を握りしめながら相対する。

「しつ、知り合いなわけないでしょ！ 助けてよつー！」

「ああん？ 兄ちゃんさア、今俺らお楽しみタイムに移行しようと してて、見ないふりしてあつちいつた！」

「そうだぜえ、まさか三人相手にやろうつてんじゃないよな？」

「確かに、三人はつらい、つらいけど……。俺の噂が改善されんなら、よくね？」

握りしめていた土を茶髪にばら撒き、そのままタックルをかます。降りかかった土に気を取られていた茶髪には避ける術もなく、

「うお！」

バランスを崩した茶髪は芹川を離し、よろめく。そこにすかさず肘をたたき込み、一気に詰める。

「つおらつー！」

茶髪はコンクリートブロックに躓いて後ろから倒れていつた。頭は打つていないのである。

大丈夫だろうと願いつつもまずは一人。

次は、と振り向くとそこにはもう赤髪が待機していて、

「ツシユ！」

「がつー！」

赤髪からのボディーブローを受け、身体が折り曲がる。そこに上から拳が振ってきたので転がつてかわす。が、しかしかわした先にはもう一人の男がいて、足を上げていた。踏みつけられるつー！

そう思つた俺は、男の軸になつてゐる方の足を狙つて倒れた状態のまま蹴りを入れる。

面白いよつに膝が折れて男は地面に転がる。すぐさま立ち上がるつと迫つてくるが、ここは「めんなさい、顔面を蹴り飛ばして黙らせる。

「ひづらー。」

「あぶなつ！」

またも赤髪のブローが真横から迫つてきていた。それを間一髪で避け、距離を取る。さて、最後の一人まで絞れたならもうこれは勝ちだ。そう、勝ち。

絶対に負けることはない、何故なら。

「つてことで逃げるぞ芹川つ！」

「え、何、引つ張らないでつーー！」

逃げるが勝ち、だから。

## 7話・日常での籠城（前書き）

テスト期間入りました；  
更新速度がかなり低下するつえに内容が薄くなつております。  
どうかご了承のほどをお願いします。――――――

走って走って、さらに走って走って。自分の体力の限界に嫌気がさしながらも走ってたどり着いたのは駅前だつた。

ただ闇雲に走ったわけではなかつた。人通りの多い場所に移動したかつただけなのだ。ここならば交番も近くにあるし、人も多いし、なんとかなると思ったからだ。

それにしても疲れた。

あの赤髪から逃げるのにどれだけ走つただろうか。うちのマンションは駅から1km付近にある。先ほどの「コンビニはうちのマンショ」より駅寄りなので……あんまり走つていらないかもしねない。まあ、そんなことよりも今は逃げ切れたことに喜ぼう。

「ちょっと……あなた、朝浦つ……なんのつもりーー？」

「なんのつもりって……助けてつていつたじやん」

息を切らせながらも会話を続ける。

何故だか芹川は目を潤ませながらも眉を吊り上げている。

「べ、別につ……」

「つーか、なんだよあれ。わざわざ絡みに行く必要あつたのか？」

「いくら学級委員長だからつてそんな……」

「嫌なの」

すつ、といつもの掴みかかつてきそうな勢いは消え、目は光を失つていた。

その目は、知つている。

最悪なもの、苦しくても忘れられないもの、自分の中の枷、そんなものを抱えている田だ。

「ああいうの、嫌なの。誰のためにもならないようなことを平氣でやつて、迷惑掛けて、誰からも煙たがられて、……性根の腐つた

ような奴ら。死んだつていよいよこんな奴らがいることが、そこに存在していることが嫌なの」

「そんなこと……言つたら、駄目だろ」

「……でもね、嫌なの。気持ちが悪いの。朝浦陽助もそんな奴だと思つてた」

「へ？」

「俺？ 何故にいきなり俺？ 今シリアス展開じゃなかつたのか。つて、ああ、アレか。尊のせいでか、そんな根も葉もない尊のせいで初対面で殺されかけたのかつ！」

「でも、少しば違つた。今でも何か考へてるんじゃないかつて気持ちが悪い。……ううん、言い過ぎつてのは分かるんだけど……でも違つたの。少し、ね」

「意味が分かんないんだけど……どういづ？」

「なんでもない。私、こっちだから」

そういうとポニー・テールを翻して彼女は背を向けて行つてしまつた。何故だか、学校に居る時よりも幾分かその背中は小さく見えた。俺の、幻覚だろうか。 考え過ぎだらうか。

それでも、見えたんだ。

「あ、バス・ジッ・リンク……買ひ忘れた」

家に帰つたこりにはすでに10時を回つており、怒りのオーラを無言で発するミコとソファーで転寝するスイに出迎えられた。

「い、いや……これにはわけがあつてな？」

「早くお風呂を洗つてください。ついでにあなたは人間から足を洗つて下さい」

「俺に死ねと！？ 確かに遅くなつたのは謝るけどさー」

俺が洗剤の有無に気付いて買ひに行こうとしたのが9時だった。つまり、一時間経過しているということだ。そりゃあ一時間も待たされたら腹が立つだろうが……仕方ないじゃん。

「まあ、いいでしょ。私は早く寝たいのでお風呂を早く沸かして下さい。一回言いました、この意味が虫けら陽助様に理解できるでしょうか」

「わ、分かった。すぐにでも……」

あまりにもオーラが絶大すぎて、毒に對しての突っ込みすら忘れていた。

それにもしても、あつれりと許してくれたな……。それはそれでラッキーだが。

だがそれは、今日の話である。

「起きてください、おつかいレベル〇さん。早く起きないと私の光速の拳があなたの鳩尾にツシュー！」

肺から空気が絞り出された。

「つぐはうー？…………な、殴つてから言つなああつ！」

ヤバい、言つてから拳を放つまでのタイムラグの無さがヤバい。こいつはキレてるね、昨日は許してくれたんじゃなくて保留してくれたつてところがつ！

「わ、分かった。起きるけども…………もとまとばお前が洗剤のことをややこしく言つから」

「そうですか、では。…………ああ、スイも起にしてくくださいね。私はリビングで微動だにせず待つてますから」

シカト、いくない。  
いじめ、いくない。

「な、なんてことだ……居候のへせにっ！」

俺は多分怒つてもいいと思つんだが。

「はあ、……性格なんだろ？な」

「どうしてか怒る気になれない。 なんと言つか、なんだろ？か……」

「あんまり人と接することがないからかなあ……」

独り言をつぶやいてみる。 多分、そう思つのならそつなのだろ？。 ベットから起き上がり、ハンガーにかけてある制服を手に取る。 とりあえずズボンとワイシャツだけを着て部屋を出ようとする。

あ……れ……？

部屋のドア、少し隙間が開いて……？

目が合つた。 隙間の向こうから覗く田と。

「独り言……。 流石一人ぼっちですね」

目がそう言つた。 つておい！

「お前はリビングで微動だにせず待つてるつて言つてただろ？が！」

？ なんで人の部屋覗いてんだよ！」

「いえ、朝ですの」

「いや、全く意味が分からんのだが」

「まあそういうことにじておきましょ？か。 長いこと出でこなかつたものですから色々と気になります」

「これ以上の詮索はやめよ？。 ……といつか俺はなんで後手に回つてんの？ くつ、こいつ。

ミコと正面に向き合つ。

よく見ればこいつ、可愛いんだけどなあ……。 前にも言つたけど毒がね。

「な、なんですか。 そんなに見つめられたら照れてしましますうー」

「棒読みで言われても反応に困るわけだ

「そうですか」

「そうです」

「では

「おひ」「ひむ

そのままミコは食卓に付き、俺は隣の部屋へ。

部屋のドアの前に立つたところで、思い出す。

スイは確か寝起きは暴走していて何度も変態扱いされたことか。 とにかく、俺が起こしに行くから問題になるのであって、ミコが行けば万事解決じゃね？ とは思つたが、ミコは……。

食卓の椅子に腰をかけて微動だにせず待つている。

これは、駄目だ。

そもそも、俺のことは起こすくせに何故にスイは起こさないんだ。同じ部屋で寝てんだから自分が起きたついでに起こせばいいものを……。

文句ばかり垂れ流していても仕方がないので、一応ノックをしてからドアを開ける。

案の定、幾重にも積み重ねられた布団の中で虚勢張り悪魔は眠っていた。というか眠っているのだろう。

分からぬ。ここからじやあ見つけられない。

この山から探し出さなければならぬ。これが面倒でおそらくミコは起こさないのだろう。

つていうか、なんでこんな布団を……。引っ越し当初はこんなことがなかつたのに。

「おい、スイ！ お前は布団の中で籠城でもしてんのか、はよ起きろー！」

一枚ずつ引き剥がしながら声をかけるが、見つからない。

布団を引き剥がしているうちに、何か見知ったような感覚がした。何か、食べ物に似てないか……これ？

「きやべつ……？」

城からキャベツ城へとレベルダウンした。

きやべつがモチーフなら、馬鹿悪魔は中心にいるのだろう。均等に布団をはがすことを止め、一気に中心部まで捲る。

中心には小さなスペースがあつて、そこに丸くなるよつとしてスイ

は眠っていた。

「窒息死するだろこれ……つてうえええつーー？」

この間俺は注意した。寝るときは下着だけではなくパジャマを着用せよと。

多分寝る前には着ていたのだろう。だが、それはスイの寝相の前には無意味なのか！？

何故にパジャマのズボンがずり落ちていいーー？

そしてまたも計ったようなタイミングでスイは目を覚ます。

「ひつ……。また朝這いーー？ しかも下から脱がすという上級者！？」

シユバババ、と表情を変えながらも最終的に行きついたのはやはり涙目だった。

「何が上級者ーー？ つづか、このパターンはもういいよーー！」

カシャ、と背後で音が鳴る。

恐る恐る振り向くと、そこには。

「少女を襲う目つきの悪い男子学生……」

微動だにしないと公言していた彼女がいた。

「何撮ってんだてめえ！ それはシャレにならないから消せ、いや消して下さい！」

「これで私は絶対的支配者確定ですね」

「不吉な言葉つーー？ 俺を社会的に抹殺するつもりかつーー？」

「…………」

「なんで何も言わないーー？」

また、「さあかな朝を迎えることとなつた。



## 8話・あだ名の付け方（前書き）

テスト勉強の合間に投稿です。

かなり更新に間隔が開きました、申し訳ございません。

次はテストの終わった水曜日夜に更新できると思います。  
皆さまだうぞ次もよろしくお願いします。

ミコ、スイと時間帯をずらして家を出たせいでもいつもより早めに登校する羽田になってしまっていた。

こういのうは普通、家主である俺が後から出るべきなのだがスイがまだ寝ぼけて歯ブラシの柄の方に歯磨き粉を付けて歯を磨いているというカオス極まりない状況だったので、後のことばミコに任せっきりだと俺は出でていったわけである。

そのまま待つていると、時間帯をずらした時に遅刻になる可能性があつたからな……。

出来るだけ悪い印象は他生徒や先生に与えたくない。俺だつて真面目に学校生活を送っているんだ。

それに、前の噂の件もあるしな……。

そんなことを考えつつ歩いていると、昨日のコンビニが見えてきた。ああ、……あの不良達つて普段何してんだろうな。ここで待つてたりしないよな？ つていうか、うちの生徒ではなかつた気がするんだけど。

そのとき、ザツ と昨日俺が様子を窺つたために隠れていた街路樹の後ろから人影が現れた。

「！？ ほんとに昨日の奴らが現れて

いなかつた。

以外にも、木陰から現れたのは昨日俺がここで助けた芹川結穂だつた。

「何してんだお前

そう呼びかけると、彼女はビクッと身体を震わせてこちらを窺うようにして見つめてきた。

「べ、別に……」

「それ昨日も言つてただろ」

「昨日ここで朝浦にあつたから、ここに居たら会えるかなつて思つ

たの！」

「は？」

「へ？」

この通学＆通勤時間帯の交通量の少くない通りの真ん中で彼女は何を言つてゐるのでしょつか？

ほ、ほら。昨日とは違つコンビニの店員も何事かといつちを見てゐるじやないか。

通りすがる女子中学生がにやにやしながらいつを指差していくじゃないか！

「お、お前は一体何を……」

「違う！ そういう意味じやなくつて。お、お礼を……」

「ただけなんだからつ！」

彼女は頬を赤らめながらいつ叫ぶと、走り去つていつてしまつた。わけが分からぬ。つていうか、お礼なら昨日の夜にそれっぽいことを言つてくれた気がするが？

それにもなんなんだ、わざわざいつをなとこりで待つていなくても学校で言つなりすればいいものを。

くつ。今度はコンビニの店員がにやにやしてやがる……。

周りの不可解な笑みに包まれながらも、俺は学校に遅れないよう歩みを速めるのであつた。

いつもよりだいぶ早く教室についてしまつたので、特にすることもなく机に突つ伏していたところ、あれ、なんで隣のクラスの学級委員長がここに？ だとか、相変わらず美しいなア……といった声が色々な方向から聞こえてくるので顔を上げてみると、そこに今朝の彼女がいた。何故か赤い顔をして。

「なんだ、まだなんか用があんのか？」

「え、えつと……。 昨日は助かったわ、朝浦のおかげで……何事

もなかつたわ」

「俺は何事があつたけどな」

「だ、だから。あの……その……今日の……」

「シカト?」

「だ、だからつー!」

「おう!?」

芹川が何かを言わんとしたところで教室のドアが思いつきり開き、これもよく分からぬのだが元気いっぱいの歌音が入ってきた。

「おつはよー! あれ? 結穂ちゃん、このクラスで何してるので? その後ろからはミコヒスイが並んでいた。どうやら一緒に登校してきたらしい。

まあ、歌音のことだから元気いっぱいなのは『転校生と一層仲良くなれたから』だろうと察はつく。

それにしても、一気に騒がしくなつたな……。

早めに話を付けるため、芹川に先を促す。

「んで、なんだつて芹川?」

「や、やつぱりなんでもないつ!」

芹川はやはり叫ぶようにして台詞を吐きその場から退散する。

それを今朝と同じように見送つてしまつ俺。さつきからループしてね? これ。

「あれ? 結穂ちゃん、結穂ちゃん!?」

友達がいきなり爆走したとしたら流石に驚くだらつ。歌音も目を丸くしていた。

つていうか、なんでお礼じときでこんなに遠回りになつてゐるわけですか?

別にいい、つて今朝も言つたはずなんだけどなあ。

「はつはーん。分かつた、これは……昨日だねつ!」

急に歌音が何かを悟つたようで、笑顔のまま俺に人差し指を向けてきた。

ビシッ、と突きつけられたその指に俺はたじろがつづも、訊いてみる。

「な、何が昨日なんだよ？」

昨日は確かに芹川を助けたが……それがどうした。

「セツ、結穂ちゃん…… そりなんだね 」

「おひう！？ なんだお前、いきなりテンション上げんな！ 朝から本当にどうした……」

「おはよー！ ぎこます、鈍感朝浦さん。 相変わらず極悪人面のくせに青春を謳歌していると思つと吐き気と鳥肌が一気に襲つてきますね」「ちゅちゅ、ちゅつとまてお前！ なんで俺はそんなに罵られなきやいけねえんだよ！」

「ふ、ふん。 おはよーだぜ、朝浦。 …… もよもよ、今日も、『』」

「お前は無理に言わなくていい」

強烈な毒舌をふるつてぐるぐるゴミ、今日も悪魔っぽく振舞あつとじてこるスイ。

いつも通りの日常のよつに感じられるが、違つ。 なんか違つ。

「これは…… 何が起きてる？」

俺には理解できそうもなかつた。

「それよりも歌音。 えらく『機嫌だよな』

「え、うん。 美由けやんと優美けやんと登校してきたんだよー！」  
やはりそうだったか。 人と仲良くなる」とド幸せにならつてお気楽な奴だよな。

「それにしても美由けやんと優美けやんて名前似てるよねー。 たまに間違えちゃうやうだよ、だつてひつくり返しだけだもんね。 あだ名つけよつよ、あだ名。 仲良くなつた記念にねー！」  
俺も思つていた。 学校でミコ、スイ、と呼ぶことはできないし何かいい方法は…… あつた！

ミコ、スイと俺があだ名をつけてしまつことである。

「俺が、あだ名をつけてやる」

「お断りします」

息継ぎの一瞬の隙間をついてこいつは断りやがった…………！？

「待て、いいあだ名かもしれんぞ」

「そもそも朝浦さんはお友達になつた覚えがあります。他人からあだ名をつけられるときは辱められるときだけと相場は決まっています」

「美由ちゃん……それはひどいんじゃあ？」

「いいえ、万年発情期の犯罪者面にまともな名前を名づけられるはずがありません」

「泣いてもいいはずだ。これは俺、泣いてもいいはずだ…………」

がつくりと肩を落とす俺の頭を撫でつつ歌音は、

「い、一応聞いてみよつよ、朝浦君が一生懸命考えててくれたのかもしれないしつ」

焦つたようにフォローを入れた。それにしぶしぶといった感じでミコは頷き、スイは何故かふんぞり返つていた。

「天崎はそのままミコ、黒崎はスイ。なんかでどうだ？」「

その言葉に天使と悪魔は硬直し、逆に歌音は頭の上に疑問符を浮かべていた。

「なるほど、朝浦さんも猿並みには知能が回るそうですね。それがいいでしょう」

「ナイスアイデイアちゃん！……じゃなくつて、仕方ねえな！」

「素直に褒められるのか！？ それにお前は話すことを決めてから口に出せや！ もう滅茶苦茶だぞ」

「ねーねー、なんで優美ちゃんが『スイ』なのかなー？」

次はこちらが硬直する番だつた。

なんで？ なんでつてそれは……本当の名前だから、つてこれは答えにならないし。盲点だったつ！ どどどど、どうすればっ！

「そ、それはアタシが水が好きだからだつ！」

「え、 そうなの？」

「そんなんだ！ いつも、 飯の時にはお水飲んでるでしょ？」

「そう言えばスイは何かと水を飲みたがる。お茶は何か濁つて、 いつて嫌なのだという。 というか、 それはお茶の全てを否定していいのか？」 まあ、 そんなことで水が好きらしい。 前に透明度がどうとか言つていたが忘れた。

「そーだつたね。 でも、 なんで朝浦君が知つてるの……？」

「第一波の攻撃が飛んできたとき、 ちょうどチャイムが鳴つた。

「よ、 よし、 歌音。 授業が始まるぞ、 用意しないとな！」

「そうですね。 ここばかりは菌類さんに従つておきましょう。 あと、 スイ。 ないでした」

「え、 え！ 私よかつた！？ 良かつたのかあ～…………って違う！？」

違うじやねえよ……と突つ込む前に担任がクラスに入つてきた。 全て、 計画通りつーではないが、 とりあえずは誤魔化せたのでよしとしよ。 ひ。

それについて、 スイも役に立つ時があつたな……いつもバカにしていたが、 今日は助かつたぞ。

そして俺は歌音こぼれないよひこそつと汗を拭つのだつた。



## 9話・知りたがり（前書き）

テスト終わりましたヽ( ˙ 。 ? ˙ )ノ  
更新率も上昇するとと思ひので、問題はないと思ひます。

昼休みを知らせるチャイムが鳴り、午前の授業は終わりを告げた。今日もというかなんというか、ギリギリ分かる範囲内で授業についていったのだが、やはり凡人の俺では理解力に欠けるということが分かった。

いや、いつもそう思うのだが、改めて実感したというところが大きいだろう。

「ふあー、やっぱり数学は難しいよね。 朝浦君は今日のところ分かつた?」

前の席の歌音が振り返つてそう訊いてくる。

「いや、正直ギリギリってところかな。 これはテストが酷いことになりそうだ……」

「えへ、今からそんなこと言わないでよう。 私も不安になっちゃうよ」

歌音も相当苦戦しているようだった。

その点、ミコは授業中に当てられた問題をスラスラ解いていて、教師すらも少し驚かせていた。

流石は天使。 やはり天使と言つものは頭が良いものなのだろうか、それともミコが特別なのか。

そう言えば、ミコやスイの同属の話を聞いたことが無い。

俺が知っているのはあのやたら適当な神様だけだし。 それから推測するに、ろくな奴がないような気がしてならないのだが、そこはどうしようもない。

そんなことを考えていると、またもや俺のクラスに来客があつた。

今朝も訪れた、隣のクラスの学級委員長だ。 つまり芹川結穂と言ふことになるのだが。

「朝浦陽助!」

「はいっ! なんでしょう!-?」

今朝の状態が全く嘘だつたかのような気迫で、俺の元へと近づいてくる。

何やり覚悟を決めたような顔をしている。ほんの少し、頬が赤いのはどうしたのだろうか。気合の入れ過ぎで頬を叩きすぎたとか？

「こ、この間のお礼、を、受け取つてくれつ！」

どんづ、と俺の机の上に置かれたのは何やら箱型の物体。

「何だこれ、爆発物？」

「んなわなけないでしょ！ お礼だつて言つてるのー。」

「お～？ 結穂ちゃん。ついに決心したのかな？」

歌音がいつの間にやら芹川の隣に立つてあり、肘で芹川のことを突いている。

俺はその箱型の物体の、上蓋をとつてみた。

するとそこには。

「お、おお……」

程よく詰められた白米が箱の半分を制圧し、その中央には赤い梅干しが乗つていて。もう半分の領地には、タコさんワインナー、唐揚げやプチトマトと言つた定番の兵隊がそこに鎮座していた。要するにこれは。

「弁当？」

「そ、そりよ。昨日のお礼にお弁当を作つてきたの、お礼だよー。」「なんだー！回も重つんだよ……。でもこれ、本当にむりつていいのか？」

「お礼だつて言つてるでしょ」

「そ、そりよ。じゃあありがたくもうりつよ。今日の昼はパンの予定だつたからな。助かつたよ」

「……」

「ヤニヤニしている歌音はいいとして、何故芹川はまだここに居るのだろう？」

別に俺の食べるといふを見ていたつて面白っこいとなんか一つもない

はずだけだ。

「本当に鈍感野郎ですね、あなたは。早く死んだ方がよいのでは？」

「ちょっと待てお前。何故に俺はそんな暴言を吐かれなければならぬんだ……」

いつの間にか俺の席の近くにやってきていた//コガセんなことを言い出した。

スイは絶賛睡眠中である。

とりあえず、腹も減つてし頂いた弁当を食べよつ。まずはおかずから一口。

「……うまいな」

「べ、別に普通でしょー。」

そこで俺はよつやく//コの言つていたことが分かった。

そういうことが。

「ありがとな、芹川。すげく美味しいよ」

「っ……！」

感謝の意を伝えると、彼女は何故かすこい勢いで走り去つていつた。

飯を、取りに言つたのだろうか？

そこで歌音が。

「ふつふーん。大成功だね！ あ、そうだ、朝浦君。その弁当箱は私が返しておくから、食べ終わつたら私に渡してね？」

「え、なんでだ？ 芹川と一緒に飯食わないのか？」

「ん？ 何言つてんの朝浦君。もしかしてマジボケ？」「何が？」

「え……？」

そのとき何故だか歌音はムンクの叫びのような顔に変化した。

「おあつ、お前！ 何なんだその顔は！..」

「あーさーうーらーくーんーはー、マジでした。がっくし

「意味が分からんわ！..」

そんな中、ミコはまたもや俺のことを蔑んだ目で見ていた。

午後の授業はあつという間に終わってしまい、教室はすでに放課後モードで部活に行く者や残つておしゃべりを始める者などで溢れかえっていた。

俺はと言えば、どちらでもなくいつものように残つてはいるが自分の席に座つたまま『いる』という放心タイムになつていた。

理由は前に説明したとおり。しかし、今日はアイツらに聞きたいことがあつた。

天使と悪魔が俺の家に住み着いてからかれこれ2週間は経つた。それなりにクラスに馴染み、歌音とは特に仲良くなつていて。それは良いことだ、風呂掃除の手順も覚えたし朝浦家ルール（陽助発布）も徐々に適用されて言つてはいる。

だが、肝心のここに来た理由が明確になつてない。

『どうか、修行のために来たとか言つてたよな？ アイツら何か修行してるので？』

人間と触れ合うことが目的だとか言つてはいたけど、本当にそんなもんでいいのか？

なんというか、詳しいことをもつと教えてほしい気がする。終わりはあるのか、とかな。

共同生活が始まつて俺も疲れているのかもしれない。なんだか早く解放されたいような気分だつたのだ。

そんなことを考えていても仕方がないのだ、なんだかんだで付き合つていくしかないような気がした。だって神様直々に頼まれたからな、あの超適当な神様にな……。

「やべ、なんか頭痛くなつてきた……」

あの天界（？）での出来事を思い出すと頭が痛くなつてくる。 神

がアレでいいのか……。

そういうえば、ミコやスイは人間界のことをちょいちょい質問してくれるが、俺はアイツらの世界のこととか知らないんだが。

特に知つていてプラスになることはないだろうが、マイナスにはならないだろう。

といふか、俺自身が少し興味がある。

ふと、窓の外を見るとグラウンドで陸上部が活動していた。歌音はどうしているだろうか。

その姿を探して目を走らせていると……いた、ハードルを運んでいる。

楽しそうに部活仲間と話をして笑っていた。

それはなんだか平和で、日常を思わせるのに十分な見本だった。

「がんばってるな……」

気が付くと、教室には誰もいなくなっていた。

夕暮れの光が差す放課後の教室、なんだか神秘的な空間に紛れ込んだようだった。

鞄を持って立ち上ると、教室の出口に一人の女生徒が立っていた。始めて見る顔だったので、同じクラスの人ではないと簡単に分かった。少しウエーブがかかった髪をしているその女生徒とがつりと目が合い、気まずい雰囲気が漂つ。

「え、と……」

俺が口ごもっていると、彼女はその強気な目の中に柔らかい光を灯してふと笑い、踵を返してそのまま行ってしまった。

同学年のはずが、なんだか大人的な雰囲気をまとった女の子だった。もちろん名前は知らないし、会ったこともないはずだった。だけれども何かが引っかかった。

上手く歯車の合わない感覚。そんなものが俺の心の中にはあった。

家に帰ると、居間では珍しくスイが勉強していた。隣ではミコが同じように勉強していたがその差は歴然だつた。何よりも姿勢が違つた。ミコはいつも通りシャキッと背を伸ばしてイスに座り勉強しているのに対して、スイは机に肘を着きながらあれこれと唸り、頭から煙を立ち昇らせていた。

なんだか出来る子と出来ない子の例がそこに並べられているようでも見ているこちらが鬱な気分になりそうだつた。

たまにスイはミコの方に視線を走らせているが、ミコはその視線に対応することなく手を動かしている。

「なんだお前ら、勉強してたのか」

「おかえりなさいませ、低知能さん。 テスト前の勉強ですよ」

「お、おかえりい……私はもう死にそつだよお……ぐすん」

いつも通りの毒舌というか蔑みに加えて今日はスイが性格を取り繕おうともせず頃垂れていた。

今朝、歌音との会話にも出てきたが、もうすぐテストなのだ。テストの度に学年の番数が発表されるのだが、凡人である俺はいつも中間辺りをうろうろしている。

歌音は前に話した通りに賢い。それなりに順位の方は高いのだろう。いつも天使と悪魔は……まあ、なんか見た感じで分かる。

ミコはおそらく上位層、普段の授業と家に帰つてからの勉強の度合いでこんな俺でも大体予想はつく。

対してスイは、まあ……下位層だらう。

悲しいがこれが現実と言うものである。

「あ、そうだつた。お前たちに聞きたいことがあつたんだよな。主にお前たちのことについてなんだけど」

鞄を自分の部屋に放り、ソファーに腰をかけながらソラのと案の定予想していた応答が返ってきた。

「プライバシー侵害ですね」

「その答え方は予想済みだつたんだが……。そういうことじやないんだよ！」

「天使のこととか悪魔について聞きたいのですね」

「分かつてたんなら面倒な言い回しするなよ……」

「か……陽助様……いいえ、下等生物様が予想していたことを私は予想していたといつことがここで分かりますね。流石は単細胞です、流れが読みやすい」

「え、え、なんでこの会話の中だけで俺がこんなに蔑まれているわけ!? あとミコ、お前なんか怒つてないか?」

「いえ、いつも通りかと」

いやね、いつも通りなんだけども、なんか違うつていうか……。もうこれがいつもどおりつて言える俺はもうヤバいと思う。

「アタシたちの世界の話? ふつふーん。教えてあげようか?」  
スイがこちらを向いて反応する。先ほどの勉強に弱った様子とは打って変わつてなんだか得意氣である。

さて、スイに国語力があつたかどうかが問題なんだけだな。

「して、なんでそんなことを急に言いだしたのですか?」

「そりゃあ、俺はお前らのことあんまり知らないしさ、一応これらも一緒に居るわけで、少しでも知れたらそれでまた何かが分かるようになるつていうか……いや、とりあえずは俺の興味かな」「恰好をつけようとしたけれども最終的に投げたパターンですね」「うつさいわ、ほつとけ!」

「教えてほしいのですか?」

「ああ」

「だが断る。…………と言いたいところですがいいでしょう。ジジイ

……いえ、神様より聞かれたらなるべく応えるようにと言われておりますので」

「神にも容赦ないお前すげえわ」

「どういたしまして」

ほめているわけでは無いんだけどな。

調子を狂わせられっぱなしの俺に対し、ミコは淡々と語りだした。

世界のことと、自分について。

## 10話・表情について

人間の感性からすれば、天使と悪魔が共存しているということはあり得ないという風に受け止められる。

相対してその二種族は仲が悪いのだと勝手な想像で盛り上がっている。確かに、実在していることを知らない人間がほとんどなのだからそれは仕方のないことだろう。

ただ、天使と悪魔と言うのは、仲が悪いわけではないらしい。一部の天使と一部の悪魔がいがみ合っているだけで、特に垣根は存在しないらしい。ここで問題だったのは、一部の悪魔というのが悪魔の上位種だったということである。力で下位種を動かし、一時は天使の住む天界と悪魔の棲む地獄との大きな大戦となつたのだそうだ。それを抑えたのが今の神様。あんな適当な感じなのに実は強かつたという話だ。

のちに、大戦を巻き起こした一部の悪魔は封印されて、神様によって天界と地獄は統一。二種族の垣根を無くして天使と悪魔は共存することとなつた。

そこで、主はあの神様となり今は平和に過ごしている。ということらしい。

ミコの話は要約すればこんな感じだった。

質問するたびに毒を投げかけられたりはしたが、それはまあいいだろう。

「と、まあこんな感じだと思います。お分かりになりましたか?」「大体分かった。たださ、人間界に修業に来るのはなんでなんだ?」「それはアタシが説明してやるぜ!」

意気揚々と椅子の上に立ち上がったスイは、胸をそらして高々と笑い声を上げた。

「『人の心を知り、今後の天使・悪魔としての生き方の糧となるようになる』！ それがアタシ達に課せられた修行なんだぜ。だからとりあえずは学校へ行っておけって話だ」

「なんか、ありきたりと言つか内容の薄い修行だな。しかも終わりが見えなさそうだぞそれ、大丈夫か」

「何言つてんだよ、そのためにお前がいるんじゃねーか！ ってことでも……」これからもよろしくお願ひします……」

「いや、こきなり眞面目になつてどうするのー？ お前はマジでキヤラ作りが下手だな……」

「へっ！？ ああああ、悪魔が眞面目なわけねーだろー……」

「もう滅茶苦茶だな」

「ちなみに、お馬鹿なスイが一度も脱線することなく、噛むことなく説明が出来たのはここに来る前に散々叩きこまれたからと説明しておきましょうか」

「みみみ、ミコちゃん。なんでそんなこといつのま

スイが泣き顔になつてそんなことを言つ。もはや悪魔失格だと思つ。それにしても、やはり天使と悪魔は仲が悪いわけではないのか。ミコとスイを見ていると分かるが、あいつらは仲がいい。あまり一対一で話しているところを見るわけではないが、部屋も一緒に文句は言わないし、いつもやつて絡んだりもしている。

俺の中で、やつぱり天使や悪魔に対する考え方が変わつて来ている。これも、なんだか人間と同じことを言える気がした。見た目や偏見でものを言つてはならないといつのはこういうことなのかも知れない。

「で、気が済みましたか？」

「あ、ああ……。よく分かつたよ。でも、本当に学校へ行くだけでいいのか？」

「それしか今のところは言つて渡されていません。あのジジイも明確に課題をくださればいいんですが」「あ、もう取り繕つこともしないんだ……」

「何のことですか？」

「いや、いい」

やはりこいつは危ない。

人の心を疲弊させ、潰す力を持っている。これはこれは危険な力だ。

「そう言えば、お前たちってなんか特殊な力とかあんの？」

そう俺が聞いた瞬間、何故か食卓は凍りついた。

ミコは目を閉じ、スイはおろおろし始め、音が消えた。

「な、なんだよ……」

「陽助様、プライベートって存知ですか？」

「そ、れは知ってるけど」

「ならば、そういうことにしておいてください。でなければ『しますよ？』

「ひいっ！？」

なんか知らんけど脅されたぞ！？ 何がそんなに気に障ったんだ？

ま、まあこの話はやめておこう。

「なんですかその顔は、早くしまってください」

「顔はしまえるもんじゃねーよー。」

「大丈夫ですか？ 顔が赤くなつてますよ？」

「いや、お前が変な突つ込みさせるからだろつが……」

「気持ち悪いところはありませんか？ はつ……。すみません、

全部でしたね……」

「え、ちよ、なんでお前はそんな暴言はいてくんのーー？」

「違うよ!!コちゃん！ 陽助さんは……カツコイイよー。」

「え？」

「え？」

「あつ」

食卓が静まりかえった。俺は口を開けたまま固まり、ミコは石造

の「」とく微動だにせず、スイは田を白黒させていた。

「め、飯にしようか」

「やうしましょ」

「う、うん」

なんだか、ぎくしゃくし始めた。

と、そんなことも夕食を取り終えると忘れしまったのか、それともそれどころじゃないのか皆勉強に打ち込み始めた。普段なら一週間前から始めるとか一夜漬けにするとかテストの前はそんな感じだったのだが、こいつらが勉強をしていると、なんだかこちらも勉強しなければならない気がしてノートを開いていた。居間に三人、机に座つてカリカリと勉強中である。

だけれどもどうだらうか、ミコは背筋を伸ばしたまましっかりと手を動かしているがスイは決まってうーとかあーとか泣き声を上げながら教科書とにらみ合いをしている。

俺は途中からだんだんと飽きてきて、田のは天使と悪魔の観察にシフトしてしまつていた。

チラリ、とミコのノートを見てみると綺麗にまとめられていて参考書として販売してもいいんじゃないかと思えるくらいのものだった。

その視線に気付いたのか、ミコは顔を上げこちらを見て。

「何ですか、私の指を見ていたんですか？ 指ふえちでしたんですか？」

「なんでそななるんだよっ！？ お前のノートを見てたんだよ。すげえ綺麗にまとめてあるな……」

「天才ですからしかたないです」

「謙遜とかしろよ……。まあいいか。とにかくでスイ、お前は大丈夫なのか」

スイの方へと視線を向けると、やはり机に突っ伏したままぐつぬき声をあげていた。

「大丈夫、……に見える？ 駄目だよお」

「だよな……」

どうやらスイは俺と同レベルの位置にいるらしい。いや、もしかしたら俺より下かもしかんが。

しかし、これはやはりよくない。当然のようにミコが頭がよく、俺とスイは罵倒されるレベルの馬鹿であるという展開は御免だつた。だからと言つて、勉強したところで俺の成績はたかが知れている。学生の本分は勉強である。

……だからどうした、つて話になるよな。

結果、諦めた。

次の日の朝、いつも通りに時間帯をずらしての登校。俺が学校について数分後、ミコとスイが登校してくるのである。今日もどうやら登校途中に歌音と合流したらしい。機嫌のいい歌音が俺の前の席に座る。

「今日も」機嫌だな

「そうだねー。お友達と一緒に楽しく会話しながら登校できたからだよ。だんだん仲良しになつていくつていいことだよね！ 朝浦君もそう思うよね！」

「ああ、そうだな」

昨日よりも若干テンションの高い歌音だつた。

そこであと廊下に田をやると、この間の女子生徒がこりりを見ていた。

少しウエーブのかかった髪に強気な目、出念つと不思議な感覚に見舞われる少女。

「朝浦君？ どうしたの、ぼーっとして」

ハツ、と我に返ると歌音が自分の椅子の背もたれに前向きで寄りかかり、こちらを見ていた。

歌音ならあの子が誰なのか知っているかもしれない、訊いてみることにした。

「なあ、歌音。 あの廊下に居る子なんだけど、誰か知ってる？」

「廊下に居る子？」

歌音が廊下を見据える。しかし、先ほどの彼女はもうすでにそこにはいなかつた。

「誰もいないよ？」

「あ、あれ？ さっきまで廊下に居たのに……」

この間もそうだつた。神出鬼没……とはまた違うのだろうが、いつの間にか現れては次の瞬間には消えているのだ。もちろん、追つたわけではないので、ただここから見えない位置に移動しただけのかもしれないが、天使と悪魔が俺の家に居るわけだから、無駄に敏感になつてしまつてゐる。

「どんな子だったの？」

歌音が訪ねてくる。

「えっと、いり……ウエーブのかかつた髪をしていてさ

一通り彼女の容姿や特徴、雰囲気を伝えた。しかし歌音は頭を傾げて、

「うーん、じめんね。私は知らないや。 今日の部活の時にも他のクラスの子に聞いておくよ。 で、朝浦君。どうしたのかな、その子が気になるのかな？」

「そうだな……つて！ 別にそういう意味の気になるとかじゃなくてだな！」

「きやーつ。ついに朝浦君も女子に興味を持ち始めたのかなつ！」

「なんかその言い方は語弊を招くから止めやつ？」

「なんかその言い方は語弊を招くから止めやつ？」

そんなとき、遠くで声が聞こえた。

「……朝浦様は男にしか興味が無かつた時期があつた、と

「おー、てめつ、ミコ！ 变なことを言つなー！」

俺がそういつた瞬間、クラスの女子軍から反撃を受ける。

「朝浦君！ そんな怖い顔でミコちゃんに怒らないでよー！ 驚いているでしょ？」

どう見たつて無表情そのものですけどーーー？

「朝浦君！ また暴言吐いてるの？ 暴力は顔だけにしてよね！」

え、何これ、ミコの毒舌が伝染でもしてんのかーーー？

「朝浦君！ まだミコちゃんに『様』付けで呼ばせてるの？ いい加減止めよー！」

いや違うそれはあいつが勝手に……。

「ちよ、ちよっとみんな、落ち着いてよ。朝浦君はミコちゃんに怒つているわけじゃないんだよ。顔だつて怖いけどこれがデフォルトなの！ 様付けは、ミコちゃんが面白いからって。……顔が怖いからつて人のすることを全部悪い方向にもつて行っちゃだめだよ、顔が悪いからってー！」

「歌音、それフォロージゃないし……」

「あわわ……。朝浦君がしぶんでいく……ーーー！」

朝から精神的ダメージで俺の体力はゴリゴリと削られていった。

田から一滴のしづくが落ちたのは内緒である。



## 1-1話・対策と傾向、油断

今日は珍しく俺、歌音、ミコ、スイの四人で帰路についていた。夕焼け色に染まる住宅街はいつもとは違つた一面を見せ、風景画として成り立つほどの神秘さを兼ね備えていた。

そこに仲良く並んで歩く四人の姿。

歌音は四人そろつて帰るのがそんなにもうれしいのか、機嫌で、ミコは俺の踵を踏むという地味な悪戯を実行中、スイは腹が減つたと目を棒線のようにして空を仰いでいた。

そんな何気ない下校途中に、不審な影が物陰から現れた。いや、現れたという表現はこの際どうなのだろうか。何もなかつた空間から突如現れた、そう思わせるほどに奇怪な登場だった。

「ねえ、君たち。ん、正確に言つとやこの黒髪ロングの少女が目当てかな？」

並んで歩く俺達の前に男が立ちはだかったのだつた。

その男はスイの特徴を挙げ、にやにやと気味の悪い笑みを浮かべていた。

黒いコートに身を包み、サングラスを着用。髪は黒のオールバックで、乱れは見当たらなかつた。

年齢は俺達より確実に年上。ただ、青年ともいえるが、雰囲気がまるで違う。

良くないオーラといふか、雰囲気といふかそんなものがヒシヒシと伝わってくる。

「な、なんだよつ。アタシになんか用なのか！？」

指差されたスイも驚いた様子だった。ただのナンパにしては手口が少々雑な気がする。

「もしかして口利きの方ですか？ 良かつたですね、朝浦さん。仲間が増えましたよ？」

「俺は口利きじゃねえわ！」

「ちょ、ちょつと朝浦君、あの人なんかおかしいよ」

いつも通りのミコとスイに対して歌音は少し怯えていた。俺だつて  
そうだつた。

こんなわけのわからないことに巻き込まれるなんてことは小学校の  
時以来だつたからだ。

まあ、その時は目つきがどうこうとかで上級生に絡まれただけだつ  
たが。

「とりあえずさあ、後の人はいらないからさ、どこか行つてくれな  
い?」

「お前、意味分かんないこと言つてんなよ。俺たちは今から帰ると  
こだ。邪魔すんな」

小学校の時に切り抜けた技術。自分の欠点を最大限に生かした脅し。  
とりあえずは乱暴な言葉遣いでそして目つきで相手を退かせるもの  
なのだが。

「人のソレじゃあ何とも感じないよ。もつとこう、暴力的にな  
まあ、言つても分かんないか」

その時、ミコの顔つきが少し変わつたのが俺には分かつた。  
それと同時にミコは俺に指示を飛ばした。

「朝浦さん。歌音さんを連れてとりあえずは離れてください。何も  
質問せずに速やかに言うことを聞かないと爪を全部剥ぎます」

そんな切羽詰まつたミコの言葉に対し、男が放つた言葉は別の回答  
だつた。

「いやいや、ここでは何もする気はないよ? 一般人の目があるか  
らね。いざとなれば勝手にそつちが記憶操作してくれるとは思つけ  
ど……面倒だしね。その内また会いにくるよ。スイ=ティシフオネ」  
その後に男はスイのことをもう一度指差し、そのまま背を向けて行  
つてしまつた。

俺には突発的すぎて、何が起こつたのかが理解できなかつた。

それから家に帰るまで暗い雰囲気が四人を取り囲み、歌音は頑張つて盛り上げようとしてくれたのだが、スイはずつと俯いていて、ミコはどこか遠くを眺めていて全くと言っていいほど効果が無かつた。途中で歌音とは別れ、俺たちは帰路についていたがそこでミコが突然口を開いた。

「先ほどのあの男、人間ではありませんね」

それは俺に放った言葉ではなく、スイに対してのものだった。

「そう……だね。あの人は……違うね」

スイの返事はいつものようなハキハキとした活発さが無かつた。

テンションもいつもより三段階ほどダウンしているし、一体何事だつたのだろうか。

俺には何が起きているのかよくわからないので、あまり口を挟まないようにしているのだが、すごく気になる。

「あの人は、私とおんなじ悪魔だよ。階級は私より上、大きな力を感じられたもん」

ぼそ、ぼそ、と言葉を吐き出していくスイ。ミコはそれを黙つて聞いていた。

「スイ＝ティシフオネっていうのは、私の真名。えっと、真名っていつのは本当の名前って意味だよ」

「ティシフオネ……なるほど。そういうことでしたか。では、狙いがあなたと語つことは」

「そう、あの大戦で負けた悪魔族の意思を継いだ人だと思う……」話が転々としている中、俺の頭の中は「ちや」になっていた。仕方なく今日の夕飯を何にしようかなどと考えていると、ミコがこちらを振り返ってきた。

「何を現実逃避しようとしているのですか、生ゴ……陽助様。あなたにとつても無関係な話ではありませんよ？」

「もう注意しても治らんだろうな……って待て、なんで俺にも関係あるんだよ！？」

「それはそうでしょう？　あなたは私たちを神様から任せられた存在

なんですよ？ どうして無関係なのですか？ そのところを詳しく説明できるのならお願ひします。まあ、朝浦様程度の知能では小学生相手にも論破できるかどうか怪しいところですけどね、ふつ「こいつ笑いやがったよ！ 無表情で人を小馬鹿にして笑いやがったよ！」

「ちよ、ちよっとお……一人とも喧嘩は駄目だよう……ひつ」キヤラを作ることすら忘れて俺たちをなだめるスイ。これは重傷だと悟らざるを得なかつた。

ミコは無表情でスイの横顔をただ眺めていた。

「ど、とりあえず、家に帰つて作戦会議だ！ よし、帰るぞ。走つて帰るぞ！」

言われてしまつては仕方がない。それに、スイの困つたよつた顔をいつまでも見ていたくはなかつた。

俺が走りだすと、続いてミコがついてきた。

「あわわっ。ま、待つてよう！」

スイも混乱はしていたが、一応ついてきてくれた。このままマンションのエントランスまで走り抜こう。

嫌なことを今は忘れてさつぱり出来るよ。

何か大切なことを考えるときは、一度頭を空っぽにした方がいいのだ。

だから、家に帰つて落ち付いてからもう一度考え直そう。これからは分からぬ。

正直何が起こつていいのかミコとスイが何について話していたのかは分からぬ。

でも、俺にだつてできることがあるはずだつた。

何かと問われても答えることはできないけど、何かがあるはずだつた。

だつて俺は、神に天使と悪魔の世話を任せたんだろう？

「陽助様はいつも頭が空っぽですけどね」

「人の心の中を読むな！？」

夕飯が終わり、皆が机に再びついたころを見計らって俺から本題を切り出した。

「えつと、今、何が起きたんのか詳しく教えてくれないか?」  
ミコに言つと何か言われそうなので、スイの方を見てそう訊いてみた。

「……多分。多分だけど、あの人は私のことを狙つてゐる。地獄に連れて帰つて何かしらの行動を起こすと思う……」

「狙つてる? スイつてそんなにすごい奴だったのか?」  
地獄の、しかもスイより階級が高いらしい悪魔がスイのことを重宝しているかのような口ぶりに俺は驚いた。

しかし、スイは。

「つうん。私はすぐないよ」

「……? どういう意味だ?」

「……」

そこでスイは黙つてしまつた。

リビングには沈黙が訪れる。ミコも全く口をはさんでこなかつたし、これはいよいよ切羽詰まつてきたのかもしれない。

「さて、今日のお風呂担当番は誰でしたでしょうか?」

幾つか時が流れた後、ミコが突然そんな事を言い出した。

「ちょっと、おまつ、……空気読めよ」

「空気を読むのはＫＹ陽助様の方です。今ここで何を考えようと事態は変わりません。分かったことをまとめて理解しておく、それで十分です。後は普段通りに過ごしましよう、それが一番だとは思いませんか?」

確かに、ミコの言つとおりかもしれない。

今ここで不安な気持ちを増大させようと、何が起こるかは分からないし、現状は変わらない。ならばこいつを逆に受け止めてしまえばい

いのだ。

何が起きるかもしないのか、といつ予想を立てていればいい。  
それこそ不測の事態に備えて。

「それに、いざとなつたら陽助様がいます。……………超

頼りないですけどね」

「何だそれは！？」

「冗談です。スイ、心配しなくても私たちがいます。何が起ひるつ  
と、心配はいりませんよ」

「ミコちゃん……………陽助さん……………」

スイは少し安心したのか、目を潤ませて俺たちのことを見上げてい  
た。

なんだかんだで俺が出来ることはなさそうだが、がんばってみよう。  
「それにしてもミコ。お前も氣のきいたことが言えるんだな」「  
何を言つてているのですか？ 私はいつも氣配りしていますが、陽  
助様以外限定で」

「何故俺は差別されているつ！？」

「差別ではありません、区別です。……………といつのも決まり文句にな  
つてきたのであえて言いましょう、差別です」

「だからなんでだつ！？」

「ふふふつ、あはははははつ……………」

氣が付くと、スイが先ほどまでの辛氣臭い顔とは一転して、笑つて  
いた。

やはり、いつも通りである方がいいのか。

流石ミコだな。きっとこの芝居もスイのことを見遣つて……………。  
「私は嘘など吐きませんので」

「……………。」



何事もなく次の日を迎えた。昨日のミコが言っていたように、そんなに心配することもなかつたのかもしれない。

カーテンの隙間から刺す朝口によつて半強制的に目を覚まされる。ふと気がつくと、いつものミコの暴力＆毒舌の目覚まし時計が作動していなかつた。

時間は6時半、いつもならこの時間帯まで寝て居ると鳩尾に肘を入れられるのだが……それが無い。

何か物足りないような感覚を頭から追い出し、リビングに向かう。そこには誰もいなかつた。

寝ぼけ眼を擦つてみても視界が一転することはない、誰もいないのだ。

ミコも、スイも。いつもは流れているはずニースも入っていない。テレビの電源がついていないからだ。ミコは人間界のことを知ることが出来るとニースは毎日欠かさず見ている。スイは占いのコーナーを朝の楽しみにしていていつもテレビの前に陣取つているはずなのに、居ない。

「おい、……嘘だろ？」

慌ててミコとスイの部屋の前まで行く。ドアを叩く。

「寝てんのか、おい。朝だぞ！……いないのか？ 本当に居ないのか？」

ドアノブに手を触れる。開けて本当に居なかつたら、そう思つて不安で仕方がない。

昨日出会つた不審な男の台詞から読み取れる意味。スイが言つた、私を狙つて居るという言葉。

もし、このドアを開けるとミコとスイがいて、実は俺はまたミコに騙されていて。

意地悪くミコが毒を吐いてくれるならそれはそれでいい。スイが涙目になりながら俺を変態と呼ぶのならそれでもいい。

この嫌な予感を早く振り払いたかった。

勢いよくドアを開けると、そこには綺麗に折りたたまれた布団。それと、ミコが立ちつくしていた。

不安の中に安堵が甦るが、それも束の間だった。何か様子がおかしい。

羽根が、黒い色をした羽根が部屋に散乱している。的確に場所を言うと、寝る際にスイの布団が敷かれているその場所を中心として円を描いて、だ。

「ミコ。何だ、居たのか……。スイは？」

何かじけゅじけゅした気持ちを抑えこむようにしてよがへ声を出せた。

必要最小限のことしか話せない。これ以上声を出せると、叫び声が溢れそうだったから。

「やられました……。おさらば、昨日の夜でしょう……空間転移によってスイが連れ去られました。この羽根は抵抗した際に抜け落ちたものだと」

ミコは普段より少し低いトーンでそう言った。

いや、実際はいつもと声は変わっていないのかもしれないが、俺にはそう聞こえた。

「連れ去られた……？ もしかして昨日帰り道の男に！？」

「……ええ。しかし場所は割っています。先ほど感知しました、今から私はそこへ行ってきます」

そう言つてミコは神秘的に光る一枚の羽を広げた。白い天使の羽である。

見るのは一度目だが、明らかに最初に見た時より輝いているよう見える。

「待つてくれ、俺も行く」

恐怖心を押えてそう言つ。

「何を言つてゐるんですか」

そこにミコの冷たい言葉が返つてくる。

「人間が悪魔に対して何が出来るのですか、昨日もそうだったでしょう。ここは私が行きますから陽助様は普段通り学校へ行つてください」

そんな言葉に、俺は恐怖を忘れて少しの怒りをおぼえた。

「何言つてんだよ！ そんな俺だけが無関係つて顔して普段通り過ごしてられつかよ！」

「そうじやないんです。何も出来ないからついてくるな、と言つてゐるんです。それに、これも修行の一環と考えれば大したことはありません」

そう言つてミコは窓のさんに足をかける。

どうしても俺を連れっていく気は無いらしい。しかし、俺は納得できなかつた。

理解はできる。俺はただの人間だから、悪魔に対して何もできることはないと。

納得はできない。ただの人間だから、この問題は気にせず普段通りでいる。

神様から直々に言い渡されたこの『二人をあずかれ』という命令。その意味はどこまで解釈できて、広がつていくかは分からぬ。だけども、俺はその意味を出来るだけ拡大解釈していきたい。言つなれば、プライド。

一般人が何を、とそう言われるかもしれない。でも、俺は。神からの命令のそれを、『二人を見守つてくれ』と、そう捉えたい。おこがましいかもしけないが、俺はそう思つた。

ミコやスイは、普段はただの女の子なんだ。学校に通つて、勉強して、友達といつて、笑つて、そうして暮らしている人間と変わらない表情を見せる女の子たちなんだ。

それを男の俺が放つておけるのだろうか。

天使とか悪魔とか人間とかは関係が無い。全てをひつくるめて、俺

は言ひ。

「待て、ミコ。確かに俺は何も出来ないけど、見守るつてことはできるだろ」

ミコが一いち撃を振り返る。

何を言いたいのですか？ とやつ問うよう。

「神から直々に受け取った命令だぜ？ 破れないだろ、そんなもん。破つたら天罰が下るんじゃないのか。 そんなの俺は嫌だね。だから、俺の身のためを思つて言う。連れて行け」

それから少しの沈黙が訪れる。

ミコは考へてゐるようだつた。こうしてこゝにもスイに危険が迫つてゐるのかもしれないのだが、ミコは考へてくれてゐる。結局、こゝでも弱さというものは露呈されてしまつてゐる。

しかし、退くわけにはいかなかつた。

やがてミコはふう、と小さく息を吐いて肩をすくめて見せた。

「ウジ虫のくせに何をそんなに格好つけているのやら、恥ずかしすぎてこちらが真つ赤になりそうです」

「なつ、お前つ……！」

「分かりました、一緒に行きましょう。ただし、絶対に邪魔になるので後ろの方にいてください。前に出でたら私が蹴り飛ばします」

「お、おつわー！」

毒舌も気にならないまま、俺はそつ返事をしてゐた。

「やはり、君はすごいよ。もつたいない。どうしてそんなところにいるんだい？ 地獄に戻る気はないのか？」

昨日と違ひ、サングラスを付けていないホールの男は、スイに向かつてそう言い放つた。

存在から感じられる力の量はすさまじく、スイでは敵わないことは

明白だつた。

それなのに男はすばらしいう。スイにその意味は正確に伝わつてゐた。だからこそ彼女は拒む。

「い、嫌だねつ。お前なんか知るか！」

「はつはつは……、どうしてそつ強情になるのかな。ティシフオネ」

「その名前で呼ぶなつ！」

ブアアツ、とスイの手から出現した黒い粒子が男に向かつて飛ぶ。それを男は片手で粉碎する。

圧倒的力の差。しかし、男はスイを傷つけることはしない。

「もつと見せてくれないか。君だつて解放したいはずだ、久々に楽になるのもいいかもしねいぞ？」

「そんなこと……」

「ない、と言い切れるのか？ 本当に？」

「……」

「ほら、素直になるといい。俺はここで黙つて見ているから」

暗いこの場所では人氣も少ない。ただ、それだけではスイの心配事は拭えない。

なんとしてでもここからは逃げ出さなければならぬ。

辺りを見回すが、逃げられるとしたら空。天井に大きな穴が空いていてそこからしか出入りできぬようになつてゐる。周りの様子から察するに、ここはどこかの廃墟だらう。

空間転移によつてどのくらい飛ばされたのかはわからない。ただ、そんなに遠くまで運ぶほど男は力を使つていないうつにも見える。

「う、う、だめ。駄目だよう……」

男は黙つてスイを見つめるだけだつた。

何も気をそらせるようなものはない。攻撃も男には通じない。

どうすれば、とそう考えていた時、周りを囲んでいた壁の一部が吹き飛び光が差し込んだ。

そこにはミコと陽助の姿があつた。

「ええ……ミコ、お前……」

「何か問題がありましたでしょうか？」

そんな軽い言葉を交わし合いながら、この廃虚内に入つてくる。

しかし、男はそれを許さなかつた。

「思つていたより早かつたね。ただ、ここには入つてこないでほしい」

黒い球体を生み出し、それをミコと陽助に向かつて放出する。

暗黒の電流をまとつたそれは、地面に着弾すると、四散して大きな爆発を起こした。

「ミコちゃん！ 陽助さんつ！」

煙で何も見えなくなる中、男の声だけが聞こえてくる。

「姿形も無くなるくらいに粉々になつたな。あの天使も人間がいては相殺することは出来ないだろう。さて、スイ＝ティシフオネ。これで君はどう感じるかな」

消された、ミコと陽助が。

死んでしまつた。新しく出来た温かい家族が、日常が。

煙が晴れてその姿が鮮明に映る。そこには大きな縦穴と天使の羽根が数枚落ちていた。

それを目の当たりにしたスイの中で何かが切れたような音がした。回線が切り替わる音、ブレーカーが全て落ちて、視界が暗くなる。もう何も考えることはできない。もう何も感じることが出来ない。

もう、壊すことしかできない。

男はスイが切り替わつたのがしつかりと分かつた。

感じられる力の量が先ほどのちっぽけなものに比べて爆発的に増大したのが分かつた。

知らず知らずのうちに笑いが漏れ、汗を流していた。

要するに男は興奮していた。このすばらしく大きな力に対しても、それが自分のものになると考えただけで震えが止まらない。恐怖の震えではなく幸福の震え。

馬鹿になりそうなほどのか、このイカレた感じがたまらなかつた。「ふはははははは！ 何てことだ、こんなにも予想を上回るとは！」

男は熱でも出たかのように身体が熱くなつていいくのを感じていた。「強大だ、最強だ、最悪だ！ 何とも言い難いこの力、これさえあれば天界なんぞ捻り潰せる。そんなことよりも私が神になることも可能だ！」

それにして先ほどからスイは動こうとしない。少し不思議に思い、じつと目を凝らして見てみる。

ブレていた。スイの実像がブレて見えていた。おそらく、力の大きさが男の視界にも作用しているのだろう。

それにしても汗が止まらない、と男は首の辺りや額を拭う。額の汗を拭つた瞬間、おかしいほどの汗が顔を覆つた。

「何だ、俺はこんなにも……？」

違う。

何か違和感を感じた。

額を拭つた瞬間に、汗の量が以上に増えた。これは何を指しているか。

汗を拭つた手を見てみる。

無い。

手首から上が紛失していた。

「なん、だ、これはあああああつ！」

先ほどから出ていたのは汗ではなかつた。血だ。血があふれていたのだ。

反対の手で首元を触る。

一部分が抉りとられていた。

「はつ、ははははつ」

熱は痛み。汗は血。

力の大きさに驚嘆しているつむことんでもないことが自分の身に起  
こつていた。

だとすると、先ほど見えたブレるスイの姿は、残像。

「俺は、何でモノを……。こんなものはつ……」

次の瞬間には左腕が無くなつていた。

「ははつ、ははははははつ！ 流石、流石だよスイ＝ティシフオネ  
！ 君は素晴らしい！ ゼひ地獄に招待しよう、私たちの仲間が待  
つている、さあ！」

後ろに狂氣を感じた。

それは最早一個体から発生させられるはずのない異様な、異質な存  
在だった。

男は声を出すことが出来ない。

「カ、エツ……セツ」

呪いを紡いで発したような声で言葉は飛ぶ。

最後に男の瞳に映つたのは血まみれになつた少女。

まぎれもなくそれは悪魔だった。



## 1-3話・家族（前書き）

すこし遅れてしましました。すいません！

瞬間、だつた。

いや刹那と言つべきだらうか、俺は空にいた。比喩でもなんでもなく、本当に空にいた。

「いきなり失礼な方ですね、粉々になるところでした」いつも通りの無表情でミコは言つ。彼女は今、俺のシャツの首もとを掴んでいた。

「ぐ、苦しい……。ミコ……俺死ぬ

「またまた」冗談を、陽助様がそんなことで死ぬはずがないでしょ

う?」「

「無理無理つー息がつ

「では、手を離しましょうか? 窒息死なら身体は綺麗に残りますが、

転落死は……悲惨ですよ?」

どちらにしても殺されるのか…つ

ところが、今はこんなことをしている場合ではないのではないだろうか。

スイが大変な目に合つているはずなのだ。

そんな俺の考えを察してか、ミコはいつもより平淡な声で呟いた。  
「心配するべきは……私たちがスイに巻き込まれないか、と言つことだと私は考えます。陽助様、見ておいた方が良いと思います。あ

れが、スイの抱えているものです」

ミコのそんな言葉の後に、断末魔と呼ばれる叫び声が廃墟内にこだましたのが分かつた。

それは、スイのものではなく先ほど俺たちに向かつて攻撃を放つた男のものだった。

空気を裂くような音、おそらく俺は生まれて初めてそんな音を聞いたのである?。

一人の少女が血溜まりの中に座り込んでいるのが見えた。スイだ。

彼女は肩を震わせ、散ったミコの羽根に目が引き付けられている。

「降りましょうか」

ミコはただそう言って、俺のシャツの首もとを掴んだまま下降を始めた。

地面まで残り何メートルというところでスイがこすりに気付き、少し顔を輝かせる。しかし、すぐにその笑顔は失われていて、どこか苦しそうな顔になつていつた。

何が言いたくて、何を言いたくないのか。今の中はどうなつているのか、その複雑な気持ちは俺には理解できるとは思わなかつた。想像することは簡単だ。だが、本質までは見えはしない。それにもしかしたらスイ自身、自分がどう思つてているのかが分かつていよいような気もしたからだ。

無事に着陸し、ミコも俺の横に立つ。

スイは顔を伏せたまま拳を握りしめている。肩を震わせている。

「えーと、何だ。その…………うん…………」

何を言つていいのか、分からなかつた。

「わ、私は…………、こんな、こんな…………」

嗚咽を漏らしながらスイは呟く。自分の力に対しても、言葉を。

「私は、こんな化物です…………。自分で制御できないほどの力を持って余した、弱い悪魔です…………」

つうつ、と一筋の光がスイの瞳から零れる。彼女はそれを拭うが、手に残るのはただの赤だつた。

それを見てまた彼女は続ける。

「私が人間界に来たのは、…………精神の強さ、心の強さを高めるためでした…………。だから、強く在るつとしました。一般的の悪魔のように、なろうとしました。でも、でも、駄目でした。自分の力は抑えきれなくて。頭に血が上ると、もう何も考えられなくなつて…………。さつきだつてそうです。ミコが、あの程度の攻撃を避けられないわけないのに、なのに、私は、勝手に…………」

ぴちゃ、ぴちゃ、と赤が跳ねる。

彼女の綺麗な黒髪は返ったモノを受け、酷く固まっていた。

「暴走、してしまったんですね……。私は自分の力さえも扱うこと  
が出来ないんです。そんな、欠陥品なんです」

「……。帰つて風呂入らないと、髪酷いことになつてんぞ」「  
「帰れません……、人間界に来たばかりなのに。こんな、こと  
して……」

「今日の風呂掃除当番は、変わつてやるからさ……」

「駄目です。こんな、危険な欠陥悪魔……そばに居たら駄目です」「  
「時間帶的に学校は遅刻だな、朝飯も食つてねえし」「  
「学校になんて行けません……。無理なんですよ。やっぱり私なん  
かが、修行したつて無理なんですよ」

「つるせえよ」

「え……？」

スイの話を聞いていて、彼女は何を考えていたのか。そんなことが  
少しずつ読みとれてきた。

だから俺は、かける言葉を見つけられた。かなり、強引なものだが。  
「お前は何を言つてんだ。修行なんていつしたよ、お前のあのキヤ  
ラヅくりがそつだつて言つんなら全くの問題外だよ」

「そういうことじや、無いんですよ。陽助さんは怖くないんですけど  
？ 簡単に人を、悪魔を殺すことのできる力が近くにあるんですよ  
？ しかもそれは制御が効かなくつて、危険なんですよ！？」

「怖くないね、誰がスイなんかを怖がんだよ。それにさ、今まで一  
緒に暮らしてきて……つつてもまだ一ヶ月も立つてないけども、危  
険なことなんてあつたか？ そんなに危険だったか？ お前はビク  
ビクしながら暮らしてたのか？」

「そ、それは……違うけど……」

「じゃあ、問題無いだろ。それに俺はまあ、矛盾しちまうけどさ。  
怖くないわけではないよ、でもスイを信じてるから」

「え……？」

そこでやつとスイは、こちらに顔を向けてくれた。

頭からペンキを被ったかのように赤色に塗れた彼女は小動物のよう  
に身体を震わせていた。

「スイは本当は強い子なんだろ、そんなことぐらいい分かる。克服し  
ようとわざわざ人間界に来たんだろ。あきらめずに、だ。そんなス  
イは絶対弱くないと俺は思うんだよ。力とかそういうことじやなく  
てな」

「でもっ……私は……」

「でもじゅ

」

「でもじやないですね。まったく長々と説教（笑）を垂れ流す陽助  
様のせいで遅刻は確定ですね」

「ちょ、おい。このタイミングで何を……」

「とりあえず黙つていてください」

いきなり話に割つて入つてきたミコは、当たり前のように俺に毒を  
浴びせつつスイに近寄つていぐ。

「陽助様も言つていたように、私も信じています。それにいざとい  
うときは私も力を使います。それでどうにかなるわけでもありませ  
んが、なんとか抵抗します。その間にあなたは自分で力を抑えてく  
れればいいんですよ。そう、信じているからこそその作戦です」

ミコが今までにない優しさで、そう、まるで天使のような包容力の  
ある声色でスイを諭す。

そして彼女に触れ、汚れることもかまわずに抱きしめる。

「私たちは『家族』というもののらしいですよ。一緒に家に住んで、  
助けあつていく集団のことを指すそうです。明確にはそうでないか  
もしれませんが、そんなことはいいんです。私たちは家族。だから、  
迷惑かけたつていいんです」

「う、う……ミコちゃんああああん！」

ついにスイが決壊した。ミコに抱きつき、大声で泣く。泣く。

ミコはそれをいつもの無表情に一般人には見分けのつかないだらう  
少しの笑みを混ぜて受け止めていた。

そして俺はと言うと、美味しいところを持つて行かれたと言つ」と

に今気付くのであった。

「天界に連絡を入れておきました。この場は何とかしてくれるでしょう、私たちは一度自宅に戻りましょう」

一通りスイが泣きおわった後、ミコが唐突にそう言つた。

心なしかいつもより表情が固く、それでいてどこか焦つているようにも感じられた。

が、それも一瞬のことで瞬きをするとミコはいつもの表情に戻つていた。

普段から無表情なミコの顔は些細な変化を見出すことがとても難しい。だから俺は何かの勘違いだと思つことにした。

スイのことが片付いて、余計なことを考えたくなかつたからかもしれない。

「そうか、じゃあ戻るか。…………と言いたいところだけど、スイはどーすんだその格好」

スイはペンキを頭から被つたかのように全身が赤塗れである。それに先ほどまでは気にしていていなかつたが、臭いが酷い。からうじて吐き気をどどめている現状だ。

「うつづふ…………。なんか体調がおかしくなつてきた」

「そうですね。この状態だと不審に思われますよね。では

そういうとミコは手をスイに向かつてかざした。するとスイを中心 に円が描かれ、円筒状に光の柱が出現する。その光に?まれたスイは慌てふためいている。

「ふえええつ！ 何なんですかこれ！？」

「じつとしていてください。余計なモノを落としている最中です」  
光が完全に消えたころ、その中心には綺麗さっぱりと赤を落とした  
スイがとんび座りで目を瞬いていた。また

「す、すごいです！ 洗濯機みたいですね！」

「その表現はどうかと思いますが……。まあこれで帰れますね。さ、

私たちは素早く帰りましょっ」

そのミコの物言いに俺は何故か悪寒が走った。そして徐々に嫌な予感と言つものが膨れ上がつてくる。

私たち、は？

「では、陽助様。地を這つてお帰り下さい。今日中にたどり着ければいいですね」

「え、おい？ ミコ、何を言つているんだ？」

ミコは羽を広げ、スイの手を掴んで上昇する。

え、あれ、これつて……。

「おいおい、冗談キツイぜ……。ひそでしょ？」

「（ニヤリ）」

「ちゅちゅ、おかしうつて。何の装備もなしで山下れるかあつ！」

男がスイを転移魔法とやらで飛ばしたのは山の中の廃墟だった。それゆえに自宅からこっちに来る時にはミコに運んでもらつたのだ。もちろん、コンクリートの道なんて存在していない。道なき道という表現がぴつたりとそのまま当てはまるかのような山道が田の前には広がつている。

俺の絶望を知つてか知らずか、ミコの姿はだんだんと小さくなつていぐ。

「え、ええー……」

「冗談ではないらしー。」

「み、ミコちゃん。陽助さんかわいそうだよ……」

「いえ、いいんです。ここに来るときには足手まといこまないないいうこと言つておきましたから」

「でもそれって、ここに来るまでの話じゃないの？……、ミコが

やん。なんか怒ってる?」

「いいえ。別に」

三月の一晩は風に流れ消えていった。

## 14話・勉学に励む（前書き）

こんな時間に投稿してすみません！  
ギリギリ三日以内です。はい。

スイの一件が収まった後、また新たな問題が発覚した。いや、別に命にかかるような事件だと天使やら悪魔やらが関わっているわけではない。

一言で言つなら、学生には定期的に訪れる事件。いや、事件と言つよりもかは壁。

まあ、定期テストのことなんだけだ。

この間の一日、結局学校はサボることとなつた。それが響いたのか、テスト前の追いこみ押し込み授業が受けられずに有力な情報（出題傾向）が得られなかつたのだ。

その日に限つて歌音も休んでいたらしく、友達の居ない俺には頼れる相手がいなかつたのだ。

しかし、歌音がこれではいけない！ と知り合い関係を当たり、勉強会を開いてくれることになつたのだ。

で、今は学校の図書室絶賛勉強中…… のだが。

「え、ええ～。虚数つて何？」

「そう言えば天使の中には虚数を応用して術を使う者もいたと聞いたことがありますが」

「何なに？ 天使つてなんの話かな？ ミユちゃん」

「お前らちょっと黙つてろよ……。後、余計なことは……」

「ちょ、ちょっと！ 図書室では静かにしなさいよ…」

スイ、ミユ、歌音、俺、芹川の5人が図書室の一つの机を占領し勉強会（？）を開いていた。

歌音は友達関係からノートのコピーなどを持ち寄つてくれた。芹川は違うクラスだがテストは全クラス共通なので、問題はない。だがしかし、この状況はどうだろうか。

レベルの高い女子4人の中に一人男の俺。周りからはヒソヒソと陰口が聞こえてくる。

は一れむ状態だわー、とか朝浦王国が形成されているわー、とかそんな感じの。

一部の男子勢からは刺さるような視線が。  
考える俺はおかしいのだろうか。  
怖がられるよりいい、と

「寝る間に用意しておいた。」「うーん……もうアタシは寝るのー。」

「それはどうして意味だよ？」

あ、二、三、穂をやん、ここ教えて、

六二 とそひはれ ひじの

眞面目は勉強しているは何陋し一人組  
不眞面目なのは元便と悪魔の一人組。

これ、勉強になつてゐるのか？

勉強会は絶対に拗らなし  
通りのかもしない！

情報の交換はそれなりに良かつたとは思うのだが……。やはり集中

「まあ、止むから木戻しめいか、なうマスクは寝組の二郎、三郎

は……ノートすら開いてないし

「私は大体理解できましたので、

う時間だよ

今学校はテスト期間中なので、生徒たちを解散させようと学校の色々な場所がいつもより早めに戸締りを始めてしまうのだ。もちろん部活は期間中活動停止である。

時計はもつすぐ5時を指そつとしている。

「ううん、なんかもつたしなしよね。折角部活しなんだからみんな

「美里、これ一応名目は勉強会だから。雑談じゃないから」

「歌謡の書いたい」よりも分かるか……」

「どこか場所を変える? ..... そうだ、朝浦くんち行こうよ!

人暮らしだったよね？」

ぴきーん、と俺は嫌な予感とともに凍りついてしまった。

「いや、あの、それは、ちょっと、」

「えー、なんでなんで？ あつ、まさか片付いてないとか？ 男の子の一人暮らしだもんねー。大丈夫だよ！ 私が掃除してあげるから！」

「そ、そうだ！ わ、私も手伝つからなつ！」

何故か芹川まで乗つてきた。そしてどうしてそんなにも推していくのか……。

いやいや、このノリはよくない。よくないぞ！ ちょっととしたところから俺が同棲（泣）をしていることがバレてしまう。

助けを求める形でミユを見る。彼女はぐつと親指を立てて見せて。

「それはナイスアイディアですね」

「おかしいだろおおおおおおおがつ！」

俺は咆哮した。

「なつ、どうしたの朝浦君！ そんなに嫌ならしいんだけど……。そんな叫ぶほど嫌だつた？」

歌音が潤んだ瞳で見つめてくる。わけが分からないよ。

ミユは何を考えているんだ……つ。俺を過労死させる気かつ……。

「いや、あの……」

「な、何だつ朝浦陽助！ 何か隠しているのかつ。人を家に入れたくない理由が……はつ！」

何が『はつ！』なんだ。

といふかどつにかしてくれ。この中で俺の味方はいない……わけじゃない！

「スイ、スイ！ 起きろ。勉強会の場所を移そうと思つんだがどこがいい！？」

「ん……つう？ おうち……」

うわああああああ！

「え、おうひ？ スイちゃんはもう帰つひやうの？」

「んう？ だつて、おうひ行くんでしょ？」

「え？」

「そりかそりか！ 分かった分かった！ 僕の家に行こうといつあえず黙ろうかスイ！」

駄目だ、これ以上スイを覚醒させてはいけない。そして無表情で笑うなミコ！

どうしていいなった。

「おっじやまつしまーす！」

「お、お邪魔します……」

「…………」

連れてきてしまった。もうここまできたら隠し通すしかない。ミコが余計なことをしなければいいが……。スイは帰り道の途中で意識が戻り、自分のしたこと顔を青くしていた。どうやらスイは協力してくれるらしい。まずは確認。何かボロが出るのではないか。よし、玄関にはない。次はリビング。

ぞろぞろと後ろについてくる歌音と芹川。何が珍しいのかきょろきょろとあたりを見回している。

リビング。何か危ないものはあああああつー？

リビングの、テレビの、前の、カーペットの、上。なんで靴下があるんだよおおおー！

二 ソックスって言うのかあれ？知らんけどとりあえず回収つ！ シュバババババ、とおそらく超高速で靴下を回収し、制服のズボンに押し込んでおく。

「あれ？ 朝浦君が……瞬間移動した？」

冷汗をかきつつ俺はみんなを机へと誘導する。

「みんなは座つてくれ……。俺は飲み物を持ってくるから

「朝浦陽助？ なんか疲れてないか？」「

「別にそんなことは……ない」

「あ、アタシ教科書取つてこないと」

今、なんて？

「え？」

「あつ……」

「そつかそつか、スイも手伝つてくれるのか。ありがとじつー。」

「うええええつ！？」

スイの頭を両手で掴んで台所へと連れて行く。  
台所内に入つたところで手を離す。

「わざとやつてのかお前……」

「ひいいつ！ 怖いよお……そんな怖い顔しないでお……」

すぐ涙目になるスイ。なんか俺がいじめてるみたいじゃないか……。  
いや、実際第三者がこの場を叩きしたらそつとしか思えないような  
状況だが。

「まあ、後から気を付けてくれ。それと、これはお前の靴下か？」

「あ、うん。昨日から脱ぎっぱなしだった」

「ふ・ざ・け・て・ん・の・か……つー」

「いたいいたい。頭掴まないでお……。アタシは悪魔だぞつ！」  
と、そこで後ろから何者かの雰囲気を感じた。  
振り向くとそこにはカメラを構えたミコが。

「何してんだお前は」

「いえ、大変ですね。と思いまして」

「誰のせいだこの状況は！」

「私は歌音さんに力添えただけなので」

「それが余計なことなんだよ！」

「そろそろ戻らないと不審に思われますが？」

「……くつ」

ものすごく納得できないが、ミコの言つとおりだった。  
とりあえずはバレなければいい。凌げばいいのだ。簡単なことだ、

「こいつらが何もしなければな……。

人数分のコップを用意し麦茶を汲んでトレイに載せる。一応全てお客様用のコップだ。こいつらでもボロが出るからな。

「わりい、待たせ……あれ？」

リビングに戻ると、歌音の姿が見当たらなかつた。芹川は何故か椅子に座りながらもじもじしている。

「歌音は？」

「えつと……他の部屋に」

「何だと？！？」

ガタン、と俺の部屋の辺りから物音がした。

本日一度目の高速移動。部屋の前に立ち、扉を開け放つ。

「何してんだ歌音！」

「うおえつ！？ えーと、工口本探し？」

歌音は四つん這いになつて俺のベットの下に手を入れていた。

「どうか、スカートの中が見え……ない。

「いやいや、そんなものねえから… とりあえず出でくれ

「うえー、一冊ぐらいあつてもいいと思うんだけど」

ブツブツ文句を言いながら部屋を出していく歌音。何にせよ俺の部屋でよかつた。いや、よくはなかつたがよかつた。

そしてそれから数時間、俺はボロが出ないかどうかヒヤヒヤしながら過ごしていた。

もちろん、勉強の内容なんて頭に入つてこなかつた。

「もう言えばさあ」

勉強がひと段落ついたころ、歌音が唐突に言い出した。

「この間朝浦君さ、人探してたじやん？」

「あ、ああ……」

俺は気を張るのに疲れていて、曖昧な返事しか出来なかつた。  
そういうえばなんて言つてたつけ。他のクラスの女子の話だつたか。  
思い出した、あの女の子だ。放課後に見かけた記憶に引っかかつた彼女のこと。

「えつと、その隣のクラスの子なんだけじね。結穂ちゃんとは逆の方向のお隣さんなんだけど、だからB組になるなんだけじ。そらみやあんり空富杏梨ちゃんつて言つんだつて」

「空富杏梨か……」

「なにつ！？」朝浦陽助はまた別の女子生徒に手を出さうとしているのか！？」

「どうしてそうなるんだ！ といふか、俺は誰にも手を出してねえよ

「あれあれ、結穂ちゃん？ 何を慌てているのかな～」

「美里つ！ 変なこと言わないでよね、別に何もないわよー！」

「朝浦王国民がまた増えるのですか？」

「何それ！？」図書室でも聞いたけど流行つてんのかー！」

そんな突っ込みを入れていて、俺はその女の子についての記憶をたどつていた。

何か、引っかかるものがあつた気がするのだ。

それが何かは露がかかつたように分からなかつたが。



15話・空と太陽、温度は低下（前書き）

ケータイより投稿です～！（ ～ ）

## 15話・空と太陽、温度は低下

『名前、名前はなんていうの？』  
少年は訊いた。どこか寂しそうに「ソラ」を漕いでいる短髪の子に向かつて。

短髪の子はサンダルを足に引っかけながら「ぶらぶら」と揺らしていた。どこか不満そうな少年を見るその目つきは子供ながらに可愛くはなかつた。

公園には一人の子供以外には誰もいなかつた。

『ソラ。僕の名前はソラ。』

『そら？ ソラっていうんだ。じゃあ、ソラはどこから来たの？』  
続けて少年は訊いた。ソラはうーんと唸つてから上を指差した。  
穏やかな日差しが差す春のことだった。太陽は優しく一人に微笑んでいるかのようだつた。

『空、かな？』

『えっ。ソラは空から来たの？ なんか面白いね！』

『面白いの？ じゃあ、タイヨウ君はどこから来たの？』

『おうちから……だよ？ あっちに僕のおうちがあるんだ。それより、僕の名前はタイヨウ君じゃないよ…』

『タイヨウ君なら、僕と仲良くなれそうだよ。だから、タイヨウ君』

『どうしてタイヨウだと仲良くなれるの？』

ソラはブランコから飛び降り、空を見上げた。真っ白な雲がふわふわと行き場もなく漂つている。

『だって、タイヨウとソラっていつも一緒に居るよ？ しかもずっと近くに！ 絶対仲良しだよ』

『だから僕たちも？』

『そう！ ね、遊ぼうよ。一緒に』

『そうだねソラ！ 僕たちは仲良くなれるよ、だってもう友達だもん…』

『あはははっ』

そう笑うソラの笑顔は輝いていた。それはタイヨウにも勝るくらいの輝かしさで。

ただ、天気の良い日なんてものは永遠ではない。雨が降る日もあれば、雪の降る日だってある。台風だつてぐる」ともある。

二人は、一緒に居られなかつた。

見上げる分には空と太陽は近い。同じ場所にある。でも。本当は空なんてものは存在なんてしてなくて、太陽は地球の外にある恒星で。

一人の距離はあまりに遠く、遠く。

夜になれば、一人ともいなくなつてしまつのに。

星が落下した。

いや、正直に言おう。星が舞つた。

頭を何にぶつけたのかとか、また//コの仕業だとかそんなことではなかつた。

ベットから落ちて床に頭を打ちつけていた。

「いつ……。おいおい、ガキじゃないんだから……」

頭を振りながら立ちあがる。床は冷たくて気持ちがよかつたが、今は涼んでいる気分ではなかつた。

何か変な夢を見た気がする。一人の少年の夢？ 内容がよく思い出せない。まるで霧がかかつたかのようにもやもやと見事に何も思い出せない。

感覚で言えば、喉まで出かかっているという奴だ。まあ、喉止まりで出てくる様子は一向にないのだが。

携帯で時間を確認すると、6時だった。そう言えばミコとスイが来てから最初の方はこの時間帯に起こされたが、今は30分引き伸ばされて6時半にミコが攻撃といつなの手段を用いて俺を起こしに来る。

ガチャ、と俺の部屋のドアが開かれる。隙間から覗いているのはミコだ。

「どうしたんだ、いつもより早いじゃないか」

「何か物音がしたので……。いえ、震を張ろうかと思いまして」

「……。ただベットから落ちただけだよ。何もなかつた」

「そうですか。では、私が起きてしまったので朝食の準備をお願いします。夢落ちさん」

「へいへい……」

珍しくパジャマ姿だったミコの後を追つて、リビングに向かう。ミコが部屋のカーテンを開き、俺は朝食の準備に取り掛かる。おそらくスイは後1時間半ほど起きてこないだろう。

「やつ言えばお前、パジャマのままだぞ」

「……変態ですね」

「意味が分からんぞ！　俺はただ、その、指摘しただけであつてだな！」

「あまりじろじろ見ないでください。恥ずかしいです」

「だから、その棒読みを何とかしろよ……。可愛げもあつたもんじゃないぞ」

「むつ、やうですか。では着替えてきます」

そういうとミコはリビングから出ていった。これもまた珍しく物聞きのよいミコだった。

それより何だろうか。今日はとても大切なことがあつた気がする。行事、行事だ。……そうか、テストか。

今日は1日午後までテストづくりしだつたはずだ。それでもつて明日も1日使ってテストだ。

これは気が滅入る。朝から嫌なことを思い出してしまつた。

しかし、俺は去年とは違つて勉強会なるものをして情報交換を行つたし、ちょっとだけ勉強もした。  
歌音には勝てないだろうが、よいところまで行けるのではないかと思つ。

ちなみにしづの学校、滝原高等学校はレストランキングなるものが張り出される。成績上位者30名の名前が並べられるのだ。一年生はD組まであって大体200名程度。俺はその中間からちょっと下をうろうろしていた。各個人には大体位置するであろう順位と成績がプリントで配布される。

一年生の時点で最高順位は98／200位。本当に微妙である。

「『ミムシさん。パンが焦げていますよ』

いつの間にかそばに居たミユがオープンスターの中を指差す。そこには真っ黒とまではいかないが、こげ茶に染まった食パンが鎮座していた。

「うあ……やつちまつた。悪い、焼き直すから待つてくれ」

「いえ、私はそれで構いません。そのかわりちーすをのせておいてください」

「あ、ああ……」

罵詈雑言、が飛んでこなかつた。いつもであれば『お前も焦げるか?』といったようなニユアンスを醸し出すユニークな暴言が飛んでもくるはずなのだが。

「な、なあ。どうしたんだお前」

「どうした、とは?」

「何かいつも違う気がして、なんだが」

「今日はテストですね」

「……そうだが?」

ミユは新聞を広げ、政治経済の欄を横眼で眺めつつ

「陽助様はどのような失態を繰り広げるのか、と楽しみで」

「お前……何を言つてゐる?」

「知能の差、といつものを見せつけるにはもつてこないの行事ですの

で、朝から興奮してまして……。すいません陽助様

「なにあやまつてんの！？ え、これ、俺はどう怒ればいいわけ！

？」

それきりミコは朝食を催促するようにじつと見つめたまま何も言わなくなつた。

ぐつ、と睨み返しているが、その大きな瞳に弾かれてしまつ。なんだかこつちが恥ずかしくなつてきた。

「何故に頬を赤らめているのですか気持ちが悪い」

「う、うるせつ」

決してミコに見惚れていたわけではない。そう、断じて違う。セットしていない柔らかな髪に大きな瞳、柔らかそうな唇。素のミコは可愛いなあとか思つたりはしない。そう、しない。

「今すこく強烈な悪寒が走りました。全身に鳥肌が立つて気が狂いそうでした」

「……」

本当にここつは心が読めるんじゃないかと考えるときがある。

「おつはよー、朝浦君！ テストだよ。辛いよね苦しいよね厳しいよねー！」

ぐるぐるぐると朝から元気な歌音は教室に入るなりそんな事を叫んだ。

もちろん後ろにはミコと寝ぼけたスイを連れて。

教室の他の連中は仲間同士で集まって最終確認をしたり、問題を出し合つたりしていた。

そんな中で俺たちは何故か雑談である。

「もー、ほんとにテストってやだよね。なんか、心臓がキューつてなるよね」

「歌音は別にいつも高得点だろ」

「それはそうだけど、気分がよくないよね！」

否定はしないところが歌音らしいというかなんというか。

スイは数学の本を逆さに持つて田を白黒させてくる。雑談などしている場合ではないくらいにヤバいらしい。

「おい、スイ。それ逆さ」

「し、知ってる。何か新たな記憶方法が無いか模索してるとこりなの！」

「スイ。キャラは？」

「今はちょっとタイム！」

タイムとかあるのか。便利だな、こいつのキャラづくり。

そんなこんなで朝の猶予は無くなり、ホームルームが終わってテストが始まった。

まあ、俺も雑談してる場合じゃなかつたな。

昼休み。

答え合わせを行う連中は放つておいて、俺たちはまたも雑談に興じていた。

朝とは違つて芹川も加わつて、さらにやかましく。

スイはなんというか、ある意味完全燃焼な感じだった。

「あ、朝浦陽助はどうだったんだ？」

あえて答え合わせはせずに、出来はどうだったかと聞き合つのがこの連中だ。

「俺？……正直いつもどおりつちゃあいつも通りだが

「いつも通りがたかが知れていますね」

「だまつとれ！ んで、芹川は？」

「わ、私の（出来の）ことがきになるのか？」

「うん？」

「ふうん、まあ上々かな。今度こそ1桁台に入つてやる」「芹川は頭がよかつた。いつもは10何番台で2桁止まりだつたらしい、なので目標は1桁台らしい。」

ていうか、俺ならそこまで行けばもう充分なんだけどな。やっぱり向上心的なものがある人は何かが違うのだろう。

「芹川はすげえなー」

「そ、そだらう。そだらうー」

「わ、私は点数が1桁台かもしれないよう……」

ある一瞬の泣き声で一瞬、一体の温度が低下した。

## 1-6話・結果とともになつもの（前書き）

こんな時間に更新です。

これから忙しくなり、更新速度が大変遅くなると思います。  
三日に一本ではなく、一週間に一本またはそれ以下となつてしまつ  
可能性が大いにあります。

勝手ながら私用でこのようになつてしまつことにお詫びを申し上げ  
ます。

申し訳ござりません。 = ( - - ) =

テストが終わって一週間が経過した。ボロボロと危ない点数が見え隠れする紙切れを先生から幾つか受け取りつつ、順位の発表を今か今かと待っていた。

俺の場合は期待をして待っているのではなく、不安を募らせつつ待っているのだ。むしろ結果は出さなくてもいいと思つてゐるくらいである。

せめて半分。それくらいの順位にはいてほしいのだ。そうしないと厳しい。

大学への推薦……は無理だとしても、受け入れ先を広げるためにもやはり結果は良いものではないといけない。

「あ、朝浦君。どうしたのそんなに怖い顔をして……」

ハツ、と我に返ると目の前には椅子の背もたれに体重を預け、こちらを見ている歌音がいた。

「……考え方。あと怖い顔は余計だ。俺は別にそんな顔をしているつもりはなかつた」

「ごめん、怒つた？ でも、なんか怖かつたし……」

「えつと、それは俺の『テフオだから……つてなんか自分で言つてて嫌になつてきた』

「わわわっ。そんなことないよ！ えと、あの……なんというか。それだよ、うん」

歌音。フォローしてくれるつもりなのかは知らないが内容が伴つていらないどころか文章もおかしいぞ。

それにもこいつはなんだか余裕そうだな。

確かに歌音は勉強が出来るのだからわざわざテストの結果に怯える必要なんてなかつたな。

うーん、勉強でき奴とそうでない奴の差とは一体何なのだろうか。

考えてみる。普通に考えれば、日々の努力。

でも、俺は中学時代にその考え方をぶち壊す奴がいたのを知っている。いつも不真面目で授業中は居眠り。それでいて点数を稼ぐ奴がいたのだ。そいつは何だったのだろうか。

まあそんな事を考えている時点で俺はおかしいのかもしれないが。

「えーと、まだ怒ってる?」

俺が黙っていたからか、歌音が不安そうにこちらをチラチラと窺いつつそんな事を聞いてくる。

目が潤んでいるのは自然現象かまたはわざとやっているのか……今までの傾向からすると前者の方なのだが。なんだか俺がいじめる気分になってきた。

「や、また考え方してたんだよ。別に気にしてないからいいって」「そ、そうなの……? またこわ……難しそうな顔してたから」もう何も言つまい。

「歌音さん、朝浦様。廊下にこの間のテストの順位が張り出されていましたよ?」

いつの間にか隣に立っていたミコが言つ。

「お前、いつの間に……」

「朝浦様が大魔神の」とく恐ろしい顔をしていたころからです。…

…ああ、これではいつからか分かりませんね」

「それはアレか。俺が平常運転で恐ろしい顔をしているところとを言つているのか」

「否定はしません」

「潔すぎて怒る氣にもなれんわ!」

「只今怒つておられますか?」

「ぐつ……」

やはり駄目だ。ミコには口で勝てる氣がしない。

諦めて廊下に目をやる。確かに人だかりが出来ている、その中に。

空富杏梨、と呼ばれる少女を見た。

彼女はいつかと同じように強気な炎を瞳に宿して俺に向かって柔らかな頬笑みを見せると人だかりの中に消えた。

「待ってくれ！」

何を焦つているのか、自分自身で理解できまま俺は席を立つて廊下へと向かつていた。

人が多くてどこに居るのかが分からぬ。辺りを見回すが、それらしき姿は見当たらない。

心なしか俺の周りに小さなスペースが出来てゐるような気がする。追つて、歌音とミコが廊下へと出てきた。

「いきなりどうしたの？」

「朝浦君」

「流石朝浦様ですね。すでに朝浦空間が出来上がつていますよ」心配する言葉と皮肉を投げかける言葉。いつも対照的だと笑えてきてしまつ。

「いや、……空富つて奴が見えたから」

「空富杏梨ちゃん？ 探してたの、朝浦君？」

「そういうわけでもないが……」

何故か会わないといけないような気がした。彼女がこちらを見るときに、いつも何かを感じるのだ。

いや、何かを伝えようとしているような気がするのだ。

思い違いかもしれない。ただ、俺のことが目に入つて視線をすりせなかつただけなのかもしれない。

「じゃあさ、会いに行つてみる？ Bクラスに」

「……いや、いいわ。それより、お前載つてるんじゃないのか、これに」

俺が指差したのは順位表。成績上位者30名の名前が書きだされてゐる。

「芹川結穂……8位。流石だなあいつは……眞然の1」とく俺の名前は載つてないけど……おおお！？」

俺はそこで信じられないものを目にした。といつか、半ば疑つていた。

一応、予想はしていた。それでも驚かざるを得なかつた。

天崎美由  
7位。

「おひ、おまつ。なんじじしてんだよー?」

「別に咎められる要因は無い」と思われますが? 」「それで私のすゝめを理解しましたか?」

妙に勝ち誇ったような言動。しかし、顔はいつものように無表情だった。

歌音は自分のことのよひに喜んでいた。ハーパーの手を握んで上手にぶら下り回る。

そういう歌が27位と成績上位者の中に入っている。

なんだかここに居る俺が恥ずかしくなつてきた。周りの連中は良く

ここには仲間がないようだつた。

放課後、テストの結果を知るために職員室に成績表を取りに行くことが出来る。

各クラスの担任がそれぞれの教科の点数とその合計、学年内での順位を書かれた紙を持っており、受け取りに行かなければならぬのだ。

ちなみに、成績上位者は張り出されることで先に結果を知ることが出来るので、特に成績表は必要ないものとなってしまいます。テストの点数はすでに分かっているからだ。

失礼します

職員室に踏み込んだ瞬間。何故か視線が一斉にこちらに集まる。だがそれも束の間、先生方は視線をそらしてそれぞれの行動に移る。一体何なんだ……。

クラス担任のところまで行き、成績表を受け取る。

ちなみに担任の先生の名前は奈倉未可子といつ。

女性用スーツがに合つております、黒くて長い髪と整つた顔が特徴である。

この学校内で考えると比較的若い先生で、しつかりしていて評判もいい。朝のホームルームの時に無駄話をしてしまうのが玉にキズだが、それも愛嬌というものだつていう評価が下されている。

男子生徒の中では同級生の女子生徒を差し置いて告白してしまつた奴もいるとかいないとか。

「朝浦さんは……今回なかなかよかつたんじゃないですか？ 点数も順位も少し上がつて」

「そうですね」

確かに順位は87位と俺の中での最高順位を更新していた。これはやはり勉強会の影響だらうか。

素直にうれしくて口の端が歪んだ。

「ひいっ！？ 朝浦さん。ふ、不満だつたかな……？」

「いや、俺笑つたつもりだつたんですけど……」

「あ、はあ。そうでしたか……ほつ」

先生、どういうことですか。『ほつ』ってなんですか。

「この調子で頑張つてね！」

そんな風に応援されるが、俺は何だが微妙に複雑な気持ちだつた。

「ただいまー」

家に帰ると、玄関に靴がいつもより足りなかつた。ミユの分だつて、スイは帰つているらしくいつも通りに乱雑に脱ぎ散らかした靴がある。

それを整えてから家に上がり、リビングへ向かう。

何か、うめき声が聞こえる。

リビングへと続くドアの前で思わず立ち止まつてしまつ。これは、

スイの声だった。

なんとなく、なんとなくだが危険な感じはしない。だからこれは違う意味でスイが呻いているのだ。

理由は、まあ、分かる。

嫌でも分かる。

ふうふ、と一度深呼吸をしてから、ドアを開ける。

案の定うつ伏せでカーペット上に転がっているスイを発見した。

「うううー。うつ、うつうー」

鞄は机の上に置いてあり、その隣には成績表が。 黒崎優美…… 2  
00位

実質最下位。やはり元凶はこれだったのだ。

「お、おい。スイ…… ただいま」

「うーつ。うつうー」

「ただいまー？」

「うつ、うつ…… うつうー」

駄目だこれは。

最下位、という結果を突きつけられてスイは参つてしまつている。空気を読んでか面倒だったからか、おそらくどちらでもあるであろうミコはこれを回避したのだ。

「スイ。制服がしわになるぞ」

「……」

「俺が脱がしてもいいのか?」

「……」

「これでも反応しないのかよ……。これは相当だな……

もつ一度成績表を見直してみる。

総国	……	43点
数学	……	2点
化学	……	15点
英語	……	47点

歴史…… 38点

物理学…… 89点

あー、理数系が全滅してるな……。それにしても、……ん?  
何かおかしい。

「す、スイ。お前物理学89点も取つてるじゃねーか!」

「……そうだよ」

「すげえじゃねえかよ! 僕なんて60点いってないぞ?」

「そうなの……?」

「す」「いぞ、うん。他の教科が足を引っ張つただけだ! 頑張れば

次は大丈夫だ」

「そう、かな…… そうだよね!」

ぱああああつとスイの顔に笑顔が戻つた。目が少し腫れていたのは泣いていたのだろうか。

ふう、と元気になつたスイを横目で眺めながら溜息をつく。そしてタイミングを図つたかのよつこニコが帰宅したのでありつ、玄関のドアが開く音と、帰宅を告げる声が聞こえた。

「只今帰りました。…… わや、スイが」

「さつきまで死体だつたよ」

「ふむ、良かつたですね、スイ」

「うんうん! 陽助さんに褒められたつ!」

子供のように無邪気な笑顔を振りまき、喜ぶスイ。ほんつとうに女の子つて感じだな……。

「悪魔が褒められて喜んでどうするんだ」

「はつ…… そうだ。アタシは悪魔だ、だからテストの点数が悪かつたらいで何だつていうんだ! むしろ悪魔らしいじゃん! 不良みたいで!」

こいつの中の悪魔像はどうなつてているのだろうか。ただ、今は喜んでいるので放つておく」とこした。

「200位……フツ」

だから、ミコの黒い笑いは聞かなかつたことにする。

## 17話・夏の訪問（前書き）

「ひつじか今日は更新する」とが出来ました；  
後々はどうなるか分かりませんが、出来るだけ頑張りますのでよろ  
しくお願いしますm(ーー)m

夏、と聞いて思い浮かべるものは何かと問われれば至極真っ当な答えとして『海』や『夏休み』が挙げられるだろう。他にも候補はあるとは思われるのだが、今はこれくらいにしておこう。

そう、決まって夏が来てしまったのだ。日差しの強い夏、うだうだと暑い夏。

俺は夏という季節があまり好きではなかった。友達と海へ行くわけでもなく、ダラダラと大型連休を消化して無駄に課題だけが枷となるこの流れがたまらなく嫌いだった。

100%自分が悪いことは分かっている。友達のいない一人ぼっちな奴が僻んでいるだけなのだ。

とりあえず、夏は嫌いだった。他にも理由があつたと思つただが、遠い昔のことで忘れてしまった。

暑いから、という微妙な理由だったかもしれない。

そう、今も現在進行形で日差しが突き刺さっている。俺の席は窓側にあるので必然的に日光が当たるのは仕方がないことなのだが、なにせイライラする。

「おうひ…………どうした、朝浦」

ぎょっとした目で数学教師の浦辺<sup>はらべ</sup>がこちらを見ていた。そういう俺の顔がショックを与えたのか、手に持っていたチヨークが半分に折れて床へ。粉々になる。

「いや、ちょっと日差しが強くて顔をしかめていただけです。大丈夫です」

「そ、そうか……」

夏休み手前だというのに授業はみっちりと詰まっている。それも今日までの辛抱だった。

しかし、夏休みは憎い。俺は些細なことが積み重なつてイライラしていたのかもしれない。

ミコがこちらに粘つくなつた視線を送つてくることだつたり、スイガこの日差しの中でも構わず眠りこけていることだつたり、色々あるのかかもしれない。

ただ、暑いことにキレていたのかもしれないが。

1学期分の授業がすべて終了し、多くの生徒が待ちに待つた夏休みが幕を開ける。

といつても、最後にはホームルームがあり、通知表と呼ばれる一部の生徒には魔物にもなり得るもののが待つてゐるのだが。

「朝浦君！ ミコちゃん！ スイちゃん！ 夏休みだよ、待つてた連休だよー！」

両手を万歳させながら歌音は楽しそうにへんへんと回つながら俺達の前に現れた。

何か大きな出来事があると喜ぶ、またはテンションの向上が著しいのが歌音である。

どこからそんな元気が湧いてくるのか不思議だつたが、俺は額から汗を流しつつ適当に答えた。

「ああ、そだな」

「あーつ、なんでそんなに適当な返事かなあ。 折角の休みなんだ

からエンジョイしようよエンジョイ」

エンジョイできる相手がいないからどうともいなえないのが現状だつた。

それよりも問題があることにお気づきだらうか。連休と言えば友達の家にお泊りなどと言つた俺には考えられないイベントが存在するらしいのだが……。

俺は横眼でミコを見てみる。なんだか悪いことを考えていそうな顔をしているような気がした。いつもの無表情なので詳しくは分からぬが、こいつには前科があつた。

スイを見てみる。汗だくになりながら机に突っ伏して寝ている。「これは……気分悪くは無いのだろうか。

幸せそうに涎を垂らして寝ていることは放つておこう。しかし、寝起きが一番危険だということは忘れないでおく。ここにも前科があった。

なんといつことだ、近くに隠蔽工作の出来る仲間が一人もいないではないか……。

「それよつさ、私とミコちゃんとスイちゃんと結穂ちゃんでお泊まり会しようよー」

来た。

「いいですね。しかし、四人も泊められるようなお宅があるのでしようか? ご両親に迷惑だつたりしませんか?」

「んー、確かに私の家は狭いから無理っぽいかな……。結穂ちゃんちはたぶん駄目だろ?」

「…………ん。むにゃ

俺は変な汗をかきながら平静を保とうとしていた。

ところが、どうして俺が心臓をバクバクさせているのだろうか。よく考えれば、同棲がバレてダメージを受けるのがどうして俺だけだなんて考えていたのだろう。ミコだってスイだって困りはしないんだろうなあ。

ズーン、とわけもわからず下がつてテンションの行く末を見る前に追撃がやってきていた。

「ミコちゃんちはどうかな?」

「むう、私の家は少々狭くてですね……あと家の主がつるさいのでも無理かもしれませんね」

「そうかー。ん、どうしたの朝浦君? これは女の子の会だから男子禁制だよ?」

無意識のうちに歌音たちをガン見していたよつだった。

「べ、別に俺はとくに何も言つてないだろ」

「変態ですね」

「止めるー。そんな一言で止づけられるとなんかリアルで苦しいー。お泊まり会は無理かなー……。仕方ないね、だから海に行きましょー!」

シユババ! と歌音が高速の勢いで手を挙手する。目をキラキラと輝かせながらもぴょこぴょこと髪を揺らしている。

「海なら朝浦君も参加できるしね!」

「そうですね……それなら安心ですしね。……しね? しね? しね? 」

「そのエゴー的なものは無視していいのか? いいんだよな、無視するからな」

そんな会話をしていると、奈倉先生が手を打ちながら教室に入ってきた。

「はいはい、授業は終わりましたがまだホームルームが残つてますからねー! 席について下さいね」

その先生の声によつてガタガタと椅子を鳴らす音が聞こえ、生徒が着席を始める。

俺は先生の抱えている通知表を気にしながら席に戻つた。

「それじゃー、約束したからね、ちやんと守つてねー!」

歌音が元気に跳ねまわりながら言つ。

下校中に夏休みの色々な予定を練り、話し合つていたのだ。俺は一人その中でどうにか最悪は避けようと考えを張り巡らせていた。簡単に言つと、ボロを出さないようにするための対策だ。

芹川には歌音がメールで伝えておくといつこと、今こにはいない。

委員会やら何やらがあるらしい。夏休み間の花壇整備がどうとかそんな話をしているらしかった。

大変だな、と人ごとのように思いながらも学校で待つことさせずにこうして帰路についているのだ。

我ながら結構酷いとは思つたのだが、芹川はどうやら俺達と帰り道が逆らしかつた。

では何故この間不良三人に襲われたときこいつち方面に居たのか。まあ、あそこらへんはスーパーやらドラッグストアやらがあるから買い物に来ていたのだとしたら不思議ではないのだが。

「それにしても……そんなに予定立てて大丈夫か。課題は終わらせられるのか？」

何やら歌音の手に持つスケジュール帳のようなものには、たくさん予定が書き込まれていた。

「だいじょーぶつ！ 夏休みの最終日空いてるでしょ？ ほら」

見せてくれたスケジュール帳は確かに8／31の欄は真っ白だった。何故か自慢げに胸を張り、

「余裕だよ！ この一日の追いこみレベルは半端ないからね、学生ならではの力の見せどころだよ！」

「誰に見せつけるんだよそんなもん……」

俺のげんなりした突つ込みをモノともせずに歌音はさうじて上機嫌になる。

只今絶賛輝き中の太陽のように笑顔を振りまく歌音を見ると、なんだか微笑ましく思えてくる。

復活したスイも類を紅潮させながら興奮を抑えられきれない様子だつた。

なんだかんだで俺も参加することとなつた歌音Wi-Fi仲間たちのイベントのおかげで、少しだけ。

ほんの少しだけ夏のひざつたらしさを和らげてくれるような気がしていだ。

「ん？ どうしたんだミコ、じつと見て」

ミコが俺の顔を凝視していたので、少し困惑した。

なんだろう。また何か毒を吐き散らすのだろうか。

「いえ……今年は一人ぼっちじゃなくてよかつたですね」

「やっぱり毒を吐きやがる……ん？ 今年、は？」

「ああ、失礼。今年も、でしたか？」

「どうしてお前はこうも正確に弱点を抉つてくるんだ！」

俺の素朴な疑問は誰も答えてくれず、日常に埋もれていくばかりだつた。

「ただいま」

「只今帰りました」

「ただいまぜつ！」

三者三様の帰宅の挨拶を告げる。玄関で靴を並べてからリビングへと向かう。

スイは早速冷蔵庫から麦茶を取り出し、コップに注いでぐびぐびと飲みほしていた。

ミコは先に部屋に戻つていった。おそらく、制服を着替えてくるのだろう。

こういうところに天使と悪魔の違いが出るのだろうか、と考えたところでここからは普通の天使と悪魔じゃないということに思い至る。毒舌天使とビビり悪魔、だからなあ……。

ふうっと自分も一息入れようと、椅子に腰かけたところでケータイが鳴つた。

着信相手を確認すると、『母さん』と表示されていた。

特に何も考へることなく、普通に、いつも通りに電話に出ていた。

「もしもし？」

『もしもし、陽助？ 大丈夫？』

『こきなりなんだよ母さん……。特に変わったことはないよ』

……なければよかつたんだがな。

『いやあ、一人暮らしつていろいろ大変じゃない？ もう一年経つ

けどやつぱり心配なのよ』

「心配はいらないよ。いつおせしつかりやつてる」

『やう? 特に問題は無いわけね。よかつた、じゃあ近い「ひこそ

つち行くね』

「ああ。……ああ! ?」

『え、どうかしたの陽助? 大丈夫?』

「大丈夫……ではなによつた氣もするけど。……なんで、来るの?』

『なんだ、つて……去年行つた時に夏は必ず行くからねつて行つた

じやない。父さんなんてもう準備始めちゃつてるわよ?』

「はええよ! ていうか、いつ来るんだよ! つていうか、来るな

よ!』

『父さんその日会社休んじやつたのよねえ。だから行くしかないの

よ、休みを無駄に出来ないでしょ?』

『俺の質問聞こえてる! ? あからさまに無視してない?』

『じゃあ、そういうことだから。陽助、またね』

『またねじやねえ! おこ、ちよつ! .』

『ツーツーツー……』

あまりのショックに立ちあがつてしまつていて、  
これは、大変なことになつた。



「うわ、鳴円常世です。

1-1話になってしまったね、まだまだこれからが続きます。

今日のところはとりあえず更新と……。

両親がこの部屋に来るという大事態。いや、いつもならば問題は全くないのだが、今はタイミングがタイミングだらう。ちらり、と台所の方を見る。そこには背の小さな長い黒髪の少女。スイがいる。

「どうしたのですか。顔面凶悪……じゃなくて顔面蒼白ですよ？」リビングのドアを開けて入って来るなり毒舌で対応してくるのは、ちょっと背が平均女性より高めの茶がかつた髪の色を肩まで伸ばしている少女。ミコだ。

そつ、この状況こそが最悪なのだ。駄目なのだ。

一応この状況は一般的な言葉で言つと、同居ということになるのだ。そんなものを両親に見られようものならすぐにこのマンションの契約は解除、俺は実家に戻され学校は転校となり、この天使と悪魔は家なき子となってしまう。

問題が山積み過ぎた。例えばこの一人をその口だけは隠し通せたとする。

ただ、現在ミコとスイの部屋であるかつて空き部屋だった部屋はどうする？

見つかる 制服がある（女子用） 社会的に死亡

危険すぎる……。どうしようもねえ……。

「むう、シカトですか？」

隠すことが無理だとすると、いっそ説明してしまうか。

神から天使と悪魔を一匹ずつ預かってるんだー、はつはー。そんな風に言つてみようか。

思考一秒後、この案は崩れる。それはそうだ、むしろそんなもので通じてほしくない。

頭の出来を心配されるレベルの発現は無理。大体、神とか誰が信じるんだよ。

では、普通に言つてみるか。

女の子一人と同棲してゐんだぜー、はつはー。

親父に殴られるビジョンを見た。これはショミレーションをしても無駄だ。

「どうしようもない……」

つい、声に出してしまつていて。

キランとミコの瞳が光り、何か面白いことを発見した時のように無表情かつじりじりと近づいてくる。

「お困りのようですが……何か（面白いこと）ありましたか？」

「その言葉のニュアンスをもう少し説明したいところだがそれどうじやないな……。実は」

俺は先ほどの電話の内容を伝えた。

するとミコはうんうんと頷いて、俺に椅子に座るよう促した。俺の

対面に座り、スイもバタバタと走ってきてミコの隣に座つた。

「私はきちんと挨拶をしたいですね。一応お世話になつてるので」

「でもさ、どうこう挨拶になるわけ？」

「食費代はそちらから頂いているわけですし、感謝はしなくてはいけませんからね」

「問題逸らそうとしていないか？気のせいいか？」

「わ、アタシもちゃんとといわねえとな！ こういう性格ですって！」

「お前は黙つてくれ」

いわゆる家族会議な席配置になり、いつものように会議になるかと思ひきや自分の願望を伝えてきやがつた。

考える気はあるのか？ 最悪を回避しようと思つてゐるのか？

「いや、だからな？ バレるのはまずいんだって」

「まるで浮氣しているみたいですね」

「余計なことは言わなくていい！」

「ですが、この間もそうでしたが、隠し通すということは難しいものだと私は思っています。それに陽助様は甘いのです。本気で隠し

通す気があるのならば、家に入れなければいい。徹底的に行動しようとしないから駄目なのです。そういう性格であるということは知っていますが、それでは駄目なのです。結果、陽助様は駄目人間だということですね

「長いこと語つといて帰結はそれかよ！？ お前は本当に俺を馬鹿にするのが好きだな！」

「いえ、そんな事は無いのですが……」

「嘘付けや！ 最初の方の言い分はもつともだが。どうすればいいか」

「はいはーー！ 提案ー！」

スイが手をビイン！ と伸ばして拳手している。何故だかスイの姿に小学生を見た。

…… 気のせいだ。

「何だ、いい案あつたか？」

「あ、あのね……。夫婦、つてことすればいいんだよ！」

「却下」

「えううー？ ちょっとぐらりとメントくれたつていいじゃん！」

「馬鹿か！ 掘り下げる必要性が全く感じられんわ！」

「そもそも面白くない提案をする時点で浅はかさが知れますね」

「ミコちゃんまで酷い！？」

「あー！ 分かった分かった、これでどうだ。その日はまたまあ前らが俺の家に遊びに来ていた、そこでミコは間接的に礼でも何でも言えぱいい。お前らの部屋は塞いでおく、それでいいな」

「アタシの性格発表は？」

スイが立ちあがつたがシカトしておぐ。ミコは形の良い整つた顎に手を当て、考える素振りを見せる。

「いいんじやないでしょつか」

「うし、とりあえず余計なことは言わないという方針で頼むぞ……」

小さな不安を拭いきれないまま、後に迫る出来事に対しての方針が定まった。

何故だかスイはふくれた顔をして怒っていた。

そつ言えば母さんたちはいつ来るのだろうか……？

次の日の朝。ねつとりとした暑さの中での最悪の目覚めだった。

時計を確認すると、時刻は9時を指していた。かなりの寝坊だった。遅刻どころの騒ぎじゃねえ！ とベットから跳ね起きたが、よく考えてみると夏休みだった。

ミコがキレのあるボディーブローで起こしに来なかつたことに変な風に納得がいった。

頭を搔きながらビビングに行くと、そこには異質な光景が広がつていた。

俺の母親と、父親と、ミコと、スイが談笑していた。

「どういう状況だコラマー？」

混乱しながらその輪の中に入つていぐ。なんだ、なんだこの状況は！？

何故こんなに早くに母さんと親父が来てんだよ。というか、なんで家中にいんだよ。

分からぬいこがたくさんあり過ぎたが、何よりも一番不思議なのがミコとスイと普通に、じく普通に話をしていることである。あるのはどこかの一家のような温かな団欒。

どう考へつたつておかしい。だつて息子の家に女の子一人いるのこ突つ込みなして動搖なしでナチュラルに何故会話できるの？

俺がそつちの状況に出くわしたらまず意味もなく叫ぶわ！

「朝からつむをこむ、陽助。……おつ、また背が伸びたか？」

「伸びてねえよー。来るの早すぎるだろ、つかなんでこいつひじつ

いて突つ込まないんだよ！」

「こちらへ、陽助。お父さんに当たらぬの、反抗期？」

「いや、突つ込むところへ違つ！」

「陽助様、朝からうるさいですわよ？」

「お前はすでに何キヤラだよ！？」

朝から俺の体力と喉を疲労させていった。

詳しく説明すると、朝……7時ぐらいだそうだ。俺の両親が訪ねてきたのは。

その時すでに目を覚ましていたミコは何のためらいもなく、俺を起こしに来るでもなく、両親を家に迎えた。最初の方こそ驚いていたらしいが、話をしていくうちにどうでもよくなつたらしい。どうでもよくなさすぎるのだが、うちの親は頭がやられているのではないかと思われるくらいのレベルだった。まさかこちらが心配する羽目になるとは思つていなかつた。

ただ、ミコはちゃんとやつてくれたようで少々強引だが、たまたま俺の家に遊びに来ていた体<sup>てい</sup>で話を進めてくれたらしい。スイは今もなお性格と奮闘中である。

で、リビングにて談笑中と今に至るわけである。

「それにしてもミコちゃんもスイちゃんも可愛いわね。娘にしたい気分だわ。ほら、うちの息子なんて犯罪者みたいな目つきして……全く誰に似たのかしらね」

色々突つ込みたいところであるが、ここにミコとスイで通してやがる……。

「いえ、陽助様は素晴らしい方ですよ。お友達になれて本当に良かったです」

「あらあ～、本当にミコちゃんはいい子ね～」

「ああ、可愛いもんだ。つちの息子は万年反抗期のような顔をしているのにな」

突つ込み所があり過ぎる…………。もう駄目だ。俺にはこの場の収集

を付けることは不可能だ……。

疲れた顔のまま楽しそうに話をする四人を見ていると、急に母さんがこっちを振り向いた。

そのまま寄ってきて声を潜めて言ひ。

「ちょっと陽助、なんのあの子たち超可愛い。どっちが本命なの？」

「は？」

「だから、どっちが好きなのよ。両方なんて駄目よ？」

「母上、何を言っているのかよくわかりませぬ」

「んもう、分かってるくせに。ちゃんと選びなさいよ？」

「や、だからさ。そうゆうんじゃないんだけど……」

母さんは最早俺の話を聞いていなかつた。といふか、勝手に妄想が膨れ上がつていた。

続いて親父が寄つてくる。またも小声で。

「こら陽助、よくやつたぞ」

「意味分からん、親指を立てるな」

「あんなに可愛い子一人も……大事にしろよ」

「あ、親父は選べとか言わないんだ……」

「守つてやるんだぞ」

「え……」

最後の親父の一言が、妙に真剣味を帯びついて俺は啞然としてしまつていた。

鋭い親父の眼光と、念の一押し。あんな顔をした親父を俺は久しぶりに見たかもしない。

いつ見たのかは正確に覚えていないが、一回田ではあつたはずだった。

「親父……？」

親父はすでに団欒の中に戻つていて、いつものように馬鹿話を始めた。

「さあて、じゃあお母さんがちょっと早いけどお風呂はん作つちや

ていた。

「さあて、じゃあお母さんがちょっと早いけどお風呂はん作つちや

おうかな！」

「わー！ アタシ超楽しみだぜ！」

「そうですね。母の味、というものには興味がありますね」

「張り切っちゃうからねー？ ほら、陽助も手伝いなさいー。」

何故かこちらも妙に張り切っている母さんに呼ばれ、昼飯を作ることとなつた。

「じゃ、そろそろ帰るかね」

親父がそう言いだしたのは夕方4時ごろのことだった。それまでは近況報告をしたり、談笑し合つたりをしていたがそろそろネタも尽き親父は明日は仕事があるのでといつことで帰ることとなつた。

両親を駅まで見送ろうといつことで駅まで行き、改札で別れを告げる。

「元気でやるのよ？ 風邪引かないようにな」

「陽助、頑張るんだぞ。勉強もしつかりな」

二人からそれぞれ言葉をもらい、なんだか照れくさくなる。そつけない返事を返していく。

「分かつてるよ」

俺の後ろにはミコとスイがいる。両親は一人にも向けて、陽助をよろしく頼むね、といった。

なんの真似？ と聞き返そうとも思つたが、なんだか母さんも親父もよくわからない顔をしていた。

そう、子供が三人になつたとかそういう顔かもしれない。別れの惜しさも三倍ということだろうか。

「お母様もお元気で、またお会いしましょう」

「元気でな！ またお昼ごはん作つてね！」

ミコとスイも返事を返し、母さんと親父は改札の向こうへと消えて

いつた。

なんだか喪失感のようなものが急にこみ上げてきた。  
普段ならそんなこともなかつた。少なくとも一年前はそうだつた。  
でも、なんだか一人とも良くわからない顔をするから、こっちまで  
感化されてしまったのかもしぬなかつた。

「家族つて、いいものですね」

ミコが唐突にそんなことを言いだした。

「私には家族というものがありませんので、何が普通なのか分かり  
ませんが……少なくと陽助様の家族はとても温かなものだつたと思  
えるのです」

ミコが両親の消えていった改札を遠く眺めながら、ずっと眺めながら言葉を漏らしていた。

やけに傷心的なミコに、愛おしさすら湧いてくるような気分だつた。  
俺が知らないだけで、天使だつて複雑なのかもしぬない。寂しさ、  
というものは決して一人では埋められないものだから。

「どうしたんですか、じつと見て。早く帰りましょ」

「あ、ああ……」

毒舌が発動しないことに不信感を覚える俺が、なんだか恥ずかしか  
つた。

ミコは、大切なことを言つていたのだと、思つ。

それは、自分自身に関することだつた。プライバシーという言葉で  
守つていたミコの欠片だつた。

またひとつ、何かが変わつたのだ。



## 19話・落ちてきた水滴（前書き）

前の投稿から10日経ってしまいました。申し訳ございません。  
まだ忙しが解消されそうもないのに、お待ちいただけた嬉しい  
です。

予想では、また10日後辺りに投稿できそうです。

それでは次話の前書きでまたお会いしましょう。

夏休み中の学校というものはなんだか新鮮で、普段には見られない一面が垣間見える。

例えば、朝から汗水流して部活に励むグラウンド上の生徒たち。同年代とは思えないような体格をした野球部や陸上部が走りまわっている。

こんなに暑い中で頑張っている姿を見ていると、自分とはまったく違う世界がその人たちには見えているのではないかと錯覚するレベルだった。おそらくその人たちが見ている、いや住んでいる世界は俺の世界よりも少しランクが高いのだろう。それはその人たち自身のレベルが高いからで、悲観することは全くないと俺は考えている。しかし、やっぱり心のどこかでは自分はどうなのだろうと考えてしまう。

同年代が頑張っている姿を見るのをいつの間にか嫌になっていた、そんなこともあるかも知れない。

いわゆる現実逃避と呼ばれるような行動なのだが。

「陽助様……いえ、墮落人間ヨースケさん。何をボーッとしているのですか。さっさと仕事を済ませましょう」

後ろから少しだるさうにミコの声が聞こえてきた。

「何だその命名は……。漫画の題名か何かか」

「どうでもいいです。早く帰りたいのでさっさと」

多少の苛立ちを漂わせるミコの発現に、俺はげんなりしていた。

第一、俺はついて来いとは言つていない。勝手についてきて文句を垂れているのだ。

確かに外がこんなに暑いとは思わなかつた。朝はスイが限界を迎えてクーラーを解禁していたので家の中ではそれでもなかつたのだが。「確か校舎裏でしたね。鍵は貰つてきますか?」

「ああ、さつき職員室行つてきたよ。クーラーガンガンに効いてた

ぞ……」

「教室にはクーラーが設置していないところに酷いですね」

「まあ、こんなもんだろ」

額から流れ落ちる汗を拭いつつ、校舎裏へと向かう。

そう、何故俺は休みの日なのに学校に来ているのか。それは今朝かかつてきた電話のせいであった。  
いや、せいというのは違つかもしれない。俺が引き受けてしまったのだ。

「花壇の水やり?」

朝、寝ぼけたままの頭で鳴っていた携帯をとると、聞こえてきたのはそんな言葉だった。

どこか焦っているような、落ち着きのない様子で電話の向こうがわの何者かはそう言つたのだ。

耳から携帯を離して、ディスプレイに表示されている名前を確認すると、そこには芹川結穂と表示されていた。

再び携帯を耳を当て、事情を詳しく説明してもらひ。

「花壇の水やりが……何だつて?」

『そ、そうなのよ。今日の当番が私だったんだけど、急に外せない予定が入っちゃって。出来れば代わりにやってもらいたいっていうか……。そういうお願いの電話なんだけど……』

『そ、うか……っていうか、なんで俺の携帯の番号知つてんの?』

『ちよちょ、ちよつと! この間交換したでしょ! ? 覚えてないほどどうでもいいことだったの……?』

『え、何? なんていきなり萎んでんの?』

『なんでもない! それより、引き受けてくれるの? くれないの! ?』

「おおう……そんなんにEばなくてもいいだろ……。分かったよ、やつてやる」

しぶしぶ了解すると、電話の向こう側から小さなため息が聞こえてきた。

「おお、どうして俺に頼むのだらうか。……考えてみると、歌音は予定ギチギチだつたし同じ委員会の奴らには頼みにくいんだろうと予想できた。芹川の性格だ、自分で引き受けなおいて同じ仲間にはみつともないところを見せたくはなかつたのだらう。

とは言え、休み中に学校か……。

『あ、ありがとね。じゃ、また今度ね』

「ああ、じゃあな」

芹川からは水やりに対する適当な説明を受け、それから世間話をすることもなく電話を切つた。

ベットから起き上がると、俺の部屋の入口から視線を感じた。

「…………」

「ミコだつた。」こつはまた……。

「何見てんだよ」

「いえ、別に」

「…………？」

よくわからぬ返答だつた。毒を吐くこともなく、この場から去ることもなく。

「どこかに行かれるのですか？」

「ん？ ああ、ちょっと学校にな」

「では、私もお付き合いします」

「え……？ 何を企んでいるんだ……？」

「別に何も企んでいないですよ？ そう、何も企んでおりませんよ」

「なんで一回言つた？ なんで一回言つたんだよ！？」

もやもやする変な気持ちを抱きつつ、俺はミコを学校へと連れて行くことにした。

スイはクーラーの効いたリビングで下着姿で寝ていたので、毛布を

5枚重ねて押しつぶしておいた。

そして今に至るのであった。

校舎裏には、いくつか花壇が設けられていた。花壇のそばにはビルハウスもあり、なかなか植物を育てるには設備が整っているのではないかと思えた。とはいっても、植物に詳しいわけでもないのと本当のところはどうなのがはわからないが。

花壇にはたくさんのが向日葵が太陽に向かって咲いていた。

よくもまあ、こんなにも容赦なく照りつけてくる太陽に向かって背を伸ばせるもんだなあと感心さえ覚える。

人間にとつては暑すぎて大変だというのに。……天使と悪魔もうかもしれない。

「すごいですね、こんなにも向日葵が……。やはり生命を感じさせるものは美しいです」

ミコは向日葵に歩み寄り、そっと葉に触れる。その光景が俺にはどうも異質に見えて仕方が無かつた。

ミコのことをあまり知らない奴が見れば、花の世話をする美少女のようになれるのかもしれないが、俺の目には慈しんでいしミコの姿はどうもおかしなものに見えた。

俺が悪いのではない。ミコの田代の行動のせいでそう見えるのだ。だからあれほど普通にしていれば可憐のある女の子はいないと思う。どうやら神は性格と容姿のどちらもを格別にすることはしなかつたようだ。

『神』という度にあの腹の立つ爺さんが頭の中に浮かぶのをどうにかしてほしかった。

「…………どうしたのですか？ 何か私でも共感できるような悩みを抱えているのですが？」

俺は頭を振つてその事柄を追いだすようにして、ミコに返事を出す。

想像通りだ。それより、蛇口は……あつた。

あれ？ 肝心のホ

ースが無いじゃないか」

花壇の水やりの方法は芹川から教わった通りにすればよい。ただ、道具をそろえないといけないのだが、ホースが見当たらなかつた。芹川が言うには、ホースは蛇口の近くに束ねてあるとのことだつたが……。

「確かにホースがありませんね。もしかしたら事務室の方に片付けられてしまつたのではないでしょうか」

「その可能性もあるな……。とりあえずビニールハウスの中の植物の世話をからしようか、先に鍵借りてきちまつたからな」

「それがいいかもせんね」

ビニールハウスには簡単な鍵が取り付けられていた。ドアの部分とビニールハウスの骨組みであるパイプを鍵で留められていたのだ。これが必要なのかどうかは置いておいて、さっそくビニールハウスの中に入る。

中は若干しつとりとしており、湿度は異様に高いであることが体感できた。

辺りを見回すと、さまざまな種類の植物が鉢に植えられていた。三段の棚に所狭しと並べられていて、天井にはスプリングラーのようなものも設置されていた。

「なんか……結構すごいんじゃないかな？ 設備とか」

「そうですね。私、校舎裏にこんな場所があるなんて知りませんでした」

奥の方まで行くと、簡易スプリングラーの取扱いについての注意書きがスイッチの横に張られていた。

それを確認し、スイッチを入れる。サアアアアアツという音とともに細い雨が降り注ぐ。

簡易スプリングラーは的確に一つ一つの鉢の上で作動している。

間違つても俺達に降り注ぐことは無かつた。

ガウン、と何かが振動するような音がして、雨は止んだ。

先ほどとは見違えるほど植物たちが変わつていた。

雨を受けて元気になつたのもあるだろうが、雨の雫が葉や花に付着してそれが太陽の光を反射して煌めいているのだ。

まるで芸術の世界のようだつた。生きた芸術、洒落た言葉を使つとそう表現できると思つ。

少しの間、俺とミコは言葉を失つていた。

「……本当に、美しいですね」

ミコは表情にこそ出さないが、うつとりとした様子でそう言つた。

俺は言葉にしなかつたが、心中でそつと同意しておいた。

「じゃ、次は花壇の水撒きかな。俺はホースとつてくるから待つててくれ」

ミコは返事をせず、花の様子を熱心に観察していた。俺はそれを見て小さく笑つた。

ホースを取りに事務室まで行くには、再びグラウンドの横を通りなければならない。

校舎をぐるりと回つて、グラウンドの前まで来ると何か異変を感じた。

いつの間にかグラウンドで練習していた野球部、陸上部の姿が見えなくなつていた。

それだけではない、グラウンドの中心が歪んでいる。

夏の暑さで俺がおかしくなつたわけでもなく、夏特有の遠くが摇れて見えるあの現象でもない。

捩じれて歪んでいるのだ。

「どういうことだ、これは……」

次に瞬きをした時、俺の見ていた世界は姿を変えた。

空は毒々しい紫色に染まり、学校は廃虚のような造形に姿を変え、葉で生い茂つていたはずの桜の木は枯れ果てていた。

もう一つ。大きな変化があつた。

この学校以外がここには存在していなかつた。

向こうに見えるはずのビルの群れが見えない。山が存在していない。外界は全て黒で塗りつぶされて、闇に？まれていた。

俺はよく分からぬ閉鎖空間のような場所に飛ばされていたのかもしけなかつた。

だとすると、これは悪魔の仕業なのか。この間スイを襲つたような奴らなのか。

俺は拳を握りしめて走つた。

急いで校舎裏に戻る。しかしそこにはミコの姿は見当たらなかつた。なんとなくは感じていたが、俺だけがここに飛ばされているのだ。もし、悪魔が作った閉鎖空間なのだとしたら、対抗する術を持たない俺はすぐに捕まつてしまつだらう。

それ以前に殺されるのかもしれない。

暗いイメージを振り払い、自分を叱咤する。

安全を確保するために周りの様子が見える広いところへ向かうことにする。それはすなわち先ほどのグラウンドへ向かうということだ。もしかしたら元の世界に戻れる何かがあるかもしれない。

そう信じて、また走る。

再びグラウンドに戻ると、やはり中心に何かがあつた。

青白く光る何かはここからでは何なのかを見分けることはできない。近づいて確認しようと、一步を踏み出しへグラウンドの敷地内に入つた瞬間、その青白く光る何かが肥大化し、幾何学的な魔方陣のようなものを生み出した。

それはグラウンド全体を覆い尽くし、俺も巻き込まれる。

爆発に似た衝撃に吹き飛ばされ、俺は地面を転がつてグラウンドから追い出される。腕が擦り剥けて血が滲んできたが、それよりも俺の目を奪うものがグラウンドには降り立つていた。

そう、俺の目を奪うような者だ。

彼女は所々白と黒が混ざった両翼を、腐敗した左腕と禍々しい右腕を持つていた。

無感情なその眼が、俺を捉える。

想像の上での存在。俺の視線を捉えて離さなかつた彼女はまるで、

そう、まるで。

墮天した天使のようだった

## 20話・肉塊と共に紡がれた証（前書き）

予定より一日遅れの更新となりました。申し訳ござりません。  
これからテスト期間となるので、いつも通りの「」の10日間に一回程  
度の更新となると思います。

次回の更新は12月に入つてからになると思します。

みなさん、応援をよろしくお願いします。

それが作者の頑張りとなります・（スミマセン）

## 20話・肉塊と共に紡がれた証

墮天使、俺は確かにそう表現した。

まるで天使と悪魔が混ざったかのような存在。明確に墮天使という位置づけがどんなものかは分からぬが明らかに天から、神から、見放された者だと理解が出来た。

いや、感覚的に感じ取られたのだ。

「 ？」

墮天使が何事かを言う。しかし、俺には全く聞き取れなかつた。距離のせいではない、声量のせいでもない。それを言語として聞き取れなかつたのだ。

まるでテープを高速再生させたときのよつよつキュルキュルという音に加え、多少の雜音<sup>ノイズ</sup>。

外国語が聞き取れないのとはまた違うような感覚。人間の中には存在しない音感。人が脳で認知することの敵わない音。その墮天使が放つた音を、人間の持てる音感では言語で当てはめることもできないのだ。

異質。この世界であつてはいけない現象である。

人が理解することが出来ない存在が近くにあるということ。これ以上の恐怖はない。

俺は墮天使から目をそらせないまま固まつてしまつていた。もしかしたら死を覚悟していたのかもしない。頭のどこかで何をしようと無駄という警報が鳴つている。

『 、 』

何かを俺に、伝えようとしている？

それが理解できない、感情も理解できない喜怒哀楽全てが混じつているような表情。

ただ、殺氣だけは先ほどからヒシヒシと感じられる。だからこそ動けない。立つことがままならない。

11

バヂバヂバヂイツ！ と墮天使の右腕が赤黒く染まり閃光を迸らせ  
る。

俺が両手を広げても抱えきれないような大きな球体は鼓動を始め、  
見る見る、そこにはその力は球体状になり、天使をそれを頭上に掲げる  
黒い閃光を纏わせる。

来ると思ふ前に墜天使の手からはその球体が放出されおり俺に向かつて恐ろしいスピードで向かつてくる。

命を喰らいに向かってくる。

ズガアアアン！ と視界が砂煙で覆われた。

なが  
つ  
た

一陣の風が吹き、視界が良好になつた。ただ、黒が視界の一点に固定される。

「な、  
に、  
が、  
…  
？」

自分の身体を見渡す。何事もない。

「だ……」  
の学校の女生徒の制服が目に入った。

「何してゐるの、早く逃げるわよ」

座りこんだ俺の手を強引に掴み、彼女は羽を広げ飛翔する。

飛び立つ。

「うわわわっ！……」

あ、どうせ間に学校の屋上へと連れてこられた足に力が入らないのだ。

俺を助けてくれたのであろう彼女の顔を見上げる。

強気な炎を灯す瞳に少しウエーブのかかった肩までの髪、俺が会おうにも会えなかつた彼女。

俺の手を引いていたのは空富杏梨だった。

「そらみや、あんり……？」

「つ……。そうね、私は空富杏梨よ。た、……あなた、どうして

こんなところにいるの？」

「どうしてつて……知らない、気がついたらここに居て、それであいつが襲ってきて」

そうだ、あの墮天使はどうなった。すぐここにまで追いついてくることぐらい簡単だろう。

すぐにも俺を殺しにくるのではないか。

「それは大丈夫、彼女はあのグラウンドから出ることが出来ないから」

俺の心の中を読んだように彼女は俺に返事をする。

俺はそのことに呆気にとられ、口を開いたままになってしまってた。

「みつともない顔。…………早くここから出ましょ」

彼女はそういうと、手を空に向かって掲げ光りの玉を次々と放出して行く。

シャボン玉のようにふわふわと浮かんでは消え、この赤黒い空の色を淡く染めていく。

ガキン！ と何かが外れるような音が響くと、空から一筋の光が差し込んできた。

それは数時間見ていなかつた本当の世界の太陽の光だつた。

「…………」

彼女は無言で俺に手を差し伸べてくれる。掴まれという合図なのだろう。俺はその手をしっかりと握った。

すると向こうもしっかりと握り返してきた。

柔らかな手だつた。普通の女の子の手、しかし俺は分かつていた。バサツ、と彼女は先ほどのように四枚の羽を展開させる。

そう、彼女は天使なのだ。何故か大きな衝撃は受けなかつた。どこかで分かつっていたのかもしれない。

またはこの閉鎖空間で現れたことで今理解しただけなのかもしれないかった。

彼女に運ばれ、俺は空を飛んだ。

下を見るとあの墮天使がやはりグラウンドの中央でこちらを見ていた。

その顔は何かを訴えるような顔だった。だが、言いたいことの内容までは理解できなかつた。

俺はその墮天使に恐怖しか感じなかつた。

命を喰らわれるその瞬間、あの体験は一生忘れないような気がする。太陽の光に包まれ、俺たち一人はこの閉鎖空間から消える。

地上に縫いつけられた墮天使はただただ、光のムコウへと飛んでいく一人を眺めるだけだった。

次に視界が良好になつた時、俺が見たものは現実世界だつた。赤や黒などと言つた毒々しい色合いではなく、白や青加えて緑が存在する俺の暮らしていった世界だつた。天使に運ばれて戻ってきたこの世界の景色は俺を安堵させるのに十分な効力を持つていた。再び学校の屋上に着陸し、俺はようやく自分の力で立ちあがる。目の前には助けてくれた少女、空富杏梨が立つてゐる。

「助けてくれてありがとうな、えーと。空富？」

「礼には及ばないわ。そんなことより、あなたはどうしてあんなどころにいたのかしらね。気になるわ」

彼女は何故か俺と目を合わさとせず、どこか他の場所を見ながら話を進める。遠くから俺を眺めていた時はあんなにがつたりと目が合っていたのにどうしたというのだろうか。

今は関係ない話だったな。

「いきなり視界が歪んであっちの世界に飛ばされたんだ。特に何

かをしたわけでもないし……」

数時間前の俺の行動を思い返してみる。特に問題は無かつたはずだ。特殊なことをしたわけでもない、俺はただ水を撒くためのホースを事務室まで取りに行こうとしただけだ。

ふと、何か違和感を感じる。

「そう、特に問題は無かつたというわけね。……何かに触れたのかしら？」

空富が顎に手を当てながらブツブツと何事かを呟いている。俺は、違和感を感じていた。空富に對してではない。自分に對してだ。

何かおかしい、気分が？　いや、呼吸？　喉？　口？

瞬間、俺は血を吐き出していた。

「ぐうううっ！　おえっ、ッゲホゲホ……。な、んだ……これ」視界が霞む、身体のバランスが保てない、屋上の固いコンクリートの床に身体を打ち付けて横になる。

「朝浦陽助？」

空富はそれを不思議そうな眼で見つめている。いつもの瞳で、だ。慌てるような素振りは見せない、その現象が今ここで起きている、ただそういうことを認識しただけというように眼を瞬かせてくる。時間が立つにつれてさらにつらが咳は酷くなり、吐き出す血の量も増えていく。

一体何が起きているのか。俺の身体はすでに血塗れだった。自分の血に漫かり、温かささえも伝わってくる。しかし、徐々に体温は低下していく。俺は、死ぬのだろうか。

意味も分からずに。

「うつ、オゲホウニツ！」

ひとりわ大きな血の塊を吐いた。いや、これは違う？

「な、んだ、これ……？」

震んだ目でそれを捉えようと力を込める。固体だ、しかし血塗れで何かまでは分からぬ。

ドクン、と俺が吐いた塊が振動する。肉塊、そう表現するのにふさわしい姿が俺には捉えられた。

二チャ二チャと嫌な音を立てて肉塊が蠢く。縦に亀裂が入り、さらには振動する。

その亀裂が裂け

中から充血した目が産まれた。

それはこの世のものとは思えないような奇怪なもので、氣味が悪かつた。

肉塊に目がついた得体のしれない生物。そいつは俺のことを凝視している。

目が離せない。血を吐いて死ぬ恐怖より、このまま見つめられるという恐怖の方が圧倒的に上だつた。

「あ、……あああ……」

怖い、怖い。

何が俺をそう思わせるのか、頭の中から直接心へ作用するように、恐怖というものが染み渡つてくる。

目が、その肉塊の目が思いつきり開かれた。

ぶちゅ、という音を立ててその目からは血が流れる。

視線を上に動かしてみると、黒と、彼女の足が見えた。肉塊を踏みつぶしていたのだ。

「朝浦陽助、あなた死にそうね」

なんの抑揚もない声で空富は淡々と俺に告げる。それはまるで死の宣告のように。

「おそらくあっちの世界で植え付けられたものかもしないわね、この化物は。寄生者の内臓を食い散らかし、心臓を乗っ取つてそこに生まれる。のちに口から出て誕生。って所かしら。じゃああなた、

今心臓が無いのね」

意味は分かつても理解はできなかつた。それ以前に頭がぼんやりとしていて物事を考えることが出来ない。

「死なせはしないわ。私がね」

そういうと空富は陽助の近くにしゃがみ込み、陽助を抱き起こした。

それから息を吸うと、彼女は彼に口づけをした。

唇と唇との距離は〇。その時間は5秒間。

彼らは重なつていた。

そう、まるで何かを紡ぐように、何かを。

## 21話・欠落した結果と要因（前書き）

なんとか今日中に投稿できました。  
あと、応援ありがとうございます。元気になつております。  
もう少しで更新率の方も上がると思いますので、よろしくお願ひします。

最後に、前回（20話）でちゅにちゅに出てきてる『黒』という  
単語。  
アレは何を表しているか、皆さん分かりましたか？  
(ものか「へしょーもない」とですが：)

## 21話・欠落した結果と要因

目が覚めたとき、俺は全く見覚えのない天井の部屋に寝かされていた。

体調に問題は無く、先ほどまでの脱力感や痛みはさっぱりとなくなっていた。アレは一体何だったのか。

俺の口。いや、体内から生まれた得体のしれない化物。

そこで俺は気がついた。いや、記憶が無いこと気がついた。

その後、口から化物を吐き出した後の記憶が全くないのだ。倒れたのは覚えている、化物と目が合つたのは覚えている。

しかし、その後の記憶がすっぽりと抜け落ちていた。何か、とても驚くべき出来事があつた気がするのだが。もしかしたら本当に氣絶していただけで、その先の映像というものは無くて当然なのかもしない。

そんなことよりも、生きていてよかつた。

そう安堵すると、向こうに見える白いドア。その向こうから騒がしい声が聞こえてきた。

『陽助さん大丈夫なの!? 本当に? 何事もないの?』

『大丈夫ですよ。あの人があの人がそう簡単に死ぬわけがありません。ゴキブリ並みにしぶとい人ですから』

『ミユちゃん……。でもさ、朝浦君は大丈夫だよね』

『そ、そうだ! 弱つてもうつては困るんだ、朝浦陽助にはお礼をまだし終わつていない!』

おそらくいつものみんな、そこで俺はここが病院だと気がつく。白く清潔感のある部屋、シーツやベッドからは病院独特の匂いがある。

カーテンがはためき、窓からは夏の風が吹き込んでくる。今日はそんなに暑くなく、過ごしやすそうな日だった。

バーン！ とドアが開かれてわらわらと四人が部屋に入ってくる。

「お、おつかれ……」

なんだか今の自分の立場が恥ずかしく、そんな曖昧な返事をしてしまっていた。

「何ですか、以外に元気そうですね」

「陽助さん！ 大丈夫！？ じゃなくて大丈夫かおらあ！」

「朝浦君！ もう大丈夫なの？」

「朝浦陽助！ あの…… その……」

四人が一斉に話し出し、俺は誰から返事をしていいのかが分からなかつた。

でも、なんだかいつも通りで騒がしく、俺は安心した。

「何をニヤニヤしているんですか氣味が悪い」

「俺は病人だぞ！？ それにニヤニヤはしていない！」

「そうですか？ 美少女四人に囲まれて王様気分になつていたのは？」

「そ、そんなことはない！」

「ずずいっ！ とミコがその顔を近づけてくる。

俺は反射的に顔を引こうとしたが、壁に頭を打ち付けてしまう。

「いでつ……な、何だよ」

「……空富杏梨に会いました。どうやら異界に行つたようですね」  
ヒュウッ、と身体に悪寒が走る。あの空間を思い出すと、氷漬けにされたような、そんな感覚に陥る。

異界、とやらに居たあの墮天使。もしかしたらミコなら何か知っているのかもしれない。

墮天使に空富杏梨、謎が頭の中を支配する。

「ちょっと、天崎さん！ か、顔が近いわよーー？」

芹川が我に返つたようにそう叫び、俺とミコを引き剥がす。

ミコは無表情そのまま離れていき、対して芹川は何故か顔が赤くなっている。

それのせいでなんだか俺は拍子抜けしてしまい、心の氷がすっかり

溶けてしまつていた。

「あ、朝浦陽助！ また女子を誑かして！」

「今のはどう見たつてミコから迫つてきただろ！？」

「迫つてきただなんてそんなー。恥ずかしいですー」

「何度も言つがその棒読み止めろや！」

「と、とにかく！」

一度仕切り直すように芹川が横道にそれでいつた話を元に戻す。そして目を伏せがちにし、ポニー・テールとしてまとめた髪を弄りつつ。

「私があんな暑い日に水やりの代行を頼んだのが悪かつた。熱射病だつて下手すれば命にかかるからな……。で、でも、無事でよかつた……」

そう言つた。確かに、一字一句間違はないのだろう。しかしそれは芹川の中で、だ。

俺の心のどこかでは力が働いて、一般人には何らかの都合のいい情報に操作されているのだろうと思っていた。

だが、実際それを目の当たりにすると、驚きに加えて何だか騙しているような申し訳なさというものがこみ上げてきた。別にだましているわけではないのだ。知られるわけにはいかないから黙つている。

こうした小さな一般人との記憶の齟齬、それが俺にはたまらなくもどかしいものだった。

「朝浦陽助……？ どうした、やはりどこか調子が悪いのでは……」

「い、いや、問題は無いよ。もつ歩いてもいいレベル、だと思つ」先ほどのミコと同じように顔を近づけてきた芹川。心なしか少し顔が赤いのだが、口調はいつも通りだった。田焼けでもしたのだろうか。

「そ、ですか。それなら良いんだが……」

そう言いつつ元の場所にすりすりと戻つていく芹川。一体何なのだ

ろうか。

何故かミコがいつかのようにならで冷たい目で俺のことを射抜いていた。なんか怖い。

少し沈黙が流れたところで、歌音が唐突に言い出した。

「あっ、そうだ！ 私、花持つてきたんだよー。 飾ろうか！」

そういうと窓際に約束のように置いてある空の花瓶を手に取る。そして花を抱えて…… ものすごくバランスが悪そうだ。今にも花瓶を落として割りそうな勢いである。

「ちょっと、美里。 手伝つよ」

すかさず芹川が花瓶を持ちあげる。

「えへへー、ごめんね。 ジヤ、ちょっと水汲んでくるよ」

そういうと歌音と芹川は病室を出ていく。

バタン、とドアが閉まると同時にミコはまたも近寄つてくれる。

「陽助様、先ほどは訊けませんでしたが…… 唐突に言います。 空宮杏梨に何かされませんでしたか？」

いつものように毒舌を交えず、真剣な目でそのまま訊いてくるミコ。視界の端の方ではスイがこちらをじっと見ている。

ミコは無表情でその質問の真意が読み取れず、俺はしばしの間困惑した。

「なんで、そんなことを？」

「いえ、特に意味はありませんが……。 吐いた化物のことが気にかかりましてね」

「……」

「あの心臓を喰らう化物に取りつかれる原因として、挙げられるのは一部の天使が使える術式にかかることなのです。 アレは神罰を下すために使われる術式で、普通の天使には使つことができません。 燐天使がそれ以上の階級でなければ使えないのです。 ですから、私以外の天使に接触したことがあるのは空宮杏梨だけでしたので訊いてみたということです」

神罰、燐天使などと言つた俺には理解できないあらう言葉が出てき

てとまどつたが、要するに俺は何者かの術式とやらを受けたということなのだろう。

しかし、俺は空富が何かしたといつ風には考えられないのだ。

何よりも、あの異空間から助け出してくれたのは空富なのだ。わざわざ助け出して術式をかける意味があるのか俺には分からない。おそらく、ないだろう。

それに俺は直感らしきもので彼女はいい奴だと思つてこる。言動こそ冷たいように感じられるが、どこか瞳の奥には優しさのようなものが垣間見えた気がするのだ。

「多分、空富は関係が無いと思う。勝手な直感だけど」

「そうですか。……あてのない勘を前面に押し出す辺り頭の悪さが露呈されていますがまあそれはいいでしょ」

「なんだなんだ、綺麗に毒を盛つてきたぞ？」

「どうか//コは遠い田をじて、俺のことを眺めるのであった。

しばらくすると話すことも無くなつてきて、みんな帰つていつてしまつた。

まあ、俺としてはそんなに長々といてもいりても対応に困るといふか慣れないことだから羞恥心といつものが大きく膨らんできたのだ。だつて病院着だし。

一応今まで入院とこつことで、明日には退院できるそうだ。そのことを親に連絡したのだが、特に反応はなかつた。普通、息子が入院したら駆けつけてきそうな気はするんだがな……。

それにもしても、よくあの状態で死ななかつたと思つ。おわりくは、

いや、多分だが空富が何とかしてくれたのだとは思つてこる。しかし、//コは少々空富のことを疑つてこいるかのよつなことを言つていた。

俺を参らせた術式は天使専用である、と。

俺が引つかつたのは天罰、といつといつである。

誰もが思うだろうが、天罰といつものは何か悪い行いをした者へのペナルティのようなものだ。

それが俺にかかつたということは、俺は悪いことをしたのだろうか。それとも、天罰という俺の認識がおかしいだけで、本当は誰にでも適用される一種の技のようなものなのか。

いくら考えようとも答えは出ない。

なので俺は違和感のある唇に指で触れ、それから目を閉じる。

違和感のある唇を何度もなぞりながら。

少し早めの投稿となりました。

忙しさも抑え気味となってきたので、がんばっています。

一週間に一回の投稿ペースにできるかも……？

次の日、無事に退院した俺は真っ先に学校へと向かっていた。家に帰るよりも先にこちらに足が向いてしまっていたのである。理由は分からぬ。

ただ、学校へもう一度行けば何か分かるかもしないといった直感のようなものを感じたからである。

あくまで直感である。勘違いである可能性は大いにある。それでも俺は、進まずにはいられなかつた。

何か、引っかかることがあつたから。

学校の校門をぐぐると、蝉の鳴き声が一層大きくなる。うちの学校の校内にはたくさんの木が植えられている。おそらくそれらの木々にとまっている蝉が大合唱を始めたのだろう。

一昨日のようになグラウンドへ向かう。どうやら今日はサッカー部が練習をしているらしかつた。

特におかしな点は見当たらない。

空を見上げても見えるのは少々の雲と太陽のみ。

内容が見えない直感はどうやら外れていたようだつた。内容が分からぬのだから、何が直感の結果となつるのかさえ分からぬのに、俺は外れた。と感じていた。

俺はもしかして空富杏梨を探していたのかもしれない。ただ、空富に会つたとして何を話すのか。

助けてくれてありがとう? 俺に術式をかけたのはお前か? 何者なのが?

質問、疑問、そんなものしか湧いてこなかつた。多分俺は、空富のことが気になつてゐる。

廊下で目が合つた時、一定の距離をもつてして彼女と対面した時。何故か彼女は微笑んでいた。瞳の奥の光は柔らかく優しかつた。しかし、異界とやらで会つた時、学校の屋上まで運んでくれた時。

彼女の声や瞳は冷たかった。

その違いは何なのか。釈然としない。

まともに会話をしていないから、いつだって一方通行だったから。だから俺は彼女が何なのか知らない。

ゆえに、気になっている。

これは恋とか愛とかそんな感情ではないと、そう考えている。

歩みを進め、校舎の裏に回つて花壇がある場所へと俺は向かっていた。

今日も変わらず向日葵は太陽に向かつて背を伸ばし続けていた。

「あっ、朝浦陽助！？」

水撒き用のホースを取り落し、素つ頓狂な声をあげたのは制服姿の芹川結穂だった。

ざばざばとその間にもホースからは水が流れている。

「よう、今日も水やりか」

「そうだ、というかなんでここに居る！？」

「そんなに驚くことかそれ？　俺はただ……、なんだろう。暇だつたから」

「暇だつたから会いに来てくれたのか……？」

芹川は何事かを小さな声で呟いていた。もちろん蝉の鳴き声に遮られて俺には聞こえない。

「何？　なんか言ったか？」

「な、なんでもない！　それより、出歩いて大丈夫なのか？　退院したばかりではないか」

「いや、体調に問題はないよ。　ああ、そういうえばお見舞いありがとうな」

「べ、別に私は何もしてない。それに美里が行こうというからついで行つただけで本当なら私は委員会の仕事で忙しくて行く暇などなかつたのだがやはりこれは私が頼んだことによる作用で朝浦陽助は入院してしまつたのだと考へると仕方なく本当に仕方なく美里につ

いて行つた、それだけだからな！」

「はは……、とりあえずありがと！」

芹川ははあと肩で息をすると、後ろを向いて固まつてしまつた。もちろんホースは拾われずに乾いた地面に水をまき散らしているまだつた。

「おい、水出つぱなしだぞ。 というかホース拾わないと……」

俺はホースを掴み、向日葵の方へと向ける。

花に水をやるときは花本体に水をかけがちだが、本当はそれではだめなのだ。

いや、普通に考えれば分かる話だが、根元に向けて水をやらなければならぬのだ。しかし、ここにちょっとした注意点があるて、土を抉らない程度に水を霧状にしてかけてやるのがいいのだ。でもまあ、このホースでは少し無理がある。

なのでホースの先を指で潰して微調整をして水を何とか霧状にしないといけないのだ、これがまた難しい。

「ん……んん？ 難しいな」

思考錯誤しているうちに芹川は金縛りが解けたのか、赤い顔をしてこちらに向かつてきた。

ん？ 赤い顔？

「あ、朝浦陽助…… あなの。 えつと、その」

「大丈夫か？ なんか顔が赤いぞ。 もしかして日光にやられたか？ それなら日陰で休んだ方が」

「ち、違う！ だから、朝浦陽助が体調を崩して入院してしまつたのは私のせいでもあるわけ……」

「芹川？」

「なので、その……。 お詫びと兼ねて花壇の水やりのお礼がしたいのだ！」

芹川は胸の前で両手を握りこぶしにして、ボクサーの構え……とはちよつと違うポーズで叫んだ。

もちろん、顔は赤いままで。

俺が芹川につれてこられたのは駅近くの少しお洒落なカフェのような場所だった。

窓際の席に一人座り、注文が来るのを待っていた。

その間、何故か会話は一つもなかつた。

「…………」「…………」

静かな店内と同様に無言になってしまい、店内のBGMであるオルゴールだけが何度もループしていた。

芹川が何故か異様に緊張している面持ちだったので、自然と俺も口数が少なくなってしまったのだった。

これは…………何だ。

しばらくして注文したアイスコーヒー一人分が机の上に並ぶ。それに加えて何故か小さなパンケーキが一人分並べられた。確か俺たちはこんなものを注文していなかつたはずだ。

それを見た芹川は顔を上げ、ウェイトレスに顔を合わせる。

「それはサービスです、ウチの店では男女のカップルに無料で店長手作りのパンケーキをお渡ししています。どうぞ召し上がってください」

につこりとほほ笑むウェイトレスに対しても芹川はボボバボンと顔を赤くし、立ち上がる。

「べつべべべつ別にカップルじゃないですよー?」

「あら、でもお二人さんの初々しい感じは成り立てのカップルに見えましたよ?」

「でもちがうんです!」

「では、将来そういう願いを込めまして、これを一人で頂いて下さい」

そういうとウエイトレスはお辞儀をして俺達の席から離れていった。 しまった。

あのウエイトレスさん……できるつ！？

そんな感想を抱いて考えまいとしていた俺に芹川は質問を投げかけてきた。

「わ、私たちがカップルに見えるそうだ……。朝浦陽助はどう思つ……？」

語尾がだんだんと萎んでいつていうのが分かった。

アイスコーヒーのストローをカラカラと回し、芹川は上皿づかいで俺を見る。

「どう思つって……。特には」

「そ、そつか……、はあ」

見るからにテンションの下がった芹川。じいつけはさつきからじりじりしまつたのだろう。

「というか、芹川は迷惑じやなかつたか？ 俺何かと恋人扱いされ

て

「いひ……恋人おつ、……わ、私は……つに」

「ほらさ、俺の方は構わないんだけど。芹川は……」

「か、つ構わないのか！？」

「な、何だよいきなり……。芹川には好きな人がいるかもしけないから迷惑じやなかつたかつて話で」

「そうか、構わないのか……」

「あれ、聞いてます？ 芹川さん？」

「ふふふ……」

多少壊れてしまつた芹川を横目に俺はパンケーキを一口食べてアイスコーヒーを飲んだ。

なかなか美味い。

「それじゃ、またな」

そう言つて芹川と別れたのは、一時間後のことだった。

田はすでに傾きつたり、まさに夕方と言つた感じだつた。駅近くの建物は全て茜色に染まつておひ、帰宅途中と思われる学生やサラリーマンなどが闊歩していた。

そう言えれば、と思ひだす。今田は何しに学校へ寄つたのだったか。空富杏梨を探すためではなかつたのか。しかし、彼女はどこにもいなかつた。当たり前だ、夏休みなのだから。

そうすると、学校が始まるまでの残りの夏休みの間、その長い間ずっとお預けを食らうのだろう。

何に対してもお預けなのかが俺には少し覚えが無かつたが、なんだかモヤモヤする。

そんな事を考えながら自宅へと向かう道を歩いていたら、見知らぬ青年に声をかけられた。

黒の半袖シャツに、これまた黒っぽい色のジーンズを履いた男である。耳には銀の觸體が光つており、それでいて髪の色は普通に黒だつた。

「ちょっとすんません、この辺の住所つて教えてもらえるか？」  
疲れているのが、少しうつきらぼうな言い方で俺に訊いてくる。旅人や旅行者には見えなかつた。荷物を何一つ持つていないし、見えているのはジーンズからはみ出している長財布だけだつた。

「いや、違うなあ。こここの場所、そういう場所を教えてほしいんだけど」

カサカサに乾いた紙のようなものに地図が記されていた。しかし、それに記されていたのは日本語でもなく英語でもなく、もつと他の何か。読み取れそうで読み取れないような、文字であることは理解できるのだが、点字のようにも見えなくはない何かだつた。

「えつと……、外人さんですか？」

「え？」

「いや、だつて。これ、外国語、ですよね？」

「へ？…………あつ。少年！俺は今、急に用事を思い出した。

丁寧に答えてくれて感謝、では！」

何を思ったのか、ぐしゃりと紙を握りつぶしてから青年は額に冷汗を浮かべ、駅の方向へと走つていってしまった。

道の真ん中に立ちつくす俺はただ、口を開けてぼんやりとしているしかなかつた。

なんだ、なんなんだ？

「用事つて……道に迷つてたんじやないのか？」

そんな陽助の独り言は町の雑踏の中に消えていくのであつた。

## 23話・海へ向かいつのせなか（前書き）

なんとか投稿できました。

一週間に一回ペースでも行けるかも……？

病院から退院して一週間は経つたであるの田の」とだつた。

これまでの毎日はだらだらとテレビを見たり、ゲームをしたりして過ごしてきた。もちろん、課題は一つも片付いておらず、やる気がりうとは思うのだが、行動できていないのが現状。

これは、後へ田もあるじゃないか、という自分の中の勝手な安心感のせいである。

踏ん切りをつける一歩田といつのは何事に対しても大変なことだ。そんな事は分かっている。いや、分かった振りをしているのではないか？

これは課題を片付けるとこたことのほかにも言えることである。それでも俺は決心を付けられていない、一番難易度の低い選択であるにも関わらず。

今に始まつたことじやないんだけどな……。

と、そんな自分の脳内感情を垂れ流していると、携帯電話が震えた。ディスプレイには歌音美里、と表示されており、俺は何のためらいもなく電話を取つた。

「もしもし？」

『もしもーし！ おはよう朝浦君、今日はすこくいい天氣だよねっ！ じうじう日つて海行きたくなるよね、といつか一学期最後の日に行こうって約束したよね！ といつことで今日行こうね、ってかそれも決めたよね！だから駅前集合だからね！ ミコちゃんといちゃんにも言つておいてね！ ジャね！』

一気にまくしたてるように言つたことを全部吐き出した歌音は俺の返事などろくに聞かずに電話を切つてしまつていた。もちろん俺は棒立ちのまま頭が真っ白になつていた。

無呼吸あんなにもはしゃいで話す歌音は初めてだつた。というか何が楽しくてそんなにはしゃいでいるのだろうか。……いや、みんな

など遊ぶのが待ちきれないのだろう。

そんな純粹な歌音の心に苦笑を浮かべつつ、部屋から出る。リビングには美しい姿勢で椅子に座つてこむミコがいた。ビリヤークースを見ていよいよつだつた。

俺の登場に気がつくと、クルリと振り向いてじつと俺を見つめる。朝からすでに着替えて私服のミコが俺の家に居るといつことに何故か違和感を感じる。これはその、同棲と、そう言いかえられる何かを感じさせるようなシチュエーションだつた。

視線をそらわずにじつと見つめてくるミコ。前にも言つたかもしないが、ミコは毒を吐くことと性格を除けばこれ以上ない美少女だと思つ。

現に、クラスの男子の視線や好意を集めているわけだし、先輩方も一目置かれているらしい。

これは歌音情報だ。

「な、なんだよ……」

俺は思わず上ずつた声を出してしまつていた。

これじゃあ何か、俺は何か緊張しているみたいじゃないか。そんなことはない、目の前に居るのは毒を吐き散らす天使だ。

「いえ、先ほぞークースで見たコンビニ強盗の似顔絵とそつくりでしたので」

「のでなんだよ！？ 何か、お前は俺が犯人だとでも思つているのか、つていうかそれ以前に犯罪者面だつて言いたいのか！？」

「両方です」

「なんでだよつ！ 前者は違うだろ！」

「後者を否定しないところに私は感動を覚えました」

「畜生！ なんで朝から罵られなけりやならないんだ！」

「朝からひるさいですね」

「お前のせいだよつ！」

ミコが来てからといつもの、朝は大体こんな感じだつた。

人が増えて賑やかになつた、というよりかは騒がしくなつた、と表現する方が正しいだろ？。

幸いにも俺の部屋の左隣には人は住んでいないし、右隣の人は朝早くから仕事に出ているので迷惑はかかっていないと思つ。ミコはそれすらをも計算してやつているようでなんだか怖い。

だから、どれだけ騒ごうと朝のうちに迷惑はかからないのだ。

「ふああ……おはよ」

寝ぼけ眼を擦りながらリビングに現れたのはスイだつた。何故かいつものようには着崩れ、ズボンはきわどいところまでパンツと一緒に下がつていた。

見た目はまんま休日の小学生、というレベルだ。しかしこいつは、れつきとした悪魔なのだ。

「おじお前……。ちゃんと着替えてから部屋を出るようひつていつも言つてるだろ」

「ひうつ！ なんでそんなに怖い顔するんですかあ。……見てる、私のことをみてますう！」

まるで凶悪犯罪者が獲物に忍び寄るかのような構図。俺は全く悪くないというのに。

「やはりあなたが例のコンビニの……」

「違うつうのー。そんな事よりお前ら、歌音から誘いの電話があつたぞ」

強引に話を捻じ曲げて、これ以上被害を拡大させないようにする。いつまでもこんなことを続けていたらおそらく日が暮れてしまうだらう。

「海の件ですか？」

「そうだ。……んで、お前ら水着とか大丈夫なのか？」

ミコ達がこの夏休み中に買い物に行つたということは聞いていない。もしかしたら、俺が入院していた間に買つていたのかもしれないが、一応聞いておく。

「変態ですね」

「何故だつ！　俺はただ水着の用意は出来てゐるかと聞いただけだぞ！？」

「いえ、分かつてはいたのですが。……やはりその顔で仰られると「すげえ貶しかた！？」俺はもうライフゼロですが！？」

「あ、あわわわ。//コちゃん！　だから何度も言つたが、陽助さんはカツコイイよつ！？」

デジヤビュ。時が止まつた。

「えつ？」

「え？」

「あつ」

なんかこの展開は前にも見たことがある気がする。

「とつ、とりあえず、各自準備して來い。後でまたリビングに集合な

俺のこの言葉に反対する者はいなかつた。

海に行く用意を終えてみんなが集まつたところにはすでに太陽は容赦ない日差しを降り注がせてゐた。

それをカーテン越しに感じながらも俺は今日の海を少し楽しみにしていたりした。

「さて、戸締りもしたことだし。……行くか」

そう二人に呼び掛けて、玄関をでた。

むわり、と夏特有の熱気が身体を取り囲み、熱中症へと誘つてくる。そんな暑さに顔をしかめながらも、とりあえずエントランスまで降りて最寄りのバス停まで歩く。

歌音と芹川はおそらくバスの中で合流できるはずだつた。

バス停にたどり着き、時刻表を確認すると後5分ほどで到着するらしかつた。それまでの間暇なので、天使と悪魔を観察することにしてみた。

ミコは白いワンピースに身を包み、足元にはお洒落なビーチサンダルをすでにつっかけていた。

肩には橙色をしたトートバッグをかけていた。おそらく荷物はその中なのだろう。

その姿はまさに夏の美少女。表情に変化が無いのは少し惜しいが、それでも美少女である。

「何を見ているんですか、警察に通報しますよ？ 間違いなく捕まりますね（笑）」

毒を吐かなければ。

対してスイは黒の半袖Tシャツにショートドームを合わせ、一いつも可愛らしいサンダルを履いている。

肩にはプールセットを担ぎ、それはまるで学校のプールに遊びに行くお子様のような格好だった。

「なっ、何見てんだ！ ぶ、ぶぶ……ぶつ殺すぞ！？」

今日もまたキャラづくりに励んでいるらしい。

俺はあまり巻き込まれないようになるとスイから視線を外し、真夏の太陽を見上げる。

眩しい。あまりにも輝きすぎていて、しかしそれでいて綺麗なブルーの空とはしっかりと調和している。

太陽と空。これほどまでに互いを引き立てている組み合わせがあるだろうか。

「つー？」

ズキン、と頭の奥が痺れた感覚がして、立ちくらみを起こす。からうじてバス停に手をかけるが、足が震えていて立てない。

「陽助様？ どうかされたのですか？」

俺の異変に気がついたミコが、近寄ってくる。トートバッグから水筒を取り出している。

痛みは一瞬だった。先ほどまでの足の震えも收まり、今の出来事が嘘だったかのように俺の体調は元通りになっていた。

「いや、……大丈夫。 なんだ、今の」

自分で理解できない出来事に困惑していた。また何か呪いのよくなものにかけられたのだろうか。

それにしては唐突だつたし、痛みはもうない。

そんな事を考えていると、向こう側からバスがやつてきていた。

「今日は止めておきますか？」

ミコがそんなようなことを言つてきたので俺は首を横に振つた。

「や、ただの立ちくらみだつたから大丈夫だ」

そういうことにしておく。

バスのドアが開き、乗客が次々と降りていく。その中に見知つた顔、というより見たことのある顔の者がいた。

前に道を聞かれたあのおかしな青年である。

「おつ」

「あつ」

目が合つてしまい、そんな声を出してしまつ。 対して知り合いでもない仲なのだが、彼はにひーと笑つて。

「久しぶりだな少年。 美少女一人も連れてお出かけか？」

どこからかうような声色で俺のことを見据えつつ言つてきた。初対面に近いはずのこの人はなかなかに失礼ではなかろうか。しかし、そんな事は顔には出さない。

「いえ、……まあ」

「そうかそうか！ 少年は青春を謳歌しな、では」

シユタツと敬礼まがいのモノマネをして青年は去つていった。向かつていくのは俺達が来た方向だつた。

そんな彼を目で追つていると、バスの窓から聞き覚えのある声が聞こえた。

「おーい、朝浦君。 ミコちゃん、スイちゃん！ こんにちわ～」

歌音だつた。頭には水中ゴーグルをすでに付けているという徹底ぶり。どれだけ海に行きたいんだあいつは。

そんな歌音の姿に苦笑しながらも、俺はバスに乗り込む。後ろからミコが付いてきて、スイは遅れて階段を上がるうとし、脛をぶつ

けていた。

「あ、朝浦陽助……。おはよう」

「こんにちわ、だけどな。芹川」

何故か超絶小声で話しかけてくる芹川に突つ込みを入れ、俺は席に座る。

アレ?

「なんで芹川こっちに席移つてきてんの?」

俺のとなりにいつの間にか芹川が座つていた。さつきまで歌音の席の隣に居たはずだ。

チラ、とミコとスイがこちらの動向を窺つている。なんだこれ。

「いや、これは、その、アレだ。 そう、アレだ」

ほとんど代名詞で構築された台詞に俺はうん? と適当に相槌を打つことしかできなかつた。

と、そこに。

リクライニングシートが全力で俺に向かつて倒れてきた。

「うぼおあつ!」

自分の席と前の席に挟まれて苦悶する。なんだこれ、なんだこれ!?

顔を傾けるとミコがリクライニングシートに寝そべつっていた。とい

うかこれ、そんなに倒れるもんだったか……!?

「あら、朝浦様。 大変苦しそうですね」

「おま、おまつ……」

ギツ、とリクライニングシートを元に戻したかと思つとびぐるりつと席を回した。

二人掛けの席が一つ向き合つようになり、電車で見るようなパーテイー座り（勝手に命名）になつた。

バスにこんな機能が付いていることは俺は知らない。どう考えてもおかしい。

「お前ら何を……。おつー」

ズビシッ! といつの間にか現れていたスイが俺に指を突きつけながら言つ。

「そろはいかせねーぜ！ ハツハツハ！」

高笑い。幸いにもバスの中には俺たち以外は誰も乗つていなかつたので、迷惑がかかることはなかつた。

だがしかし、俺にはミコとスイの行動の意味が理解できなかつた。もちろん、俺の席の後ろで笑いを漏らしている歌音のことはなおさらだつた。

24話・水着披露で疲労困憊（前書き）

遅くなりました！

バスに揺られること数時間。中心街から離れて郊外までやつてきた俺達の目の前には青い海が広がっていた。

俺達の住む町は内陸に向かつて発達しており、沿岸部は田舎……という表現もおかしいのだが、あまり人が住んでいないのである。観光客用のホテルもなければ、コンビニだつて数キロ歩いたところにしかない。移動手段はバス以外にはない。

だから俺達が目的としていた海は静かで綺麗で、最高のロケーションなのだ。

言い換えるなら穴場とでもいうべきなのかもしれない。しかし、海の家は存在していない。そこだけが少し不満なところであつた。代わりに簡易更衣室のようなものが存在している。ロッカーが無いという意味のわからない構造をしているのだが、着替え場所があるだけまだましな気がする。

「海だーっ！」

目を輝かせた歌音はいつになく元気なスイと共に砂浜へ走りだしていつてしまつた。

後ろではやれやれと芹川が肩をすくめ、ミコは眼前の海をぼーっと眺めていた。

流石夏休み中というべきか、自分たちの他にも海水浴に来ている人は多かつた。

家族連れ、カップル、友達大勢と……たくさん的人が集まつていて、賑わっていた。

「とりあえずこの歌音が持つてきたパラソルを立てようか

「そうですね。位置的には海から近すぎず遠すぎずと言つた場所がいいと思われるのですが……。そんな場所はほとんどなさそうですね」

ミコが隣に立ち、場所取りにちょうど良い場所を探してくれたのだ

が、やはり人が多くそんな場所は無かつた。

「後ろの方で妥協しましょう。朝浦様、行きますよ」

歌音たちが放りだしていつた鞄やら何やらをミコは回収し、俺の前を歩いて行く。

はて、ミコはこんなキャラだつただろうか。人が忘れた荷物などは燃やしてしまいうような性格の持ち主ではなかつただろうか。いや、冷静になつて考えてみると、俺以外には普通かそれ以上の態度で接している。差別というか区別されていた。

嫌な新発見に苦笑いしつつもパラソルを砂浜に突き刺すだけの簡単なお仕事を請け負つた。

はしゃいでいた歌音とスイが一度戻つてきて、水着に着替えてから最集合ということになつた。

パラソルを置き去りにすることに少し抵抗を覚えたが、パラソル単体を盗む奴などいだらうという歌音の発現に渋々了承し、俺も簡易男子更衣室へと向かつた。

といふが、歌音は早く遊びたかつただけなのではないだろうか。簡易男子更衣室のなかは薄暗く、光を発するはずの蛍光灯3本のうち1本がこと切れていた。

外装のボロさはともかく、中も結構大変なことになつっていた。ロッカーは存在しないのでそれなりに空間はあるのだが、なんといつたらいいのかただの小屋のような感じだ。

そして床はプールサイドでよくみられる水を弾くような素材のアレ。詳しい名称の方は俺は知らない。

なんとか着替えると、等身大の鏡があつたので自分の姿を確認してみた。

顔……は見る必要が無いので、身体の方を見てみる。

やつぱり全然鍛えていないからか、よく分からい体型になつていた。痩せ過ぎでもなく太つてもいなく、筋肉が付いているわけでもない。中途半端な身体だった。

改めて日々の墮落した様子を直視せらるてこるよつな感覚だつた。

砂浜に出て、一度歌音のパラソルの元へと戻る。少しして、向こう側から俺を呼ぶ声が聞こえてきた。

「朝浦ぐーん！ お待たせい！」

「あー、……おうつ！？」

元気よく走ってきたのは歌音だつた。タンクトップビキニ、略してタンキード呼ばれるであろう水着を着用していた。上はキャミソールのようになつており、下にはショートパンツを履いていた。いかにも歌音らしい水着だつた。

「……」

歌音に続いて赤い顔をして手を組んだりそれを解いたりと忙しなく動いていたのは芹川だつた。

彼女は少し大胆な黒のビキニで、周りの海水浴に来た人たちの注目を集めていた。

それは芹川の隣に居るミコにも言えることで、ミコは白いパレオとよばれている者を腰に巻いていて見る人が見れば、お嬢様のようにも見えるくらいだつた。

そして、俺の視界の端でちよろちよろと動いている悪魔の子は……。

「おい」

「なつ、なんだこのやろー！ 私に見惚れたかつ！」

少し照れたような様子でそんな事を言つてみせるスイ。もちろん、可愛いのは可愛いのだが。

ベクトルが違う。何か違う。全くの反対方向を突つ走つているのか、それともその選択は正しかつたのか、スイはお決まりのパターンのように入スクール水着を着ていた。

「お前は……また。なんてモノを」

「ええつ！？ だつてミコちゃんが『これが似合いますよ』つて……いや、間違つてはないんだ。似合つているんだが、それは可愛いとかこうよりも見た目の年相応に似合つてているということなんだ。そ

の前になにかがおかしいとスイには気がついてほしかった。  
というより、勉強をしつかりとしてほしかった。

「ミコ……」

「朝浦様が思つてゐる通りの結果がこれです

「もう何も言つまい」

呆れて溜息しか出ない俺に対し、歌音は何故か興奮気味にスイのことを褒め称えていた。

「流石スイちゃん！ 変化球で攻めてくるねっ。 確かにそういうのが好きな人もいるもんね！」

何か不吉なことを言つてゐるような氣もするが、俺は巻き込まれないよう距離を取つておく。

軽く準備運動をしてから、俺はあることに気がついた。

「そう言えば、荷物とかはどうしようか。 誰かが見張り番するわけか？」

そうなつたら一人がここに残つてしまつこととなり、みんなでは遊べなくなつてしまつ。

他の海水浴客は乱雑に放置しているところもあつたが、俺は少し心配だつた。

「そうだねー。どうしようか……」

歌音もそこまでは考えてはいなかつたらしく、色々と模索していた。しかし、そこにミコが。

「いえ、私が少し細工しておきますので、大丈夫です。 みんなさんは気遣うことはないですよ」

明らかに何か意図を込めた言い方でそんな返答を返してきた。

ああ、まあそんな事だらうとは思つていたけどね。

歌音と芹川をとりあえず先に行かせ、俺はミコに近づく。

「お前、」

「ちょっとだけ卑怯なことをしますが、構いませんよね？」

「……駄目つていつもやるだろお前」

ブウウン……とミコの手から藍色の光が放たれると、俺達の荷物を

包みこんだ。天使の術を使ったのだろう。

だが、ここでまた問題を見つけて俺はミコに聞く。

「ところで質問なんだが……今やつたこの術があるだろ？……誰

かが盗もうと触れたらどうなるんだ」

恐る恐るミコの横顔を見る。いつもと変わらない無表情がそこにはあつた。しかし。

「腕が半ば吹き飛びます」

「危なすぎるだろそれ！？」

そんな恐ろしいことを言つていた。こんな海水浴場で腕が引き千切れるような悲惨な事故があつてたまるかっ！

「嘘です。私たち以外の者が触れた時に感知できるようにしただけです」

「だ、だよな。天使はそんな怖いことしないもんな？」

そんな俺の何気ない発言に対してもミコは。

「……時には厳しい罰も下しますけどね」

そんな事を言つていた。俺は聞かなかつたことにした。

久しぶりの海は新鮮さが満ち溢れていで、若干開放的な気分になりながらも楽しんでいた。

俺はあまり泳ぎが得意なほうではないが、それなりには泳げるのでもつともつて無理だとカナヅチとかではない。しかし、それでも普通よりは劣るのだ。

ザバザバザバと縦横無尽に泳ぎ回る歌音を見てそう思つたのだ。いや、アイツは普通ではなかつた。

運動もできて勉強もそれなりに出来る。歌音はそういう奴だつた。ぐぽつ、と歌音が水面から姿を現した。俺の目の前で。

「どーかしたの、朝浦君？」

「お前……現れ方が心臓に悪い」

ゴーグルを付けたままきょとんとした顔を向けられる。いつもの小さなツインテールは下ろしていて、普段とは違った印象を受ける。

「い、いや……なんでも、ないけど」

「んー？」

歌音にドギマギしてしまっている俺がいた。やはり普段と違つ姿を見せられると、調子が狂うものだ。

そう言えば、さつきから周りの人の視線を感じる。

バツと振り返つてみる。サツと視線を逸らされる。遠巻きにこちらを見ている人が大勢いた。それはそうだ、ここには黙つていれば美少女が揃つてているのだから。その中で俺が浮いているということは言うまでもない。

『アレヤバいよな、可愛い。……でも、あの男超怖え』

『一夫多妻制つてヤツ?』

『一国を築き上げてるよねー』

周りから漏れる声。いや、聞こえてるんですけど。

というか、分かつてはいたのだけれどテンションが下がらないわけが無かつた。

『どうかしましたか、朝浦様』

俺の不自然さを察してか、ミユが声をかけてきた。

『どうもこうも、周りの視線が痛い』

『いえいえ、朝浦様の視線の方が痛……じゃなくて厳しいものがありますよ?』

「あんな、それは全然言い換えになつていないと思つんだ」

「私の清廉潔白な心の声が聞こえるのです。どんなに苦しんでいる方がいても、嘘はついてはいけないのだと」

『じゃあ黙つてればいいだろ!?』

『それだと面白くないじゃないですか。あ、間違えました』

『わざとだろ? そななんだろ、っていうかそれ以外の選択肢が見

当たらねえ！」

俺の咆哮に対し、周りの人がすごい勢いで遠ざかつて行くのを感じだ。

「良かつたですね。これで視線は減りましたよ？」

「……」

俺は天使にいじめられているらしかつた。

## 25話・スイとの時間（前書き）

大晦日ですね。今年最後の更新です。  
来年はもっと更新率を上げるよう頑張りたいと思います。

しばらく一人で海の中を泳いだ後、歌音が持ってきたパラソルの下に戻り少し休憩していた時のことだった。

何やらスイが一人離れた場所で、こそそと何かをやつているようだった。

腰まで海に浸かり、手は前にパンツと出している。

アイツは何をやつしているのだろうか。気になった俺はスイの元へと向かうことにした。

「む～……むむむ

唸り声を上げながら怪しげに手を交差させるスイ。

「何やつてんだお前」

「ひやうつ！？ な、なんだこのやろー！ びつくりするだり」

「俺は未だにキャラを作り通しているところにびつくりだ」

「つねきこつるさこ！ それより何か用ですか……？」

「……いや、何をしているんだろうかと思つてな」

俺がそう訊くと、何故かスイはぱあああつと顔を輝かせて俺に向き合ってきた。

スクール水着つて所をどうにか改善してほしいところではあるが。

「よくぞ聞いてくれましたね、陽助さん！ これはですね、こうやつて……」

スイが再び手をまっすぐ突き出すると、掌から少し離れたところに浮いた水球を発生した。

その水球は微妙に回転しているらしい。 そつすることで球状に保つていてるのだろうか。

つてそういうことじやなくて！

「お前こんなところで何をしてんだ！」

「えつ……？ 海なんだからお水で遊んだっていいでしょ？」

「違うだろ、普通の人間はそんなこと出来ないんだからすぐやめ

なさい」

そう言つて俺が水球に触れると

「あつ、触っちゃダメですよよー！」

バチン！ とものすごい勢いで腕が弾かれ、その慣性に身体ごと持つて行かれる。

俺の身体は数メートル飛び、背中から思いつきり水面に叩きつけられた。

「あわわわわっ！ 陽助さん、大丈夫ですか」

地上で走るのと何ら変わりのない速度でスイは「ちりこ歩み寄つてくる。

俺は鼻に入つた海水と格闘しながらも起き上がつて辺りを見渡した。よし、おそらく誰も見ていない。

「もつ、普通に球体なんて作れるわけないですから力が加わつているに決まつてるでしょ？」

俺に手を差し伸べるようにしてスイは得意気にダメな子を見るような目で俺を見る。

あれ、俺は今スイに説教されているのか？

棒立ちの俺に見上げるよつにじてスイは何事か難しいことを話していた。

「ふはははっ、やつぱり馬鹿だぜお前！」

調子に乗ってきたスイは、いつも悪魔キャラの口調になつていた。「これだから人間は駄目なんだ！ もつと水の使い方を考えないといけない、ただ飲むだけとかお料理に使うだけとかじゃもつたいいい」

ついに人間全体の集合を馬鹿にし始めた。

こいつには制裁を下してやらねばならん。そう思った俺はすぐに実行に移せる案を思いついた。

「ほう、俺達人間を馬鹿にするのか。よし、ではこれを喰らえ！」

俺は水中に手を潜めた後、両手を筒状にするよつて口合わせてギュッと押し出した。

海水が綺麗に放物線を描き、スイの得意気に笑つてゐる可憐げのあ  
る顔に直撃した。

「ぶへつ、何するんで……あつ、何すんだテメエ！」

一旦弱気になつたものの、持ち直したようだつた。

「馬鹿め。これは朝浦家に伝わる手のみで水鉄砲の代用になる秘術、  
『風呂おやかまので得とた知恵ちゑ』だ！」

二発目、三発目とスイの顔にかけていく。

スイは苦しそうに身を捩るが、俺の攻撃からは逃れられない。

「くつそー、馬鹿にしやがつて！ 水の使いスイを舐めるなよー！」

先ほどのようにスイは水球を飛ばしてきた。  
速度はそれなりにあるが、避けることは容易かつた。直線状にしか  
飛んでこないため、スイの手の向いた方向にいなければいいのだ。  
それに引き換え、俺は手の形を変えることによつて、長距離射撃も  
可能になつていた。

「オラオラオラオラオラ！」

「うーーー！ 陽助さん、もう容赦しませんからねー！」

ギュウルルルンッ！ とバレーボールぐらいの大きさの水球を生み  
出し、同じように俺に向かつて放つてくる。

何度も同じ手は喰らわない。そう思いながらスイの手の直線状から  
逃れる。

思つた通り、水球は俺の元居た位置に落ち、海水と同化す  
しない！？

水球は海面上で停止し、回転を続けていた。  
それに驚いた俺は立ち止つてしまつていた。

「今だつ！」  
「パルウウン、と制止していた水球が俺の方に向かつて飛んでくる。  
「なにいいいつ！？」

水球が直撃、身体全体に鞭で打たれたようなピリピリとした衝撃を  
受け、先ほどよりはるか遠くへ吹き飛ばされる。

空に浮かぶ雲が見たこともない速さで逆行してゐる。これは今、自

分が相当な状況下に居るところ」ことを知らせてくれて居る。

「だつぱーん！」 とまたも背中から海に落り、一時的に溺れる形となつた。

「つふはー！」

水中から顔を出すと、遠くの方でスイがどや顔でふんぞり返つているのが見えた。

くそう、スクール水着のくせに。

俺が泳いでスイの元へと戻ると、何か嫌な雰囲気を感じ取つた。

「なんだ……」

「よよよ陽助さん……、後ろ」

スイの尋常じやない怯え方に俺も寒気がしてきた。いや、実際背中が冷たいような

つて凍つてゐー

「痛い痛い！」

海の中に倒れこむと、その氷はすぐに溶けて消えてなくなつた。そして後ろを振り向くと、そこにはミコがいた。

間違いなく怒つていた。

表情に変化が無くとも、それくらいは分かつた。そりや普段から一緒に居れば分かる。そういうことじやなくて。

「……陽助様。いえ、今となつては海を汚す汚物さん。何をやつていらしたんですか」

「えつ、えつ、……俺はただスイと遊んでいただけで」

「馬鹿ですか、馬鹿ですね、馬鹿なんでしょうな。もし他の人に見られていたらどうするつもりだつたんですか？」

「スマセン」

「ひひひひひ……陽助さんは悪くないんだよ。私が術を使つたら注意しに来てくれただけでえつ

ギンッ！ とミコはスイのことを冷ややかな目で見下す。隣に居る俺でも怖い。

「ひうつ！？」

「スイも分かつて居たのをじょう？ 正体がばれると色々とややこ

しいんです。それはあの糞ジジイからも聞いていましたよね？

「お前つてば神様を、おつづ！」

俺の目の前に桃色をした大きな刃を突き刺した。『これはいいのか？』『ばれないのか！？

「ミコちゃん……『めんなさい』

「分かればいいんです。ただ、調子に乗った朝浦様は全身にアルミニウムを巻いて砂浜で5時間ほど寝ていていただきたいと思います」「蒸し焼き状態！？俺に死ねとそう言いたいのか！？」

「分かっていただけて結構です」

「イヤ、ホントニスミマセンデシタ」

「……」

俺の誠心誠意の謝罪もミコには冷ややかな目で氷漬けにされるだけだった。

「ときには朝浦様。あそこに見える建物……アレがいわゆる『海の家』というものではないのでしょうか？」

ミコに叱られた後、拗ねてスイと一緒に砂山を作っている時に再びミコが話しかけてきた。

その言葉通り、ミコの指した先には海の家にしては少々立派な建物が建っていた。

何故今まで気が付かなかつたのだろうか。いや、それ以前に海の家が出来たという話しさ聞いていなかつたが……。

海水浴に来ている他の客も、ちらほらと海の家に入つていいくのが見える。

そこで、パラソルの下で休憩している歌音と芹川に訊ねてみた。

「なあ歌音、芹川。ここに新しく海の家が建つたってこと、知つてた？」

「え、うわ。私の情報網には引っかかるなかったんだけどなー。もしかしてほんとの最近に出来たのかな?」

「わ、私も知らなかつた」

「どうやら一人とも知らなかつたようだつた。宣伝も特にしてないようだつた。」

折角だし、軽く覗くくらいしてこようか、と思つた時。

「そう言えば、お昼はどうする予定だつたのですか?」

ミコのその問いかけに一同はハッと気が付く。

「もしかしてみなさん、考えてませんでしたか? では、ちょうどいいのでは?」

奥の建物を指している。

歌音に加えて芹川も忘れていたらしい。実際、俺も忘れていたのだから何もいう権利はないのだが。

「す、すまん朝浦陽助……。弁当の用意を忘れていた」

「別に芹川が謝ることじやないと思つんだが……。昼食係なんて決めてないんだからさ」

「いーじゅん、いーじゅん! そりだよ、折角なんだからあの海の家行つてみようよ!」

歌音は立ち上がり、すでに行く氣満々だつた。

「なんか都合がよすぎて怖いような氣もするんだけど……いいか

「そうですよ、朝浦様。何も怖いことはございません、逝きましょ

う」

「何かおかしな氣がするんだが氣のせいでいいんだよな?」

そんな俺の「メントをもスルーしたミコはさつさと謎の海の家に向かつていつてしまつた。

おそらく彼女は腹が減つているだけなのだろうと俺は心の中だけで思つていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8550v/>

---

天使と悪魔の共同戦線

2011年12月31日16時49分発行